# 『中書王御詠』注釈稿（三）

中川博夫

## 例言

一、鎌倉幕府第六代将軍宗尊親王の家集の一つ『中書王御詠』（三五八首）の注解を試みる。

一、1番歌から始めて順番どおりに注釈を付して、数次の分載とする。今回は、冬（131～160）と恋（161～209）を取り上げる。

一、次の各項からなる。

①整定本文。②本文を改めたり注記が必要な場合は、本文の項目を立てる。③通釈。④本歌・本説・本文（前項の「本文」とは別、基にした漢詩文の意）、参考（宗尊が踏まえた歌ならびに解釈上に必要な歌）、類歌（表現・趣向が類似した歌）、影響（宗尊歌を踏まえた歌）、享受（宗尊歌を本歌取りした歌）。⑤出典。⑥他出。⑦語釈。⑧補説。②と④～⑧は、無い場合には省略。

一、底本は、冷泉家時雨亭文庫蔵本の影印版『冷泉家時雨亭叢書　第三十一巻　中世私家集　七』（二〇〇三・八、朝日新聞社）に拠る。適宜、その転写本である宮内庁書陵部蔵本（五〇一・八七）を参照する。

一、本文は、次の方針に従う。

1. 底本の翻印は、通行の字体により、歴史的仮名遣いに改め、意味や読み易さを考慮して、適宜ひら仮名を漢字に、漢字をひら仮名や別の漢字に改める。送り仮名を付す。清濁・読点を施す。なお、原則としてひら仮名の反復記号は用いない。「謌」「哥」は「歌」に統一する。
2. 本文を改めた場合、底本の原状は右傍に記す（送り仮名を付した場合は傍点）。私にふり仮名を付す場合は（　）に入れて区別する。その他、問題点や注意点は、適宜特記する。
3. 他資料の本文との異同は、漢字・仮名の別や仮名遣いの違いや送り仮名の有無など、表記上の違いは原則として取らない（解釈の分かれる可能性のある表記上の違いである場合は参考までに注記する）。
4. 底本の本行の原状（見消ち等の補訂は本行に復元）に対して他資料の本文との異同を示す。
5. 底本の和歌には、合点（鉤点）が付されていて、まま胡粉の塗り消しがあるという。影印版では判然としないので、時雨亭叢書の解題に付載の一覧に拠りつつ、これらを〔補説〕に記すこととする。また、和歌の下や左下などに書かれている評詞は、統一して和歌の左に三字下げで記す。
6. 歌頭に通し番号を付した（新編国歌大観番号と同じ）。

一、引用の和歌は、特記しない限り新編国歌大観本に拠る。万葉集は、原則として西本願寺本の訓と旧番号に従う。なお、表記は私に改める。歌集名は、原則として「和歌」を省く。その他の引用は、日本歌学大系本他の流布刊本に拠る他、特殊な本文の場合には特記する。

## 注釈

秋

初秋

81　あはれまた空に浮き立つ心かな夕べの雲の秋の初風

〔通釈〕秋

初めの秋

ああまた再び、何となく浮き立ち落ち着かなくなる私の心であることだな。夕方の空に浮かぶ雲を吹く秋の初風が立つよ。

〔本歌〕天雲の浮きたることと聞きしかどなほぞ心は空になりにし（後撰集・雑二・一一四二・女の母）

〔参考〕あはれまたいかに忍ばむ袖の露野原の風に秋は来にけり（新古今集・秋上・二九四・通具。千五百番歌合・秋一・一〇八九。自讃歌・五二。新三十六人撰正元二年・一八二。新時代不同歌合・八二）

あはれまた今日も暮れぬとながめする雲のはたてに秋風ぞ吹く（御室五十首・秋・五二〇・定家）

いつしかと物のあはれを誘ひ来て心に宿す秋の初風（正治初度百首・秋・一三九・惟明親王）

秋になる風のけしきのかはるより心浮き立つ空の村雲（為家集・秋・秋風建長五年七月・五四六）

〔類歌〕身にしみて心も空に浮き立つは雲のはたての秋の初風（長景集・秋・立秋風・四三）

〔影響〕 思ふより空に憂き立つ心こそ涙の雨の雲となるらめ（耕雲千首・恋・寄雨恋・六一一）

〔語釈〕 ○空に浮き立つ―何気なくそぞろに平静ではなくなるとの意。「空に」は何となくの意に「雲」「初風」の縁で天空にの意が掛かる。「浮き」は「雲」の縁で雲が浮かぶ意が掛かり、「立つ」は「初風」の縁で風が吹き起こる意が掛かる。この句の先行例は、宗尊の命令で撰されたらしい『東撰六帖』（抜粋本）の「池水の氷残さぬ蘆間より空に浮き立つすがの村鳥」（冬・水鳥・四一八・親行）だが、これは「鳥」が空に飛び上がる様を言う。「心」について言うのは該歌が早い。

〔補説〕 「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」（古今集・秋上・一六九・敏行）を初めとする、風に拠って秋の訪れを知るという類型・通念と、「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮」（新古今集・秋上・三六二・西行）に典型を見る、秋の夕方は「あはれ」を催すという類型・通念との交点上に詠まれた歌。

本歌取りで、かつ新古今時代以降の幾つかの参考歌の言詞や想念をも取り込んだような詠作だが、それは宗尊の詠作の特徴の一つである。

類歌の安達（城）長景の一首は、あるいは宗尊詠の影響下にあるかもしれない。『長景集』には「文永十年八月の初め、中務卿親王御悩の由、聞こえ侍りしかば、御とぶらひの御使に、都へ上り侍りし程に、七月二十九日御隠れにて、むなしく帰り下りて後、円勇律師が許へ遣はし侍りしは／思ひやれ都の秋の袖の露今年は深き人の涙に」（雑・一四六）と見え、長景の宗尊との縁故が窺われる。また、影響に挙げた耕雲（花山院長親）の一首は、他にも散見する宗尊の歌の南朝歌人の摂取の中で影響歌と捉えておきたい。

歌頭に合点あり。

（初秋）

82　なほざりに身に染むものと思ひけん昔も恋し秋の初風

〔通釈〕（初めの秋）

（以前は）ほとほどに、秋の初風が身に染みるものと思ったのだろう、そんな昔も恋しい。（今は）切実に身に染みて感じる秋の初風よ。

〔参考〕秋吹くはいかなる色の風なれば身に染むばかりあはれなるらん（詞花集・秋・一〇九・和泉式部。和泉式部集・風・一三二、八六〇重出。古来風体抄・五四四。定家八代抄・一二六八。興風集・五四）

衣手のまだ薄ければ朝まだき身に染むものは秋の初風（久安百首・秋・三三〇・顕輔）

〔語釈〕○なほざりに―「染む」と「思ひけん」両方にかけて解される。○思ひけん―「けん（けむ）」は、終止形にも連体形にも解されるが、後者と見ておく。○昔も恋し―四句切れ。「昔も恋ひし」（昔も恋い慕ったの意）は、一首が不通であり、取らない。「昔」は、①自分自身の過去か、②一般的な往昔か。①に解する。後出だが、正徹の「呉竹を馬になしつるいにしへを思ふも恋し窓の北風」（正徹千首・雑・窓竹・八七四。草根集・雑・窓竹・九五五八、二句「馬となしつる」）が類似する。

五十首歌合に、秋歌

83　吹けばとて思ひ驚く人もなし夢の憂き世の秋の初風

〔通釈〕五十首歌合で、秋の歌

風が吹くからといって、はっと思って秋だと気がつく人もいない。悟り覚める人のない夢のようなこの憂き世に吹く秋の初風よ。

〔参考〕窓近きいささむら竹風吹けば秋に驚く夏の夜の夢（新古今集・夏・二五七・公継）

はかなさを思い驚く心あらば憂き世の夢も覚めざらめやは（六条院宣旨集・雑・夢・九六）

〔影響〕吹けばとて稲葉のそよぐ音もなし風より茂き露の重さに（李花集・秋・秋田を・三六〇）

〔語釈〕○五十首歌合―未詳。→13。○思ひ驚く―…と思ってはっと気がつく。「驚く」は「夢」の縁で悟り目覚める意が掛かる。

〔補説〕民部少輔顕良の女で俊成の妻・八条院坊門局母であった六条院宣旨の歌に倣ったか。とすると宗尊の学習範囲の広範さを見ることになる。→87。

影響歌は、用例希少ながら初句と「もなし」の一致のみだが、他にも宗尊から宗良への影響が認められるので、その一連と見ておく。

七夕

84　天の川逢ふ瀬まれなる水上の定めてけりな秋の一夜は

〔通釈〕七夕

天の川は七夕の両星の川の瀬ならぬ逢う瀬が稀である、それは、（再び堀川の水が澄み天皇が堀河院に住むこと

を定めたように）水上が決めたのであったな。秋の一夜（七月七日の夜だけに逢うの）は。

〔本歌〕水上の定めてければ君が代にふたたびすめる堀川の水（和漢朗詠集・水付漁父・五二〇・好忠。詞花集・雑下・円融院御時、堀河院にふたたび行幸せさせ給けるによめる・三八五、初句「水上を」）

〔参考〕恋ひ渡る涙の淵となりはてて逢ふ瀬まれなる天の川かな（金葉集初度本・秋・二四〇・勝超）
天の川逢ふ瀬まれなる七夕によそふばかりの契りやはせし（続後撰集・秋上・二六四・小弁）

〔影響〕水上のいかに定めて天の河逢ふ瀬は秋の一夜なるらむ（文保百首・秋・一九三五・有忠）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・秋・七〇三。

〔語釈〕○逢ふ瀬―逢う折節の意。「瀬」は「天の川」「水上」の縁で川の浅瀬の意が掛かる。○水上の定めてけりな―本歌の「水上の定めてければ」に拠る措辞だが、ここでは「水上」が何を指すかは漠然としている。→補説

〔補説〕本歌の「水上」は、貞元元年（九七六）五月十一日の内裏焼亡後の七月二十六日に円融天皇を自邸である堀河院に遷御させ住まわせた（日本紀略）、関白藤原兼通を寓意する。「ふたたびすめる」は、兼通没後の天元五年（九八二）十一月七日にまた内裏が焼亡し、十二月二十五日に再度円融天皇が堀河院に遷幸した（日本紀略）ことを言う。「すめる」は「住める」に「堀川の水」の縁で「澄める」が掛かる。
歌頭に合点あり。

七夕別

85　七夕の天の川舟漕ぎ返り同じ秋をやまた契るらん

〔本文〕秋をや―底本「秋を」（「や」は右に傍記）とあり。

〔通釈〕七夕の別れ

七夕の天の川を、（牽牛の）川舟が繰り返し漕いで戻りながら、同じ（織女と逢う七月七日の）秋を繰り返しまた契っているのだろうか。

〔本歌〕掘江漕ぐ棚無し小舟漕ぎ返り同じ人にや恋ひ渡りなむ（古今集・恋四・七三二・読人不知）

〔参考〕天の川雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ返る見ゆ（古今六帖・第一・あまのはら・二五一・人麿）

〔類歌〕秋ごとの天の川舟漕ぎ返り同じ人にや別れ来ぬらん（草庵集・秋上・七夕後朝・四三四）

〔影響〕今朝やはや天の川舟漕ぎ返りまた来む秋を待つや苦しき（一宮百首・七夕朝・三七）

〔語釈〕○天の川舟―「天の川」から「川」を重ねて「川舟」へ鎖る。○返り―本歌を承け、帰る意に繰り返しする（漕ぐ）意が掛かり、後者の意味で「また契るらん」にかかる。

〔補説〕類歌も影響歌も、同じく『古今集』の「堀江漕ぐ」歌を本歌にする。後者の作者南朝の尊良親王には、他にも宗尊詠からの摂取が認められるので、これもその一連と見た。前者については、作者頓阿のさらなる宗尊詠との関わりを追及する中で、改めて定位されるべきであろう。

荻

86　聞くたびに見し世の秋の恋しきは荻の葉風や昔なるらむ

未不落居候

〔通釈〕荻

その音を聞くたびに、かつて見た時世が恋しいのは、荻の葉風そのものが昔からのものであるからだろうか。

未だ落ち居ず候ふ。（いまだに納得はしないでおります。）

〔参考〕聞くたびに涙も露もこぼれきてあはれつきぬは萩の上風（正治初度百首・秋・二二四三・信広）

ながむれば見し世の秋も忘られず月に昔の影や添ふらん（続後撰集・秋中・三七一・知家）

つくづくとながむるままに恋しきは霞める方や昔なるらん（百首歌合建長八年・春・七七・忠定。続古今集・雑上・一四九一）

吹き過ぎてこれかとにほふ梅が香のそなたの風や昔なるらん（宝治百首・春・梅薫風・二七六・俊成女。万代集・春上・一二四）

秋来ぬと聞きつるからに我が宿の荻の葉風の吹きかはるらん（千載集・秋上・二二六・侍従乳母）

〔語釈〕○聞くたびに―参考の『正治初度百首』詠に学んでいよう。宗尊の別の一首「聞くたびに物ぞ悲しき来る秋は我がためなれや荻の上風」（柳葉集・巻一・弘長元年五月百首歌・秋・二四）は、より明確にそれを示していよう。安達（城）長景（→81）もこの歌を、「聞くたびに涙こぼれて悲しきは人待つ暮の荻の上風」（長景集・藤大納言家、題を探り侍りしに・待恋・九七）と摂取している。○見し世の秋―『源氏物語』の「月影は見し世の秋に変

はらぬを隔つる霧のつらくもあるかな」（源氏物語・賢木・一五五・光源氏）が早い。この歌を宗尊は「月だにも見し世の秋にかはれとや今は涙のかき暗すらん」（中書王御詠・雑・二一五）と摂取している。○未不落居候―本集に於ける為家の評詞は、宗尊詠を批判する趣であるので、「未」は再読せずに解しておく。

〔補説〕 為家の「未不落居候」の批判は、「荻の葉風」が何故それを「聞くたびに見し世の秋」が「恋し」くなるのかの根拠が不明で、かつ下句の「荻の葉風や昔なるらむ」の措辞が未熟である、という点に向けられたか。

参考歌の『百首歌合建長八年』は、他の事例から見て、宗尊が披見したと推定される歌合である。これを含めて、いずれも宗尊が披見していても不思議はない参考の諸歌の言詞に負った詠作であろう。前代から当代までの歌に倣うのは宗尊の方法の一つである。

（荻）

87　いつまでか老いをも知らで秋の夜の寝覚めを荻の音にかこたん

〔通釈〕（荻）

いったいいつまで自分の老いも悟らないで、秋の夜の寝ての目覚めを、（老い故ではなく）荻の音のせいにするのだろうか。

〔参考〕 いつまでか長き夜からとかこちけん老いの寝覚めは折を分くかは（続古今集・雑下・一八一四・後鳥羽院。秋風集・雑下・一二四一、二句古典文庫本同上、新編国歌大観本「なびきよからと」）

心していたくな鳴きそきりぎりすかごとがましき老いの寝覚めに（続後撰集・秋中・三八三・後鳥羽院下

野。宝治百首・秋・暁虫・一五五九。秋風抄・秋・六九。現存六帖・きりぎりす・三三九）

秋の夜はひとり寝覚めのとことはに音するものは荻の上風（六条院宣旨集・秋・をぎ・四二）

〔類歌〕荻原や末越す風ぞかこたるる寝覚め老いのならひなりけり（和漢兼作集・秋上・寝覚荻・五五六・師継）

〔補説〕参考の『六条院宣旨集』歌については、83参照。

萩

88　今しはや咲きにけらしなさ牡鹿の朝臥す小野の秋萩の花

初五文字不甘心候（墨滅）

〔通釈〕萩

今早くも、咲いてしまったらしいな。牡鹿が朝に臥して寝ている間に、小野の秋萩の花は。

初めの五文字は甘心せず候ふ。（墨滅）

〔参考〕今しはや鳥も鳴くなり東路のこてのよびさか誰か越ゆらん（宝治百首・雑・暁鶏・三二二一・真観）

秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今や鳴くらむ（古今集・秋上・二一七・敏行）

いとはやも咲きにほふらしを山田のかりほの宿の秋萩の花（万代集・秋上・八三二・実経。続古今集・秋上・三二五）

さ牡鹿の朝臥す小野の秋萩を折れぬばかりも置ける露かな（古今六帖・第二・しか・九四七・作者不記）

さ牡鹿の朝臥す小野の秋萩を折るとはなしに折りやしつらむ（雅成親王集・萩・一八）

〔類歌〕今よりや咲きにほふらむさ牡鹿の声聞く小野の秋萩の花（新千載集・秋下・四五八・伏見院）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・秋・七一一。

〔語釈〕○今しはや―今早くも。「し」は強意の助詞。参考の真観詠に学ぶか。宗尊は該歌と同じ「三百六十首歌」（夏）で「今しはや空曇りあひてふる里のあしも休めぬ五月来ぬらし」（柳葉集・六九一）とも詠む。勅撰集では京極派の『玉葉集』の「今しはや花咲きぬらし初瀬山朝ゐる雲の峰にかをれる」（春上・一三五・実兼）と『風雅集』の「今しはや待たるる月ぞにほふらし群雲白き山の端の空」（秋中・五八四・良基）のみ。南朝の『新葉集』にも「禊ぎする八十島かけて今しはや波をさまれる時は見えけり」（賀・一四二三・後村上院）があって、他にも南朝歌人に作例が散見する。○さ牡鹿の朝臥す―鹿が寝ていて鳴いていないことを言う。

〔補説〕合点を見消ち（「ヒ」）しさらに白滅。評詞を墨滅。取り消された評詞は「初めの五文字（初句）は快くは思われなくございます」といった意。この初句への批判とその取り消しは、耳慣れない句形で、しかし実は『宝治百首』に作例があったことに気付いた結果を反映か。

89　薄

色につく人の心の花薄ほに出でぬべき言の葉もなし

〔通釈〕薄

花の色ならぬ色恋に執着する（しかしうつろいやすい）人の心の花なので、その花薄の穂に出るように、表に出

てしまってよいはずの言葉はないよ。

〔参考〕色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（古今集・恋五・七九七・小町）

人目守る我かはあやな花薄などかほに出でて恋ひずしもあらむ（古今集・恋一・五四九・読人不知）

色につき匂ひにめづる心とも梅が枝よりや移りそめけん（俊成五社百首・賀茂・春・梅・一〇七。玉葉集・春上・六六・俊成）

さらずとてただには過ぎじ花薄招かで人の心をも見よ（新勅撰集・秋上・二四五・長方）

〔類歌〕身は秋に埋もれ果てて花薄ほに出すべき言の葉もなし（慕風愚吟集・玉津島社毎月法楽の百首に・薄・八七）

〔影響〕色につく人の心の花もまた秋は千ぐさに移る野辺かな（芳雲集・秋・草花・一八九六）

〔語釈〕○色―「花」の色合い。「人の心」の縁で色恋、恋愛の意が掛かる。○人の心の花薄―「人の心の花」から「花」を重ねて「花薄」へ鎖る。○ほに出でぬ―「花薄」までが有意の序で、「穂に出でぬ」との掛詞で「ほ（秀）に出でぬ」（はっきりと表に出てしまう）が起きる。○言の葉―言詞の意。「花薄」の縁で植物の「葉」が響く。

〔補説〕秋の「薄」題の歌ながら、人事、それも言わば恋について述懐した趣であり、『正徹物語』が言う「宗尊親王は四季の歌にも、良もすれば述懐を詠み給ひしを難に申しける也。物哀れの体は歌人の必定する所也。此の体は好みて詠まば、さこそあらんずれども、生得の口つきにてある也」という評に通じる一首である。

三～五句が酷似する類歌に挙げた尭孝の一首は、あるいは該歌から影響された可能性もあるか。影響に挙げた武者小路実陰の一首は、実陰が宗尊詠に学び得たか否かの問題を含めて検証されるべきであろう。

歌頭に合点あり。

葛

90　報ひある身をかへり見て真葛原ただ前の世に秋風ぞ吹く

是体心、信実朝臣詠候歟

〔通釈〕葛

応報あるこの身を顧みて、葉裏が返り見える真葛原に吹く秋風のように、ただ前世には恨めしい秋風だけが吹いているのだ（と思う）。

是の体の心、信実朝臣詠じ候ふか。

〔参考〕ものをのみさも思はする前の世の報ひや秋の夕べなるらん（新撰六帖・第一・あきの晩・一五四・信実。万代集・秋上・九五三。秋風抄・序）

うけ難き身の報ひさへ忘られてなほ前の世ぞ悲しかりける（続後撰集・雑中・一一八〇・雅成親王。秋風集・雑中・一二二三・）

〔出典〕文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・葛・二〇九。拾遺風体集・雑・述懐・四四八。

〔語釈〕○葛―『竹風抄』では、六帖題（『古今六帖』あるいはそれに準拠しつつ題を取捨した『新撰六帖』）に基づいた五百首歌の中の題の一つで、『古今六帖』（第六・草）の「くず」に当たる。○かえり見て―「顧みて」に「真葛原」の縁で葛の葉が裏返ってそれを見ての意が掛かる。

〔補説〕為家の評詞は、「このような風体の趣意は、信実朝臣が詠じましたか。」といった意味で、参考に挙げた信実

の「ものをのみ」歌を念頭に置いたものであろう。

「秋風の吹き裏返す葛の葉の恨みてもなほ恨めしきかな」（古今集・恋五・八二三・貞文）を本歌にした歌は多い。「真葛原」を用いた公経の「かれ果てて言の葉もなき真葛原なにをうらみの野辺の秋風」（続後撰集・恋五・一〇〇二）もその一首。その後に宗尊は、「真葛原うらみしころの秋風やかれがれになるはじめなりけん」（宗尊親王三百首・恋・二七〇）と詠んでいる。これらは恋歌だが、「秋風」の吹く「真葛原」の印象は、葛の葉の「裏見」の掛詞の「恨み」と結び付いていたかと思われる。該歌も、その印象に従った感があろうか。

虫

91　つれもなき人を頼まぬ虫の音も暮るる夜毎に鳴きまさるなり

〔通釈〕　虫

つれなく冷淡な人をそもそも頼みとすることのない虫、その声も、暮れる夜のたび毎にいっそう泣くように鳴きまさって聞こえる。

〔参考〕　つれもなき人を頼まばいかがせむ暮るる夜毎の荻の上風（百首歌合建長八年・秋・一五八・顕朝）

さ筵に人をば誰と頼まねど暮るる夜毎に秋風ぞ吹く（内裏歌合建保二年・秋風・五・家隆。壬二集・秋・二四一一）

虫の音はこの秋しもぞ鳴きまさる別れの遠くなる心ちして（金葉集正保版二十一代集拾遺・雑下・七〇六・藤原知陰。後葉集・哀傷・四一八・康資王母。続詞花集・哀傷・三九八・同上。今鏡・ねあはせ・九六・

同上。宝物集・第三冊・三一九）

〔影響〕つれもなき人をやあだに頼むらん暮るる夜毎のまつ虫の声（延文百首・秋・虫・二四四九・有光）
つれもなき人をたのもの秋風も身に寒き夜と鹿ぞ鳴くなる（宗良親王千首・秋・田鹿・三八五）

〔語釈〕○鳴き―「人」「頼まぬ」の縁で「泣き」が掛かる。

〔補説〕参考歌の中、他の事例からも、宗尊は『百首歌合建長八年』を披見していたと思しく、また家隆詠に目を向けていても不思議はない。「虫の音」「鳴きまさる」の措辞の原拠となる「虫の音は」歌は、直接念頭に置いたものではなく、当然の知識の一つであったか。
影響歌の後者は、宗尊歌の摂取が強く推認される南朝の宗良の歌であり、これもその一首と見ておく。前者については、言詞の一致と趣向の立て方から、宗尊の歌を踏まえているように思われるが、なお検討する必要があろう。
歌頭に合点あり。

（虫）

92　茂(しげ)き野(の)と荒(あ)れにし里(さと)の秋風(あきかぜ)に人こそ見えね松虫(まつむし)の声(こゑ)

〔通釈〕（虫）
草深く生い茂る野となって荒れてしまった里に吹く秋風の中で、飽きた人は訪れずその姿は見えないけれど、人を待つように松虫の声がする。

〔参考〕茂き野と荒れはてにける宿なれや籬の暮に鶉鳴くなり（六百番歌合・秋・鶉・三四八・寂蓮）

君が植ゑし一群薄虫の音の茂き野辺ともなりにけるかな（古今集・哀傷・八五三・御春有助）
秋の野に来宿る人もおもほえず誰を松虫ここら鳴くらん（後撰集・秋上・二六〇・貫之）
人問はぬ浅茅が原の秋風に心長くも松虫の鳴く（続後撰集・秋中・三八二・土御門院。土御門院御集・一二九。秋風集・秋上・二九二）

〔語釈〕○茂き野と荒れにし里―参考の寂蓮詠も、それと同じ『六百番歌合』（夏・夏草・一九八）の家隆詠「茂き野と夏もなりゆく深草の里は鶉の鳴かぬばかりぞ」も、「年を経て住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ」「野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君か来ざらむ」（伊勢物語・百二十三段・二〇六・男、二〇七・女。古今集・雑下・九七一・業平、九七二・読人不知・三句「鶉と鳴きて年は経む」）に基づく俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」（千載集・秋上・二五九）の歌を踏まえていよう。ここも、その山城国の歌枕「深草の里」が想起される。○秋風―「荒れにし里」「人こそ見えね」「待つ（松）」の縁で「秋」に「飽き」が掛かる。○松虫―「荒れにし里」「飽き（秋）」「人こそ見えね」の縁で「松」に「待つ」が掛かる。

〔補説〕参考の土御門院歌に先行して、「人問はぬ真葛が原の秋風に恨みて明かす松虫の声」（御室五十首・秋・四七八・有家）がある。

鶉

93　秋深き磐余の野辺の小萩原うつろふ露に鶉鳴くなり

〔通釈〕鶉

秋が深い磐余の野辺の小萩原は、（それによって萩の下葉が）色づく露に、鶉が鳴くのが聞こえる。

〔本歌〕鶉鳴く磐余の野辺の秋萩を思ふ人とも見つる今日かな（和漢朗詠集・秋・秋興・丹比国人）
秋風に下葉や寒くなりぬらん小萩が原に鶉鳴くなり（後拾遺集・秋上・三〇三・藤原通宗）

〔参考〕ひるとのみいはれの野辺の月影は露ばかりこそよると見えけれ（金葉集橋本公夏筆本拾遺・秋・五二・源定信）
我が恋は雪降り埋む小萩原うつろふ露を恨みしものを（仙洞影供歌合建仁二年五月・遇不逢恋・五八・定家）
朝な朝な散りゆく萩の下紅葉うつろふ露も秋やたけぬる（拾遺愚草員外・〔建保六年春韻字四季歌〕・秋・鶏犬声稀隣里静、遥村人定漏万闌・六五〇）

〔他出〕夫木抄・秋五・鶉・六帖題御歌、鶉・五六六一。

〔語釈〕○磐余―大和国の歌枕。磯城郡から高市郡にかけて、現奈良県桜井市と橿原市の辺りの地で、香具山の北東に位置。○鶉―『夫木抄』の集付によれば、90と同様に、六帖題（『古今六帖』あるいは『新撰六帖』）の一つで、『古今六帖』（第二・野）の「うづら」に当たる。

百首の歌の中に

94　あはれ我が涙の外の秋ならば置きける露や袖に知らまし

〔通釈〕百首の歌の中で
ああ、私の袖に流す涙とは無関係の秋でもしあるならば、置いた秋の露がそれだと袖に分かろうものを。

〔参考〕あはれ我が多くの春の花を見て染め置く心誰に伝へむ（新勅撰集・春下・九九・西行）
荻の葉に風の音せぬ秋もあらば涙の外に月は見てまし（新勅撰集・秋上・二二三・覚助。三十六人歌合元暦・七。新三十六人撰正元二年・六三、四句「涙の外の」。新時代不同歌合・二八七）
柴の戸に雨と時雨るる木の葉かな涙の外に袖は濡れねど（続古今集・冬・建長五年十月三首歌に、山家落葉・五五六・為教）
初秋の夕べ知らする白露は昨日の袖の涙なりけり（土御門院御集・二八七）

〔類歌〕涙にはさらでも濡るる我が袖を知らでや秋の露は置くらん（三十六人大歌合弘長二年・一五三・能清）

〔語釈〕○百首の歌―未詳。本集には他に「百首歌」と併せて、同様の詞書は55、78、128、143、156、162、176、191に見える。○あはれ我が―初句に置くのは参考の『新勅撰集』の西行歌が勅撰集の初出。早くは、大中臣輔親の「あはれ我が昔ながらの今日ならば心の程に返しましやは」（兼澄集・八一）や和泉式部の「あはれ我が心にかなふ身なりせば二つ三つまでなはも見てまし」（和泉式部続集・二〇九）があり、初句に置く以外の勅撰集の初例は『後拾遺集』の「ながむれば月傾きぬあはれ我がこのよの程もかばかりぞかし」（雑一・八六六・深覚）。

〔補説〕「草葉には玉と見えつつ侘び人の袖の涙の秋の白露」（新古今集・秋下・四六一・道真）等に象徴される、「秋」の「袖」に置く「涙」と「露」の見紛いの通念・類型を踏まえる。
参考の土御門院の歌に負ってか、宗尊は『宗尊親王三百首』で「涙には秋の夕べは告げなくにあはれ知らする袖の露かな」（秋・一一三）と詠んでいる。
「涙の外」は宗尊好尚の詞で、次の作例があり、宗尊詠の述懐性を示している。
空も憂き時や知るらむ神無月涙の外のまた時雨れつつ（柳葉集・巻一・弘長元年五月百首歌・冬・四〇）

今日はまた涙の外に菖蒲草長きねをさへ袖にかけつつ（柳葉集・巻二・弘長二年十二月百首歌・昌蒲・三一四）

なほざりの秋の空行く月だにも涙の外の影をや見みし（中書王御詠・雑・二一八）

返しても涙の外の玉は見ず夜半の衣のうらめしの身や（中書王御詠・雑・二八二。竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・玉・一六八、五句「うらめしのよや」）

春の月涙の外に見る人や霞める影のあはれ知るらん（竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・春月・五〇〇）

冬来ぬと涙の外も時雨るなりいかがはすべき墨染の袖（竹風抄・巻五・〔文永九年十一月頃百番自歌合〕・初冬・九五八）

類歌の作者、一条能清は将軍宗尊幕下の関東祇候の廷臣歌人。

文永三年秋の頃、初雁を聞きて

95 我もさぞ世をあき風に浮かれ来て都に侘ぶる初雁の声

**〔本文〕** ○聞きて―底本「き□□」（「き」の下「丶て」と思しいが不分明）を、書陵部本の「き丶て」を参照し、「聞きて」とする。

**〔通釈〕** 文永三年の秋の頃、初雁を聞いて

私もそうだ。世の中を飽き、秋風に（北国を）浮かれ出て来て、都に心細く過ごす初雁の鳴き声よ。（私は東国

を憂かれ出て来て都で侘びている）。

〔参考〕都人いかにと問はば山高み晴れぬ雲居に侘ぶと答へよ（古今集・雑下・九三七・小野貞樹）

初雁のはつかに聞きし言つても雲路に絶えて侘ぶる頃かな（新古今集・恋五・一四一八・源高明）

〔類歌〕今さらに立ち帰るべきくまぞなき世をあき霧と身は浮かれても（安嘉門院四条五百首・新日吉社・霧・三五三）

我がごとや世をあき果てて奥山に妻恋ひ侘ぶるさ牡鹿の声（風葉集・雑一・一二三三・まよふ琴のねの中納言）

〔語釈〕○文永三年の秋の頃―宗尊二十五歳の文永三年（一二六六）の秋七月に将軍職から失脚し、同月八日に鎌倉を離れて二十日に入京した、その秋の頃、ということ。○世をあき風に―「世を飽き」から「あき」を掛詞に「秋風に」へ鎖る。古く「うちしくに物を思ふか女郎花世をあき風の心憂ければ」（新撰万葉集・下・五四六・作者不記）の例がある。「かりにくる人にとこよを見せければ世をあき風に思ひなるかな」（続詞花集・恋下・六三七・匡衡）の例もある。○浮かれ来て―「くたかけはいづれの里を浮かれ来てまだ夜深きに八声鳴くらん」（正治初度百首・鳥・七九五・忠良）や「浮かれ来てさこそは昼と迷ふらめ明くるも知らぬ月の夜烏」（現存六帖・からす・八五三・実氏か）等に学ぶか。

〔補説〕既に関東に地歩を得て足かけ十五年を過ごして鎌倉を「故郷」とも言いなしていた宗尊の、謀反の嫌疑を掛けられて鎌倉から京都へ送還され、しかしその京都でも六波羅の北条時茂邸で幕府方の監視下に置かれていた境遇に対する述懐であろう。秋の「初雁」が「都」に「侘ぶ」という趣向には、「故郷の花の都に住み侘びて八雲立つてふ出雲へぞ行く」（後拾遺集・別・四九六・大江正言）や「春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやなら

へる」（古今集・春上・三一・伊勢）が踏まえられているようにも思われる。

初雁

96　秋霧のうへかた山の峰越えて霞みて去にし雁ぞ来にける

〔通釈〕　初雁

秋霧の上、宇敝可多山の峰を越えて、春には霞みがかって去って行った雁がやって来たのだった。

〔本歌〕　春霞霞みて去にし雁がねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に（古今集・秋上・二一〇・読人不知）

竹敷の宇敝可多山は紅の八入の色になりけるかも（万葉集・巻十五・三七〇三・大蔵忌寸麿）

〔参考〕　峰越えて今ぞ鳴くなる初雁の初瀬の山の秋霧の空（土御門院百首・秋・初雁・四四）

峰越えて秋来し道や迷ふん霞の北に雁も鳴くなり（土御門院御集・詠五十首和歌・春・雁返炉峰頂北霞・一三三）

〔語釈〕　○秋霧のうへかた山の―本歌の『古今集』歌の「秋霧の上」と『万葉集』歌の「うへかた山」を取り、「秋霧の上」から「宇敝可多山の」へ鎖る。「宇敝可多山」は、対馬の「竹敷」（現長崎県対馬市美津島町。対馬の中央部，浅茅湾南東岸の入り組んだ所）の海岸線に近い丘を言ったという。

〔補説〕　宗尊は本歌の万葉歌を、「弘長元年五月百首歌」でも「竹敷のうへかた山や時雨るらむうらまの紅葉色まさりゆく」（柳葉集・巻一・秋・一〇七）と、本歌に取って詠じている。この「うらまの紅葉」は、同じ『万葉』の一首前の歌「竹敷の浦まの紅葉我行きて帰り来るまで散りこすなゆめ」（巻十五・三七〇二・壬生使主宇太麿）か

ら取る。

秋夕

97　ながめても身をばかくやは愁へ来しあはれ昔の秋の夕暮

〔通釈〕秋の夕べ

物思いに眺めても、我が身をこのように愁えて来たか。いや、来なかったはずだ。ああ昔の秋の夕暮よ。

〔参考〕ながめてもあはれと思へおほかたの空だに悲し秋の夕暮（新古今集・恋四・一三一八・長明）

あるじなきすみかに残る桜花あはれ昔の春や恋しき（続古今集・哀傷・花山にまかりたりけるに、僧正遍昭が室の跡の桜の散りけるを見て・一四一〇・国基。万代集・雑一・二七八五。国基集・七三。新時代不同歌合・二一八）

〔出典〕文永三年八月百五十首歌。→7。

〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・秋夕・五二五。

〔補説〕文永三年（一二六六）七月の将軍失脚・西上帰洛直後の八月の定数歌の一首。下句に往昔をしみじみと偲ぶ懐旧の情が表出される。これは、失脚後の宗尊の詠作に通底する傾きである。

六帖の題の歌に、秋雨

98　暮るる夜の月のためとや急ぐらん浮雲早き秋の村雨

〔通釈〕六帖の題の歌に、秋の雨

暮れる夜に出る月の為だと急ぐのだろうか。降らせる浮雲の流れが早い、秋の村雨よ。

〔参考〕光添ふ月のためとや暮るるより比良山嵐うみに吹くらん（宝治百首・秋・湖月・一六三四・承明門院小宰相。秋風抄・秋・七九。秋風集・秋上・三二八）

〔影響〕にはかにも風の涼しく吹き立てて浮雲早き夕立の空（嘉元百首・夏・夕立・一七二四・為信）

出でぬより月のためなる空なれや浮雲澄める秋の夕暮（伏見院御集・秋歌中に・九四三）

〔語釈〕○六帖の題の歌―『古今六帖』もしくは『新撰六帖』の題に基づく詠作。他に、26、45、62、80、166、190、193、257が同機会詠か。「弘長文永のはじめ、九月六日六帖の題あまねく関東の好士に下されて十三夜の御会に詠進すべきよし仰せ下さるる時、僅かに八ケ日の間、六帖一部の題五百廿余首を奉る事、寂恵がほか公朝法印、円勇一両人に過ぎず」（寂恵法師文）と伝えるように、鎌倉で六帖題歌会を催し、また後藤基政に『東撰六帖』を撰ばせたと思しい宗尊の、六帖題歌に対する関心の高さを示すと見てよく、それは大量の定数歌を立て続けに詠じて和歌に習熟し和歌に耽溺しようとする姿勢の顕れなのであろう。ちなみに、この「弘長文永のはじめ」の「九月十三夜」の「六帖題」歌会（寂恵法師文）の催行時期については、次のように推定される。参加者公朝の出詠歌に、「六帖題、さは／今年はや四十も過ぎぬ蒲を切る沢辺の水に袖濡らしつつ」（夫木抄・雑八・沢・一二三九四）がある。この「今年はや四十も過ぎぬ」につけば、嘉禄二年（一二二六）生まれの公朝の四十歳は、文永二年（一二六五）なので、早くとも同年かその翌年の詠作かということになる。また、同じく公朝の出詠歌「六帖題、庭／秋の野に庭をば造れ今もかも布留の滝見る君もこそ来れ」（夫木抄・雑八・滝・ふるの滝、大和・一二三七二）は、『新撰六帖』の「宿しめてかひこそなけれ苔の上の庭造りせぬ山の岩かど」（第二・には・八一九・信実）に学

びつつ、文永二年（一二六五）七月七日の『白河殿七百首』の「今もまた行きても見ばや石の上布留の滝つ瀬跡を尋ねて」（雑・名所滝・六二〇・後嵯峨院。続拾遺集・雑上・一〇九八）にも触発された一首ではないだろうか。これは、右の推定と矛盾しない。従って、宗尊の下命した「九月十三夜六帖題歌会」（仮称）の催行時期は、文永二年（一二六五）～三年（一二六六）のことと推定されるのである。拙稿「僧正公朝の和歌注釈稿（四）」（『鶴見日本文学』二二、平三〇・三）参照。○秋雨―『新撰六帖』の第一の「秋雨」。『古今六帖』には見えない題。○月のため―西行の「月のため心やすきは雲なれや憂き世に澄める影を隠せば」（西行法師家集・秋・月・一八九）が早い。宗尊はこれにも学ぶか。

**〔補説〕** 気象の動態を叙している点で、京極派に通う。用詞の点でも、伏見院への影響が認められるのは、京極派の宗尊詠を重視する姿勢の反映か。

直接には参考歌に拠った詠作だろうが、あるいは西行の「浮雲の月のおもてにかかれども早く過ぐるは嬉しかりけり」（山家集・秋・月歌あまたよみけるに・三七一）や「なかなかに一村雨に浮雲は月の光を磨くなりけり」（正治後度百首・月・八三一・宮内卿）等にも刺激されたかもしれない。

歌頭に合点あり。

稲妻

99 稲妻（いなつま）の光（ひかり）ばかりに雲（くも）見えて夕闇暗（ゆふやみくら）き遠（をち）の山（やま）の端（は）

**〔通釈〕** 稲妻

稲妻が光るその一瞬の光だけに雲は見えて、夕闇が暗く沈む遠くの山の端よ。

〔参考〕稲妻の光に見ゆる山の端に程なく通ふ我が心かな（公衡集・勒一句詠百首和歌・秋・一七六。玄玉集・天地下・二三一・公衡）

稲妻の光にのみや慰めむ田中の里の夕闇の空（六百番歌合・秋・稲妻・三二七・顕昭）

山の端に残れる雲の絶え間より鳥羽田の面に通ふ稲妻（六百番歌合・秋・稲妻・三三〇・慈円）

山里の門田に通ふ稲妻にしばし慰む夕闇の空（正治初度百首・秋・六四八・慈円）

頼みつる月のしるべは程更けて夕闇暗き山陰の道（新撰六帖・第一・ゆふやみ・三三二・為家）

この里は雲間も見えぬ夕立に日影いざよふ遠の山の端（宝治百首・夏・夕立・一一三〇・実雄）

〔類歌〕夕闇に見えぬ雲間もあらはれて時時照らす宵の稲妻（風雅集・秋中・五七五・為家）

星清き夕闇ながら稲妻の光に見れば群雲の空（草根集・秋・稲妻・三四六五）

夕闇の山の端暗き村雲の絶え間を見する稲妻の影（通勝集・冬夜詠百首和歌一夜百首・秋・稲妻・三八）

〔補説〕光の明滅や明暗の叙景で、京極派の好みに通う。

宗尊は、参考の『宝治百首』の実雄詠に負ってか、後に「雲間より日影涼しくうつろひて夕立晴るる遠の山の端」（竹風抄・巻五・〔文永八年七月内裏千五百番歌合百首歌〕・夏・八六三）とも詠む。

類歌の中院通勝の一首は、該歌に近似する。あるいは該歌からの影響下にあるのかもしれないが、さらに検証を加えて、改めて定位すべきであろう。

歌頭に合点あり。

江秋夕といふことを

100　蘆そよぐ入江の秋の夕暮に月待つ舟やあはれ知るらん

〔通釈〕江の秋の夕べということを

蘆がそよぐ入江の秋の夕暮に、月を待つ舟は、そのしみじみとした情趣を分かっているのだろうか。

〔参考〕蘆そよぐ潮風寒み片岸の入江に伝ふあぢの群鳥（久安百首・冬・一〇五六・待賢門院堀川。堀河集・六七、三句「かたしきの」。万代集・冬・一四四七、三句「かたそぎの」）

年深き入江の秋の月見ても別れを知らぬ人や悲しき（六百番歌合・恋下・寄商人恋・一一九九・良経）

ながめよと思はでしもや帰るらむ月待つ波の海人の釣舟（新古今集・雑上・一五五九・具親。熊野懐紙・海辺晩望・一四。自讃歌・一三八、四句「月待つ浦の」。新三十六人撰正元二年・三一七、四句同上）

〔類歌〕難波江の蘆間の月に鳴くたづや沈める影のあはれ知るらん（竹風抄・巻四・文永六年五月百首歌・雑・七四四）

百五十首歌に、秋天

101　山の端に月ほの見えて寂しきは雲なき空の秋の夕暮

〔通釈〕百五十首歌に、秋の天

山の端に月がかすかに見えて、寂しいのは、雲がない空の下の秋の夕暮だ。

〔参考〕ほの見えし月を恋しと帰るさの雲路の波に濡れて来しかな（新古今集・恋四・一二六一・読人不知）
草も木も枯れゆく色に寂しきは外山の庵の秋の夕暮（順徳院御集・同〔承久元年二月〕廿三日、当座歌合・暮秋夕・一一三四）
厭ひ得て雲なき空となるままにいや遠ざかる山の端の月（千五百番歌合・秋二・一二五六・具親）

〔出典〕文永三年八月百五十首歌。→7。

〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・秋天・四九四。

〔語釈〕○百五十首歌―文永三年八月百五十首歌。『竹風抄』に現存は一〇四首。題は、春・夏・秋・冬・雑を頭に関した種々の結び題。→7。

〔補説〕「秋の夕暮」を「寂し」とするのは、良暹詠「寂しさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮」（後拾遺集・秋上・三三三）や、その「良暹法師の許に遣しける」と詞書する「思ひやる心さへこそ寂しけれ大原山の秋の夕暮」（同・雑三・一〇三八・国房）、あるいは「いかばかり寂しかるらん木枯らしの吹きにし宿の秋の夕暮」（同・哀傷・五五四・顕房室隆子）の『後拾遺集』の三首と、寂蓮の「寂しさはその色としもなかりけり槙立つ山の秋の夕暮」（新古今集・秋上・三六一）に代表されて、通念となっていよう。中で、第三句に「寂しきは」、第五句に「秋の夕暮」を置く形は、参考の順徳院詠が早い例となる。その後、所謂宇都宮歌壇の『新和歌集』に「み山辺や住みならひても寂しきは桐の葉落つる秋の夕暮」（雑上・山家秋・七九七・源宗景）と「憂き世にてながめしよりも寂しきは草の庵の秋の夕暮」（同・宇都宮神宮寺二十首歌・七九九・浄忍）の両首が見える。宗尊自身も該歌より先に「色かはる野辺よりもなほ寂しきは朽ち木の杣の秋の夕暮」（宗尊親王三百首・秋・一二二。瓊玉集・秋上・一九七）と詠じている。後代では、「松の葉のかはらぬ色も寂しきは尾上時雨るる秋の夕暮」（光吉集・

秋・一三一）や「ことわりと思ひながらも寂しきはみ山の庵の秋の夕暮」（草庵集・秋上・四四二）が目に付く程度である。該歌も、これらの類型の中にあるが、「山の端に月ほの見えて」「雲なき空の」の措辞によって、新鮮な趣がある。それも例えば、「ながめつつ何にたとへむ方もなし雲なき空の秋の夜の月」（如願法師集・秋明月・五一六）の雲のない秋天の明月の景趣を讃美する歌と対比する時、同様の景趣に物寂しさを表出する宗尊の述懐性が際立つか。

102　山月

暮れぬとて月には急ぐ人もなし名のみをぐらの山の下陰

〔通釈〕山の月

暮れてしまうといって、しかし月には道を急ぐ人もいない。その名ばかりが「小暗」という（けれど、月が照り明るい）「小倉」の山の下陰よ。

〔本歌〕大堰川浮かべる舟の篝火に小倉の山も名のみなりけり（後撰集・雑三・一二三一・業平）

〔参考〕入りぬとて人の急ぎし月影は出でての後も久しくぞ見し（後拾遺集・雑一・八五九・赤染衛門）

秋の夜の木の下照らす月影に小倉の山も名のみなりけり（久安百首・秋・一三七・公能）

〔類歌〕更けぬるか渡瀬の波の音澄みて月に急がぬ夜半の舟人（和漢兼作集・秋中・渡月・七〇二・法印良清）

〔語釈〕○名のみをぐらの山―「名のみ小暗（し）」から「をぐら」を掛詞に山城国の歌枕「小倉の山」へ鎖る。「小倉の山」（「小倉山」）は、現京都市右京区嵯峨の大堰川を挟んで対峙する山。

〔補説〕 歌頭に合点あり。

浦月

103 明石潟年経し浦の秋風に苫屋も荒れて月や澄むらん

〔通釈〕 浦の月

明石潟は、幾年もの間を経て吹いてきた浦の秋風によって苫屋も荒れて、しかし月は変わらずに明るく澄んでいるのだろか。

〔参考〕 年経つる苫屋も荒れてうき波の返るかたにや身をたぐへまし（源氏物語・明石・二三八・明石君）

明石潟海人の苫屋の煙にもしばしぞ曇る秋の夜の月（続後撰集・秋中・三五七・順徳院）

名にし負ふ境やいづく明石潟なほ浦遠く澄める月かな（続古今集・秋上・四〇八・信実）

〔出典〕 文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕 竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・笘屋（「苫屋」の誤りか）・一一一。

〔語釈〕 ○明石潟―播磨国の歌枕。現在の兵庫県明石市の海岸。「月」「澄む」の縁で月が「明かし」が掛かる。○秋風―「年」「経し」の縁で「飽き」が響くか。○苫屋―菅や茅を編んで屋根を葺いた粗末な小屋。主に海浜のものを言う。

〔補説〕 帰洛して三ヶ月後の定数歌の一首だが、述懐性は「年経し浦」「苫屋も荒れて」の表現の中に溶かし込まれて露骨ではなく、むしろ『源氏物語』への傾斜を予見させるような趣がある。

参考の明石君歌は、光源氏が帰洛するのに際し、明石君にまた逢ふまでの形見として琴を残して惜別する場面で、源氏の「うち捨てて立つも悲しき浦波の名残いかにと思ひやるかな」に対する返歌。歌頭に合点あり。

江月

104　沈む身の類知られて難波江の蘆間の月に濡るる袖かな

〔通釈〕江の月

沈淪する我が身の類だと自然に分かって、難波江の蘆の間の底に沈み映る月に、そこに沈むでもなく涙で濡れる袖であることだな。

〔参考〕難波江の蘆間に宿る月見れば我が身一つは沈まざりけり（詞花集・雑上・三四七・顕輔。西宮歌合・月寄述懐・一。後葉集・雑一・四五九。顕輔集・四五。古来風体抄・五六二）

難波潟蘆間に宿る月はなほ沈むと見るも光ありけり（隆祐集・二三三）

夏虫の思ひを映す池水に類知らする篝火の影（千五百番歌合・夏三・九六五・通光）

波騒ぐ蘆間にかづく鳰鳥の浮き沈みても濡るる袖かな（千五百番歌合・恋二・二四七三・寂蓮）

難波潟蘆間の月に鶴鳴きて夜寒になりぬ秋の浦風（秋風抄・雑下・前大納言頼経家十首に・二八二・三善康朝）

我のみや入江の波に袖濡れて沈める影を月に愁へん（続古今集・雑中・一六八〇・藤原為綱）

〔類歌〕難波江の蘆間の月に鳴くたづや沈める影のあはれ知るらん（竹風抄・巻四・文永六年五月百首歌・雑・七四四）

〔語釈〕○沈む身―沈淪する我が身。文永三年（一二六六）七月の将軍更迭・京都送還後の境遇を言ったのであろう。「沈む」は「難波江」「蘆間」の縁でその水底に沈み映じている意が掛かる。○濡るる袖―涙で濡れる袖。「濡るる」は「沈む」「難波江」「蘆間」の縁でそこに沈んで水に濡れる意が掛かる。

〔補説〕参考歌の中、「難波江の」の歌は、宗尊自身が作歌に当たり念頭に置いた一首であろう。実質的に本歌だが、『金葉集』初出歌人顕輔の作なので、本歌とまでは見ないでおく。宗尊の師の一人真観の作で、恐らくは宗尊に献じられた『簸河上』には次のようにある。

代々の宣旨集を披きて姿古きを捨てじとは、新古今、新勅撰、続後撰の中にも、万葉集、三代集の作者の歌の見ゆるをば本として、それは新古今の歌なればとて嫌はじとなり。

新しきにつく事なかれといふは、後拾遺の現存の作者より当世までの歌をば、一句半句乃至一字なりとも、その歌のこれは節よと見えんをば用ゐじ。いはんや、心をも取り詞をもまねびてんは、歌にはあらじとなり。ただし、後拾遺は見直し、ひたたけて取り用ゐることになんなりて侍り。金葉、詞花もさることどもにて侍るめれば、苦しかるまじきことにこそ。されども、三代集の歌などのやうに本とするまではいかが侍るべからん。

（拙稿「校本『簸河上』」（『国文学研究資料館紀要』一二、平八・三）

真観の師でもある定家が父俊成の考えを踏襲して詠作原理として説いた、旧きを以て用いる詞の範囲を三代集の先達の用語に限るという原則（詠歌大概）にはまた、『新古今』の古人の歌は同様に用いてよいとも示されている。当然それは『後拾遺』から『新古今』までの各集の古歌人という意味合いであろう。とすれば、心は新しくするこ

とが原理なのであるから、古い詞を取ることを宗とする定家の本歌取り説もその原則の中にあると見るべきである。真観はこれを援用し、時代の下るのに従って定家が例示した『新古今』を『新勅撰』『続後撰』にまで拡大しつつ、定家の訓説に従っているようでありながら、各集の所収歌人ではなく所収歌そのものにずらし、かつ定家による心と詞の明確な区別を曖昧にするなど、独自の解釈を加えて変容させていよう。その真観の、『後拾遺』については見直して三代集と等しなみに取り用いることとなり、『金葉』と『詞花』についても同様に不都合ではない、という考え方は、鎌倉時代中期の状況を反映した判断であろう。三代集の歌のように本歌とすることまでは認められないとする点は、『金葉』と『詞花』について言ったものと解される。厳密には真観はこれをその所収歌について言っているのだが、これは元々定家の所収歌人について言った説に基づくので、宗尊の認識を明確にすることはできないまでも、当時、『金葉集』初出歌人の歌を本歌に取ることは全面的に容認されてはいなかったと考えておく。

105　海辺月を

伊勢の海人の干さぬ袂に宿り来て潮なれにける秋の月かな

**〔通釈〕** 海辺の月を

伊勢の海人の干すことのない褻れてよれよれの袂に宿り映って来て、すっかり海人のように潮に馴れてしまった秋の月であることだな。

**〔本歌〕** 鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣潮なれたりと人や見るらん（後撰集・恋三・七一八・伊尹）

〔参考〕潮垂るる伊勢をの海人の袖だにも干すなる暇はありとこそ聞け（千載集・恋三・八一五・親隆）
藻塩汲む伊勢をの海人の袂だに干さでや返る秋の浦風（洞院摂政家百首・恋・怨恋・一四六五・隆祐）
濡れてこそ月をも宿せ我が袖の露をば干さじ涙なりとも（弘長百首・秋・月・三一四・寂西）
見るままになほも袂の濡れ添はばいかに干さまし秋の夜の月（宗尊親王百五十番歌合・秋・一五八・惟宗忠景）
袖の上枕の下に宿り来て幾歳馴れぬ秋の夜の月（拾遺愚草・花月百首・月・六八六。続古今集・秋上・四一八・定家）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。↓2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・秋・七三二。

〔語釈〕○潮なれ―「潮馴れ」は「海人」の縁語、かつ「袂」の縁で「潮褻れ」が掛かる。

〔補説〕前歌は恐らく将軍失脚後在京都の一首で、この歌は将軍在任中在鎌倉の一首だが、共に歌枕の月に寄せて濡れる袖・袂を詠じている。本集の撰者は不明だが、ここには和歌によって宗尊の境遇激変の境界を曖昧にして、悲嘆を緩和しようとする意識が窺われるようにも思われる。

百五十首の歌に、秋海

106 清見潟夜舟漕ぎ出でて三保が崎松の上行く月を見るかな

〔通釈〕百五十首の歌で、秋の海

清見潟に夜舟を漕ぎ出て、三保が崎の松の上を渡って行く月を見ることであるな。

〔参考〕清見潟なぎたる沖に漕ぎ出でて雲なき夜半の月を見るかな（玄玉集・天地下・百首歌中に、月歌とて・一八四・摂政家丹後）

清見潟富士の煙や消えぬらん月影みがく三保の浦浪（後鳥羽院御集・同月日〔建仁三年十一月〕六首、和歌所・海辺月明・一六四六。風雅集・秋中・六二二）

清見潟うち出でて見れば庵原の三保の沖つは海静かなり（宝治百首・雑・海眺望・三八九九・為氏。新後撰集・羈旅・五九一）

〔類歌〕波の上に松原見えて清見潟三保の洲崎に澄める月影（沙弥蓮愉集・雑・四六二）

〔影響〕明石潟夜舟漕ぎ出でて心さへつなぐかたなく見つる月かな（晩花集・秋・月・二二九）

〔出典〕文永三年八月百五十首歌。→7。

〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・秋海・五四四、三句「みほが島」。歌枕名寄・巻二十・東海四・駿河・清見・三穂浦・崎・五二一七。夫木抄・雑八・崎・みほがさき、近江又駿河・御集中、秋海、古来歌・一二一八八。

〔語釈〕○百五十首——→101。○清見潟—駿河国庵原郡の歌枕。現静岡県静岡市清水区（旧清水市）興津の海湾。その突き出た所が「清見が崎」で、北東に海越しに富士山、南側の対岸に半島状に突き出た「三保が崎」を望む。「浪の上はすべて清見が関なればかかる物なき月を見るかな」（弘長百首・雑・関・六〇四・基家）を参照すれば、該歌も、「月」「見る」の縁で「清見」に「清」（清く）「見」が響くか。○夜舟—夜間に航行する舟。万葉語。「我のみや夜舟は漕ぐと思へれば沖への方に楫の音すなり」（万葉集・巻十五・三六二四・作者未詳）。勅撰集では「湊川

夜夜舟漕ぎ出づる追ひ風に鹿の声さへ瀬戸渡るなり」（千載集・秋下・三一五・道因）が初出。宗尊はこれ以前に「夜舟漕ぐ瀬戸の潮干をよそに見て月にぞ越ゆる佐屋形の山」（瓊玉集・雑上・四二八）と詠む。○三保が崎―駿河国の歌枕。現静岡県静岡市清水区の三保半島。「松」の景勝地。○松の上行く―新鮮な措辞。類似の古い例に「松の上に月は移りぬ紅葉葉の過ぎぬや君が逢はぬ夜多く」（古今六帖・第五・日ごろへだてたる・二七六六・池のうへの大君）があるが、その原歌は『万葉』（巻四・相聞・六二三・池辺王）で、初句は「松之葉尓（まつのはに）」。

**〔補説〕** 参考歌三首の内、『玄玉集』の一首は該歌と似通うが、宗尊が直接これに倣ったとまでは推断できない。むしろ後鳥羽院詠と為氏詠は、宗尊詠全体の学習傾向に照らして、宗尊が目にした可能性は高いであろう。その為氏詠は、「田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」（新古今集・冬・六七五・赤人。原歌万葉集・巻三・雑歌・三一八、初句「田子の浦ゆ」三句「真白にぞ」結句「雪は降りける」）を意識していよう。あるいは宗尊も、赤人詠を微かに思い起こすか。

影響歌とした『晩花集』の一首は、下河辺長流の宗尊詠受容の可能性を探る中で改めて位置付けられるべきであろうが、『竹風抄』の同じ「文永三年八月百五十首歌」の「憂かりける誰が祈ぎ言の神な月あはれなげきの杜ぞ時雨るる」（冬杜・五四〇）も、『晩花集』の「神な月世の祈ぎ言はいひやみて今朝より聞くは時雨なりけり」（冬・初冬・二七三）と類似していて、その可能性が窺われる。

月の歌の中に

107 吹きまさる秋の夜風に月を見てそこはかとなく澄む心かな

更け行くまでに月は見じ、といふ歌候歟

〔通釈〕月の歌の中に

吹きつのってゆく秋の夜風の中で月を見て、何とはなしに澄む心であることだな。

更け行くまでに月は見じ、という歌がございましょうか。

〔参考〕神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなく物ぞ悲しき（新古今集・冬・五五二・高光）

月見れば憂き世の中につくづくと思ひも知らず澄む心かな（堀河百首・秋・月・七九〇・源顕仲）

残りなく我がよ更けぬと思ふにも傾く月に澄む心かな（千載集・雑上・九九九・待賢門院堀河。久安百首・秋・一〇四九）

思ひきや秋の夜風の寒けきに妹なき床にひとり寝むとは（拾遺集・哀傷・一二八五・国章。後拾遺集・雑一・八九〇・元輔）

〔補説〕為家の評詞は、「今よりは更け行くまでに月は見じそのこととなく涙落ちけり」（千載集・雑上・九九四・清輔）を、既存の類歌として指摘したのであろう。

（月の歌の中に）

108 昔思ふ涙のひまに影見ればありしに似たる秋の夜の月

〔通釈〕（月の歌の中に）

昔を思う涙の合間にその光を見ると、過去に似ている秋の夜の月だ。

〔参考〕天の原月はかはらぬ空ながらありし昔の夜をや恋ふらん（後拾遺集・雑一・八五二・元輔）

ありしにもあらずなりゆく世の中にかはらぬものは秋の夜の月（詞花集・秋・九八・明快）

我がために心かはらぬ月だにもありしに似たる影をやは見る（続後撰集・恋四・八七六・家良。後鳥羽院定家知家入道撰歌〈家良〉・後鳥羽院御撰・八〇。新三十六人撰正元二年・一五八）

昔思ふ涙の底に宿してぞ月をば袖の物と知りぬる（新勅撰集・雑一・一〇七五・守覚。御室五十首・秋・二九）

昔思ふ草にやつるる軒端よりありしながらの秋の夜の月（洞院摂政家百首・秋・月・六二六・定家。拾遺愚草・一四三二。続拾遺集・雑秋・六〇五）

**〔補説〕** 参考の後の二首は、俊成の「昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添えそ山時鳥」（長秋詠藻・右大臣家百首・郭公・五一三）の影響下にあろう。宗尊もそれは意識したか。

歌頭に合点あり。

（月の歌の中に）

109 もの思ふ涙の露に宿り来て袖の上なる秋の夜の月

**〔本文〕** ○宿り来て―底本「かけ見れは」を墨滅して右傍に「やとりきて」とあり。

**〔通釈〕**（月の歌の中に）

物思いをする涙の露に宿りに来て、私の袖の上にある秋の夜の月よ。

**〔参考〕** もの思ふ我かはあやな秋の月尋ねて袖の露にすむらむ（秋篠月清集・秋・一二〇六）

わりなしや露のよすがを尋ね来てもの思ふ袖に宿る月影（千五百番歌合・恋二・二四三三・丹後）
物思へば月だに曇る袖の上の涙に宿る秋の夕暮（壬二集・日吉奉納五十首・秋・一八一七）
物思ふ秋の夕べの露よりや袖には月の宿り初めけむ（後鳥羽院御集・同〔建保二年〕八月撰歌合・秋十・一七二七）
物思ふ涙に濡るる袖の上にいかに契りて月宿るらん（信生法師集・女の本より、月明き夜申しおこせて侍る・一五一）
露ならで月の宿りは誰か知るもの思ふ袖の涙なりけり（万代集・雑二・三〇〇六・道家）
せきかぬる涙の露に宿り来て人に知らるる袖の月影（隣女集・巻二自文永二年至同六年・秋・九月十三夜、入道前大納言為家家の会に題を探りて、月前顕恋・五〇六。雅有集・御室の五十首・恋・四一八。嵯峨の通ひ路・一四、初句「せきわぶる」）

**〔影響〕**

**〔補説〕** 宗尊はこれ以前、『宗尊親王三百首』で「幾秋の涙の露を払ひかねもの思ふ袖に月を見るらむ」（恋・二三六）という類詠をものしている。また、「夜な夜なの袖の涙に宿り来てうき身古さぬ月の影かな」（瓊玉集・秋下・花月五十首に・二三五）とも詠んでいる。参考に挙げた諸歌の何れに倣ったかの特定はできないが、鎌倉初期とそれ以降に少しく盛行した用詞と趣向に沿った詠み方であろう。秋歌ではあっても述懐性あるいは恋の情趣が感じられる一首である。

文永四年八月十五夜曇りて侍りし、念なきよしなど申しおこせて侍りし人の返事に

もの思はぬ人に今宵の月は問へ涙からにや曇るとも見る

〔通釈〕文永四年（一二六七）八月十五夜が曇っておりました、それが残念だという旨などを言ってよこした人に対する返事に（詠みました歌）

物思いをしない人に、（中秋の曇っている）今夜の月はどうかと問い尋ねてくれ。（どうせ）私は物思いの涙のせいで曇っているかとも見るのだから。

〔本歌〕物思はぬ人もや今宵ながむらん寝られぬままに月を見るかな（千載集・雑上・九八四・赤染衛門。赤染衛門集・五七二。続詞花集・雑中・八四一。古来風体抄・六〇八）

〔参考〕物思ふにあはれなるかと我ならぬ人に今宵の月を見せばや（和泉式部続集・三月ばかり夜のあはれなるを見て・四二九。千載集・雑上・九八六・和泉式部、初句「ひとりのみ」。風雅集・恋四・一二八七）

〔語釈〕○文永四年八月十五夜―文永三年（一二六六）七月将軍更迭京都送還の翌年の中秋。前年冬には謀反の嫌疑は一応解かれ、父後嵯峨院とも対面を果たしてはいた。

〔補説〕宗尊はこれ以前、『宗尊親王三百首』で「物思ふ我からくもる月影を涙の咎と何恨むらむ」（恋・二三七）と詠んでいる。

歌頭に合点あり。

111　愁へに沈みて後、月を見て

我のみや心尽くしの憂き世とて月も木の間の外に見ゆらん

〔通釈〕愁いに沈んで後、月を見て

私だけが、心悲しさの限りを尽くさせる憂く辛い世の中だというので、月までも憂き世の外ならぬ木の間の外に見えるのだろうか。

〔本歌〕木の間より洩り来る月の影見れば心尽くしの秋は来にけり（古今集・秋上・一八四・読人不知）
ながむるに物思ふことの慰むは月は憂き世の外よりや行く（拾遺集・雑上・四三四・大江為基）

〔参考〕我のみや月に心のあくがれて臥さずやすまぬ夜を重ぬらん（百首歌合建長八年・秋・三九二・具氏）
見てもなほ心尽くしの空なれや木の間の外の秋の夜の月（洞院摂政家百首・秋・月・六九二・少将）

〔類歌〕木の間洩るみ山の月の影なれや憂き世の外の心尽くしは（草庵集・法印浄弁よませ侍りし三首に、深山月・五二六）

〔語釈〕○愁へに沈みて後―文永三年（一二六六）七月の将軍更迭と京都送還により愁い落ち込んで後、ということであろう。○我のみや―「見ゆらん」にかかる。『万葉集』以来の歌句。勅撰集では『古今集』の「我のみやあはれと思はむきりぎりす鳴く夕影のやまとなでしこ」（秋上・二四四・素性）と「我のみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花と散りなば」（恋五・七九八・読人不知）が初出。

〔補説〕二首の本歌取りと見るが、宗尊は直接には参考の藻壁門院少将の歌に倣ったのかもしれない。
ここから116までの六首は、将軍を失脚して帰洛した境遇下の月に寄せる述懐の歌。

112　（愁へに沈みて後、月を見て）
偲ばるる昔の秋は帰り来で同じ雲井にめぐる月影

〔通釈〕（愁いに沈んで後、月を見て）

思わずに偲ばれる昔の秋は帰り来ることはなくて、ただ同じ空にまためぐり来て移り行く月よ。

〔参考〕思ひきや憂き身ながらにめぐり来て同じ雲ゐの月を見むとは（今鏡・宮木野・八八・多子。平家物語延慶本・主上上皇御中不快之事付二代后立給事・九。平家物語覚一本・二代后・七）

年を経て同じ雲ゐに幾めぐり変はらぬ秋の月を見るらん（撰歌合建仁元年八月十五日・月多秋友・一〇・公経）

思ひ出でて同じ空とは月を見よほどは雲ゐにめぐり逢ふまで（新古今集・離別・八七七・後三条院）

待てしばし同じ空行く秋の月まためぐり逢ふ昔ならぬに（洞院摂政継百首・秋・月・六八八・俊成女。秋風抄・秋上・九二。秋風集・雑中・一二〇九。俊成卿女集・一一三）

〔類歌〕帰り来ぬ昔の秋もめぐり逢ふ同じ月日ぞ形見なりける（為世十三回忌和歌・懐旧・一二〇・澄基）

偲ばるる昔はまたも帰り来で憂かりし秋と袖ぞ露けき（為世十三回忌和歌・懐旧・一二八・法輪）

いかにせん偲ぶ昔は帰り来で涙に浮かぶ世世の古こと（新葉集・雑下・一三〇二・菅原為基）

〔語釈〕○めぐる―月が空の軌道を移動する意。「昔」「帰り来で」の縁で時が周期的に到来する意が掛かる。

〔補説〕歌頭に合点あり。

（愁へに沈みて後、月を見て）

113　この秋は涙に影ぞ変はりぬる月やあらぬと思ふばかりに

〔通釈〕（愁いに沈んで後、月を見て）

この秋は、月の光が涙で変わって（曇って）しまった。あの業平のように、「月やあらぬ」、昔と同じ月はないのか、いやあるけれど（我が身の境遇が変わったのだ）、と思うだけに。

〔本歌〕 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして（伊勢物語・四段・五・男、古今集・恋五・七四七・業平）

〔参考〕 面影の霞める月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に（新古今集・恋二・一一三六・俊成女）
里は荒れて月やあらぬと恨みても誰あさぢふに衣うつらむ（新古今集・秋下・四七八・良経）
身の憂さを月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞもりくる（新古今集・雑上・一五四二・二条院讃岐）
なにとかは月やあらぬとたどるべき我がもとの身を思ひ知りなば（続古今集・釈教・月の夜坐禅の次に・七六二・後嵯峨院）

〔類歌〕 いかにせん月やあらぬとかこちても我が身一つに変はる憂き世を（竹風抄・巻二・文永五年十月三百首歌・月・三七四）

〔出典〕 文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕 竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・秋月・五一。

〔語釈〕 ○この秋―七月に将軍を更迭され京都に送還された文永三年（一二六六）の秋。○涙に影ぞ変はりぬる―悲しみに流す涙によって、月光の様子が変わってしまって見える、ということ。先行する類例では、「ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂も変はる光に」（新古今集・秋上・三九一・俊成女）が早く、土御門院に「雲ゐより宿りなれにし秋の月いかに変はれる涙とか知る」（続古今集・雑下・一七三六）、順徳院にも「月もなほ見し面影は変はりけり泣きふるしてし袖の涙に」（順徳院百首・恋・八四）がある。また、『洞院摂政家百首』にも「待ち出でしな

らひばかりはそれながら影も涙に変はる月かな」（恋・遇不逢恋・一三三四・成実）と見える。宗尊と同時代の例には、「秋を経てなれしなかばの夜半の月曇る涙に影ぞかはれる」（実材母集・八月十五夜、終夜眺むる月も影寂しう見えしかば・一九四）がある。

**〔補説〕** 文永三年（一二六六）の「この秋」は、京都を出て東下りする『伊勢物語』の男・業平とは逆に、将軍を廃されて鎌倉を追われて西上帰洛した秋。参考や語釈に挙げた諸詠は、特に意識の上に置いていたというわけではないだろうが、日頃から当然に学んでいて、既に宗尊の知識の中にあったと見てよいであろう。

『竹風抄』では「文永三年十月五百首歌」の一首で、詠作時期の明記から一応出典としたが、本集の111の詞書「愁いに沈んで後、月を見て」が実際の詠作状況で該歌もその一連とすれば、属目の述懐詠を定数歌に取り込んだことになろう。また逆に、定数歌の一首を「愁いに沈んで後、月を見て」の詞書の下に再構成して本集に収めた可能性も捨てきれないであろう。

（愁へに沈みて後、月を見て）

114　目の前に変はり果てぬる身の憂さは馴れにし月もあはれとや見る

**〔通釈〕**（愁いに沈んで後、月を見て）

見る見ると変わり果ててしまった我が身の辛さは、馴れ親しんだ月も哀れだと見るのか。

**〔本歌〕** 月影に我が身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む（古今集・恋二・六〇二・忠岑。拾遺集・恋三・七九三、四句「思はぬ人も」）

〔参考〕目の前に変はり果てにし世の憂さに涙を君に流しけるかな（山家集・雑・一二三五・女房）

秋の色を送り迎へて雲の上に馴れにし月ももの忘れすな（続後撰集・雑下・一二〇三・土御門院。土御門院百首・雑・懐旧・九六）

〔語釈〕○目の前に変はり果てぬる身の憂さ―文永三年（一二六六）七月に将軍を失脚して鎌倉から帰洛した境遇の変化による憂鬱。

〔補説〕参考の『山家集』歌は、保元の乱で讃岐に配された崇徳院をめぐる西行と行宮付き女房や行宮に赴いた寂然等との一連の贈答の一首で、西行の「その日より落つる涙を形見にて思ひ忘るる時の間もなし」（かくて後、人のまゐりけるにつけてまゐらせける・一二三四）に対する女房の返歌。初二句が類似する歌は、和泉式部にも「目の前に変はりぬめりと見るものをまた忘れずやありし世のこと」（和泉式部集・六〇七）がある。

（愁へに沈みて後、月を見て）

115　よもすがら答へぬ月に音をぞ泣くありしに変はる身を愁ふとて

亡父　愁へて音をぞ泣く命にむかふもの思ふとて―詠候（墨滅）

〔通釈〕（愁いに沈んで後、月を見て）

夜通し、答えない月に声を上げて泣くことだ。以前に変わるこの身を愁い嘆くということで。

亡父（定家）（よもすがら月に）愁へて音をぞ泣く命にむかふ物思ふとて、詠候ふ。（墨滅）

〔参考〕夜もすがら月に愁へて音をぞ泣く命にむかふ物思ふとて（続後撰集・恋二・七三三・定家。定家卿百番自歌

合・一三五。拾遺愚草・一三七五。定家家隆両卿撰歌合・八一。万代集・恋三・二三五四。井蛙抄・一八八。正徹物語・七八）

天の原月は変はらぬ空ながらありし昔のよをや恋ふらん（後拾遺集・雑一・八五二・元輔）

ありしにもあらずなりゆく世の中に変はらぬものは秋の夜の月（詞花集・秋・九八・明快）

梅が香に昔を問へば春の月答へぬ影ぞ袖にうつれる（新古今集・春上・四五・家隆）

愁へても泣きてもいはむ友もがな答へぬ月にながめわびぬる（如願法師集・詠百首和歌・雑・二四四）

〔語釈〕○よもすがら―終夜。「泣く」にかかる。「答へぬ」にもかかるか。

〔補説〕為家の評詞は参考に挙げた定家の歌を類歌として指摘しつつ、何らかの理由で墨滅したものであろう。

（愁へに沈みて後、月を見て）

116　長き夜も明くるを際にまどろまで愁へぞ人に月は見せける

第二終句不幽玄事歟（墨滅）

〔通釈〕（愁いに沈んで後、月を見て）

長い夜も明けるまでを限りにして、（その間）まどろむこともなくて、（夜明けまで）月は人に対して愁えを見せたのだった。

第二句・終句、幽玄ならざることか。（墨滅）

〔参考〕まどろまで物思ふ宿の長き夜は鳥の音ばかりうれしきはなし（新勅撰集・雑二・一一七一・匡房。堀河百

首・雑・暁・一二八二）

〔出典〕 文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕 竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・月・四八、二句「明くるをきはと」結句「月は見せけり」。

〔影響〕 夜な夜なは明くるを際に待ち尽くす限りはいつも暁の鐘（伏見院御集・暁恋・二〇三六）
分きてなど夜しもまさる愁へにて明くるを際に虫の鳴くらん（風雅集・秋中・五五九・章義門院）

〔語釈〕 ○明くるを際に―夜明けを境目としてそれまで、ということ。先行類句は、「灯火の尽くるを際とながめつつあはれ幾夜を嘆き来ぬらん」（二条太皇太后宮大弐集・一一七）や「灯火の尽くるを際にながめつつまどろまぬ夜を幾夜経ぬらむ」（物語二百番歌合・心高・三六〇・御製）、あるいは「灯火の尽くるを際に起きゐつつこの世を夢とさとり行くかな」（後鳥羽院御集・雑百首・一〇八二）の「尽くるを際に（と）」で、白氏の「上陽白髪人」を踏まえる。→補注。

〔補説〕 一首全体が「月」を擬人化していて、「まどろまで」の主語も「月」と見れば、月はまどろみもせずに終夜、悲哀の相を人に見せた、という主旨に解される。あるいはまた、下句だけが「月」を擬人化していて、「まどろまで」の主語は「人」（宗尊）と取ることもできる。しかしいずれの場合でも結局は、その「月」を眺める「人」たる宗尊自身が、まどろむこともできずに終夜、憂愁の心で月をながめた、ということではあろう。
語釈に示した「尽くるを際に（と）」の歌々に宗尊が学んだとすれば、該歌に於ても、「上陽白髪人」の「秋夜長（あきのよながし）　夜長無眠天不明（よながくしてねぶることなければてんもあけず）　耿耿残灯背壁影（かうかうたるのこんのともしびのかべにそむけたるかげ）　蕭蕭暗雨打窓声（せうせうたるくらきあめのまどをうつこゑ）」（和漢朗詠集・秋・秋夜・一三三・白居易）を意識していたであろうか。

出典との関係は113と同様。

為家の評詞の墨滅は、第二句「明くるを際に」と結句「月は見せける」が俗に即物的だとして批判したものの、思い返した結果の反映であろうか。

山の端に傾きたる月を見て

117　急げ我月だにもなほ憂き世にはすまじとてこそ山に入るらめ

〔通釈〕山の端に傾いた月を見て

急げ、私も。月さえもやはり、この憂く辛い世には澄むまいといって、山に入るのだろうから。私も住むまいといって、出家して山に入ろう。

〔参考〕急ぎつつ我こそ来つれ山里にいつよりすめる秋の月ぞも（後拾遺集・秋・二四八・家経）

もろともに同じ憂き世にすむ月のうらやましくも西へ行くかな（後拾遺集・雑一・八六八・中原長国妻）

山の端に入るも惜しまじ身をつめば憂き世や月もすみ憂かるらむ（秋風集・雑中・一二一五・顕国）

〔語釈〕○急げ我―新鮮な句。○すまじ―「澄まじ」に「急げ」「我」の縁で「住まじ」が掛かる。○山に入る―「月」が西の山に沈む意に、「憂き世」「す（住）まじ」の縁で、出家する意が掛かる。

〔語釈〕「憂き世には」以外の句は、他に例を見ないか、例が希少な句。宗尊の詠法の一面を示す。

擣衣

118　有明と言ひしばかりの月にまた誰待ち侘びて衣打つらん

〔通釈〕擣衣

有明の頃と、（恋人が）言ったばかりに待つことになった有明の月に、同じように誰が待ちかねて衣を打っているのだろうか。

〔本歌〕今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな（古今集・恋四・六九一・素性）

〔参考〕ながむればちぢに物思ふ月にまた我が身ひとつの峰の松風（新古今集・秋上・三九七・長明）

里は荒れて月やあらぬと恨みても誰浅茅生に衣打つらむ（新古今集・秋下・四七八・良経）

〔出典〕文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・擣衣・一一八。

〔語釈〕○擣衣―『竹風抄』では六帖題の定数歌の一首であり、『古今六帖』（第五・服飾）の「ころもうつ」が当たる。○誰待ち侘びて―作例は少ない。同時代では他には、「夕暮は誰待ちわびて花薄野中の水に涙かるらん」（長綱百首・秋・水辺薄・四五）や「降り乱れみぞれし空の更けし夜に誰待ちわびてゆき隠れけん」（実材母集・題を探りて人人よみ侍り折折の歌・夜霙・七七三）が知られる。後代では、中院通秀に「思ひやりあはれも深し里遠み誰待ちわびて衣打つらん」（十輪院御詠・擣衣幽・文明十五将軍家着到・一五二）がある。

〔補説〕歌頭に合点あり。

百五十首の歌に、秋暁

119　里人の砧の音に寝覚めして明け方寒き月を見るかな

〔通釈〕百五十首の歌に、秋の暁

里人が打つ砧の音に目を覚まして、明け方の寒い空にかかる月を見ることだな。

〔参考〕衣打つ砧の音にことよせて寝覚めがちなる秋の夜な夜な（久安百首・秋・七四五・実清）

まどろまでながむる月の明け方に寝覚めやすらん衣打つなり（拾遺愚草・春日同詠百首応製和歌・秋・一三四四）

月の色も山の端寒しみ吉野の故郷人や衣打つらん（内裏歌合建保元年閏九月・深山月・一・順徳院。紫禁和歌集・同〔建保元年〕閏九月十九日歌合、深山月・二八三）

夜を長み寝覚めて聞けば長月の有明の月に衣うつなり（金槐集定家所伝本・秋・月前擣衣・二四七）

〔出典〕文永三年八月百五十首歌。→7。

〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・秋暁・五一九。

〔語釈〕○百五十首歌―→101。○明け方寒き―新鮮な措辞。後鳥羽院の「宮城野や暁寒く吹く風に鳴く音も弱ききりぎりすかな」（最勝四天王院和歌・宮城野陸奥・四三一）を初めとした、「暁寒き」がやや先行するが、いずれも鎌倉初期頃以降に詠まれ始める。「明け方寒き」の先行例は、藤原光経に「雲の色も明け方寒き山の端の松の葉ごしに残る月影」（光経集・冬・五〇六）がある。光経は「暁寒き」についても、「嵐吹く遠山もとの里続き暁寒く衣打つなり」（光経集・暁擣衣・五五三）や「この頃の暁寒き月影に里も残らず打つ衣かな」（同・暁擣衣・五六六）

と、擣衣を詠んでいて、この両首の景趣は該歌に通う。あるいは、宗尊はこれら真観の叔父光経の歌に学んでいたか、とも疑われるのである。

〔補説〕宗尊は、参考に挙げた歌のいずれかにのみ拠ったという訳ではなく、これらの歌々に見られる言詞や想念に日頃習っていた、と捉えるべきであろう。中で順徳院の一首は、雅経の「み吉野の山の秋風さ夜更けて故郷寒く衣打つなり」（新古今集・秋下・擣衣の心を・四八三）に負っていよう。該歌にも微かに、雅経詠の面影が感じられなくもない。

120　秋の歌の中に
晴れずのみ思ひ尽きせぬ類かと見ればよに立つ峰の朝霧

〔通釈〕秋の歌の中に
心が晴れないばかりで、物思いも尽きない類かと見ると、本当に夜のうちに立って晴れずにいる峰の朝霧よ。

〔本歌〕雁の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひ尽きせぬ世の中の憂さ（古今集・雑下・九三五・読人不知）

〔参考〕晴れずのみものぞ悲しき秋霧は心のうちに立つにやあるらん（後拾遺集・秋上・二九三・和泉式部）
秋霧の立つ野と早くなりしより晴れず物思ふ宿の寂しさ（閑放集・霧立つあしたに、ひとりごちて・一〇八）

〔語釈〕○晴れず―心が晴れない意。「朝霧」の縁で空が晴れない意が掛かる。○よに―「世に」。実に、本当に。「朝霧」の縁で「夜に」が掛かるか。

**〔補説〕** 四季の叙景によせて述懐を詠じるのは宗尊の常套だが、該歌はそれをさらに反転して、述懐によそえて叙景する点が趣向。

参考の真観の「秋霧の」歌との先後は不明である。真観詠は「誰見よと花咲けるらむ白雲の立つ野と早くなりにしものを」（古今集・哀傷・八五六・読人不知）を本歌に取るが、宗尊も「文永二年潤四月三百六十首歌」（春）で「雪消えし焼け生を見れば朝霞立つ野と早く春めきにけり」（柳葉集・巻五・六三四）と、同じ歌を本歌取りしている。

ここから124までは、詞書「秋の歌の中に」の下の四首。一般にも秋歌は述懐性を帯びるが、宗尊の場合はその傾向が強く、かつこれらの歌の内、123以外の三首は特にそれが顕著であって、その123も121と共に「文永三年十月五百首歌」の歌であるので、これらは、文永三年（一二六六）七月に将軍を更迭されて京都に送還された秋の作をまとめたものかと思しい。

（秋の歌の中に）

121　草も木も色変はり行く時にこそ憂きも例しはありと見えけれ

**〔通釈〕**（秋の歌の中に）

草も木も、色が変わってゆくこの（秋の）時にこそ、憂く辛いこともその最たる例がある、と分かるのであった。

**〔本歌〕** 草も木も色かはれどもわたつ海の浪の花にぞ秋なかりける（古今集・秋下・二五〇・康秀）

〔参考〕草も木も色かはりゆく秋風に里をばかれず衣うつなり（壬二集・為家卿家百首・秋・一二八九）
あはざりし昔を今にくらべてぞ憂きは例しもありと知らるる（続古今集・恋四・一二九九・平政村）

〔出典〕文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕竹風抄・文永三年十月五百首歌・八月・二六。

〔語釈〕○詞書―前歌の「秋の歌の中に」を承けるが、『竹風抄』の題「八月」は、『古今六帖』（第一・歳時・秋）の「はつき」に当たる。○例し―ここは、物事の基準、典型といった意か。参考の政村歌の「例し」は、前例の意。

（秋の歌の中に）

122 涙のみ絶えず時雨るる我が袖や秋行く雲の衣なるらん

〔通釈〕（秋の歌の中に）
涙だけが絶えることなく時雨のように降る私の袖は、秋が行きその空を行く（時雨を降らせる）雲でできた衣であるからだろうか。

〔本歌〕墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨の絶えず降るらん（拾遺集・哀傷・一二九七・読人不知）

〔参考〕涙のみなほも降るかな神無月時雨るる頃もたゆむ袂に（白河殿七百首・恋・寄時雨恋・四一四一・為家。為家集・恋・一〇九一、四句「時雨るるほどと」）

〔語釈〕○我が袖や―古くない句形。「世とともに乾く間もなき我が袖や潮干も分かぬ波の下草」（新勅撰集・恋二・

七七二・隆信。六百番歌合・恋・寄草恋・一〇二四）や「我が袖や松の陰なる秋草の上はつれなき色に出でなむ」（続古今集・恋一・一〇〇一・順徳院。紫禁集・七八六）等に学ぶか。○秋行く雲―秋に空を流れて行く雲。「竜田山秋行く人の袖を見よ木木の梢は時雨れざりけり」（新古今集・羇旅・九八四・慈円）の「秋行く人」や「湊川秋行く水の色ぞこき残る山なく時雨降るらし」（新勅撰集・秋下・三四一・実氏）の「秋行く水」等から援用か。秋が去って行く意が掛かるか。○らん―原因推量の助動詞。

123　（秋の歌の中に）
　鷺（さぎ）のゐる外面（そとも）の梢色（こずえいろ）づきて門田（かどた）寂（さびし）しき秋の夕暮（ゆふくれ）

**〔通釈〕**（秋の歌の中に）
　鷺がとまっている家の外にある梢が色づいて、家の前の田は寂しさにつつまれる、秋の夕暮よ。

**〔出典〕**　文永三年十月五百首歌。→1。

**〔他出〕**　竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・田家・一一〇。夫木抄・雑九・鷺・秋御歌中・一二六九〇。

**〔語釈〕**　○鷺のゐる―『金葉集』に収める和泉式部の「鷺のゐる松原いかに騒ぐらん白毛はうたて里響（とよ）むなり」（雑上・五五六）や『堀河百首』の藤原顕仲詠「鷺のゐる荒れ田のくろに摘む芹も春の若菜の数にやはあらぬ」（春・若菜・七四）が早い。家良の「鷺のゐる野沢のま菅水越えてなほ曇りそふ五月雨の空」（現存六帖・さぎ・八五四）や『百首歌合建長八年』の「鷺のゐる荒れ田のくろに雪さえて根芹も白く摘む若菜かな」（春・二三三・経家）等が、宗尊に身近な例。○外面の梢―先例は見えない句。後出としても、『歌合（正安元年～嘉元二年）』の親子詠「よも山に

冬近からし今朝見れば外面の梢色染めぬなり」（秋朝・一〇）、あるいは『宗良親王千首』の「いとどなほ外面の梢茂りあひて煙に暮るる里のかやり火」（夏・蚊遣火・二八五）や『師兼千首』の「山里の外面の梢陰茂み心涼しき滝の音かな」（雑・山家夏・八三二）が見える程度。これらに、宗尊からの影響の可能性を見ておく必要があろう。「外面」は、家の背後あるいは北側を言うが、家の外側一般をも言う。○門田―家の門前にある田。あるいは家の近くの田。

〔補説〕「鷺」が、「白鷺の松の梢に群れゐると見ゆるは雪の積もるなりけり」（為忠家初度百首・冬・松上雪・四八一・頼政）のような白鷺を言っているのだとすれば、「色づ」く「梢」との色彩上の対照の趣向となる。また、「外面の梢」を家の後ろ側にある梢、「門田」を家の門の前側にある田とすれば、その対比も趣向となるが、そうとも限らないか。

124　長月の晦日頃、時雨間なくかき暗れたるに、山里なる人に

山里の梢もいかがなりぬらん都の空ぞ時雨れがちなる

〔通釈〕長月九月の晦日頃、時雨が暇なく（降り）空がすっかり暗くなった時に、山里にいる人に（言ってやった歌）

山里の梢もどのようになってしまっているのだろうか。都の空は時雨がちである。

〔参考〕誰もみな花の都に散りはててひとり時雨るる秋の山里（新古今集・哀傷・七六四・顕輔）

山深み旅の日数のふるままに時雨がちなる秋の夕暮（万代集・雑四・三三四九・平範国。別本和漢兼作集・

三三七）

見ればまづ添ひて涙ぞかき暗す時雨れがちなる空の気色に（百首歌合建長八年・冬・一〇四八・中納言〔真観女親子〕）

〔類歌〕山里の梢はいかになりぬらん都の花は春風ぞ吹く（草庵集・春下・二一八・為藤。新千載集・雑上・一七一八、二句「梢はいかが」）

〔語釈〕○時雨れがちなる―時雨がはっきりと降る傾向を見せる、との趣旨。宗尊は別に「文永三年十月五百首歌」（暮秋）でも「昔思ふ涙もいとど降り添へて時雨れがちなる秋の暮かな」（竹風抄・巻一・三〇）と詠んでいる。

〔補説〕詞書と和歌の内容から、文永三年（一二六六）七月に失脚し帰洛した後、九月晦日頃の詠作。

紅葉

125　かくて見む外山の里の薄紅葉いまひとしほの色な時雨れそ

為紅葉無常山候歟（墨滅）

〔通釈〕紅葉

このままで見よう。外山の里の薄い色の紅葉は、もう一段の濃い色に時雨れてくれるな。

紅葉の為に無常の山に候ふか。（墨滅）

〔本歌〕常磐なる松の緑も春来れば今一しほの色まさりけり（古今集・春上・二四・宗于）

〔参考〕かくて見む青葉まじりの薄紅葉時雨よいたく染め果てずとも（楢葉集・雑二・八五一・禅定院尊者）

夕づく日うつろふ峰の薄紅葉今一しほは時雨せねども（道助法親王家五十首・秋・夕紅葉・六五五・経乗）

〔出典〕 文永三年八月百五十首歌。→7。

〔他出〕 竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・秋山家・五七二。

〔語釈〕 ○外山の里―山の端っこ、あるいは連山の外れにある里。○色な時雨れそ―珍しい句。後代に、康正三年（一四五七）九月七日『武家歌合』の「染め残す峰の紅葉葉ひさかたの山より北の色な時雨れそ」（二五・心敬）が見える程度。紅葉の色を濃くなるように時雨が染め上げるな、という趣旨。

〔補説〕 措辞の類似から参考に挙げた『楢葉集』の一首については、嘉禎三年（一二三七）六月五日素俊撰の同集あるいはその歌を、宗尊が披見し得たか否かを含めて、さらに検討が必要であろう。

為家の評詞は、そのままあって欲しいのに紅葉の故に無常にも変化する山であることを詠じた歌だといった趣旨か。それを撲滅した理由は判然としない。

126 杜紅葉

津の国や幾たび雲の時雨れ来て杜の木の葉の色まさるらん

〔通釈〕 杜の紅葉

津の国よ。幾度、雲が時雨を降らせて来て、杜の木の葉の色が濃くなっていくのだろうか。

〔参考〕 津の国の生田の森の初時雨明日さへ降らば紅葉しぬべし（万代集・秋下・一一八六・教実。続千載集・秋下・五七一）

村時雨今朝も行き来の雲の杜幾たび秋の梢染むらん（宝治百首・秋・杜紅葉・一八九九・知家）
晴れ曇り時雨るるたびに神奈備の杜の木の葉ぞ濡れて色濃き（宝治百首・秋・杜紅葉・一九一八・但馬）
時雨れ行く日数に添へて片岡の森の木の葉は色まさりけり（新和歌集・秋・二六一・泰綱）

〔出典〕文永三年八月百五十首歌。→7。

〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・秋杜・五三九。

〔語釈〕○津の国―摂津の国のこと。歌枕。「摂津（の）国」でも「つのくに」と読む。

〔補説〕参考の但馬詠は、「晴れ曇り幾たび空に時雨れてか信田の杜を染めつくすらむ」（洞院摂政家百首東北大学本拾遺・紅葉・三〇四・隆祐。隆祐集・一五三）に倣っていようが、この両首に参考の泰綱詠も含めた類型の淵源は、「時雨の雨間なくし降れば神奈備の森の木の葉も色付きにけり」（古今六帖・第一・しぐれ・四九四・作者不記）に求められよう。

〔補説〕歌頭の合点を白滅。

山紅葉

127　紅（くれなる）の衣干（ころもほ）すかと見（み）ゆるかな紅葉（もみぢ）してけり天（あま）の香具山（かぐ）

〔通釈〕山の紅葉
（白妙ならぬ）紅の衣を干すかと見えることであるな。紅葉したのであった。天の香具山よ。

〔本歌〕春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山（新古今集・夏・一七五・持統天皇。原歌万葉集・巻

一・雑歌・二八、二句原文「衣乾有」の訓は「衣ほしたり」他）

〔参考〕紅の衣かけたる佐保山と見ゆるは嶺の紅葉なりけり（久安百首・秋・七四九・実清）

秋深み時雨るるままに紅葉葉はみな紅の衣手の杜（正治後度百首・秋・紅葉・九三七・越前）

紅にちしほや染めし山姫の紅葉がさねの衣手の森（洞院摂政家百首・秋・紅葉・七七七・俊成女。現存六帖・もみぢ・四六六。俊成卿女集・一一七）

紅の衣かけ干す佐保山に染むる時雨の雨は厭はず（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・冬・二〇七・厳雅）

〔語釈〕○紅葉してけり―先行例は後鳥羽院の「大堰川嵐の山の影見えて底の梢に紅葉してけり」（正治後度百首・秋・紅葉・三六。後鳥羽院御集・一三六）。ここは四句が独立して切れる。○天の香具山―→51。

〔補説〕古歌を本歌にしつつ院政期以降の趣向も取り込むのは、宗尊の詠法の典型の一つ。

128　百首の歌の中に

竜田川紅葉の陰に鳴く鹿の声も時雨れて秋風ぞ吹く

〔通釈〕百首の歌の中で

竜田川では、紅葉の陰に鳴く鹿、その声も、時雨が降ると共に時雨のように響いて、秋風が吹くことだ。

〔本歌〕雨降らば紅葉の陰に宿りつつ竜田の山に今日は暮らさん（続古今集・羈旅・八九八・素性。素性集・竜田山越ゆる程に時雨降る・五〇、三句「隠れつつ」五句「宿り果てなむ」。万代集・雑四・三三五〇、三・五句同上。雲葉集・秋下・六九六、三句同上五句「今日や暮らさん」）

〔参考〕竜田山朝霧隠れ鳴く鹿の声の色なる秋風ぞ吹く（万代集・秋下・一〇八七・忠信）
おのがやがて染めし紅葉の散るときは同じ声にぞまた時雨るなる（俊成五社百首・日吉・冬・時雨・四五七）
秋の色は木の葉のみかは竜田山袖に時雨るる小牡鹿の声（最勝四天王院和歌・竜田山・三二・慈円）
一目見し遠ぢの村のはじ紅葉またも時雨れて秋風ぞ吹く（順徳院百首・秋・五三。秋風集・秋下・四一一・順徳院）

〔影響〕竜田山散らぬ紅葉に木隠れてゆふつけ鳥の声ぞ時雨るる（草根集・秋・山紅葉・四八二四）

〔他出〕夫木抄・秋三・鹿・御集、紅葉・四六二七、初句「竜田山」。

〔語釈〕○百首の歌→94。○竜田川―大和国の歌枕。現奈良県の生駒山中に源流して生駒郡斑鳩町で大和川に注ぐ川。○声も時雨れて―先行の類例を見ない句。後出では、影響歌と見た正徹詠の他に、近世の武者小路実陰に「入相の声も時雨れて行く雲にまよふ嵐の空ぞ寒けき」（芳雲集・冬・冬夕・三一九八）がある。

（百首の歌の中に）

129　形見（かたみ）とや時雨（しぐれ）も露（つゆ）も侘（わ）び人の袖（そで）に残（のこ）して秋（あき）の行（ゆ）くらん

〔通釈〕（百首の歌の中で）
それを形見だと、（涙の）時雨も（涙の）露も失意の人の袖に残して、秋が去って行くのだろうか。

〔参考〕草の葉にはかなく消ゆる露をしも形見に置きて秋の行くらん（金葉集・秋・二五五・師俊）

秋の色をいかに待ち見ん常磐山時雨も露も染めじと想へば（続古今集・秋下・五〇一・公朝）

惜しみ得ぬ涙の露を形見にて袖に残れる秋もはかなし（弘長百首・冬・初冬・三五二・基家。続古今集・冬・五四四）

露時雨袖に名残を偲べとや秋を形見の別れなりけん（拾遺愚草・雑・二八八一）

〔語釈〕○時雨も露も―「時雨」も「露」も、「侘び人」「袖」の縁で涙を寓意。「露も時雨も」の形では、古く『平中物語』の長歌に「…杜の木の葉は　君なれや　露も時雨も　ともすれば　もりつつ袖を　濡らすらむ…」（三段・二一・この男）が見える。勅撰集では『新古今集』に良経の「石上ふるの神杉古りぬれど色には出でず露も時雨も」（恋一・一〇二八・良経）が初出し、定家や後鳥羽にも作例があって、この「露も時雨も」の形が先行するようである。「時雨も露も」の形は、『建保名所百首』の次の四首が早い。「分きてしもいかに染むらん竜田山時雨も露も変はるものかは」（秋・竜田山同国〔大和国〕・三七四・行意）、「ただ染めよ時雨も露も置く霜もあはでの森の秋の暮れ方」（恋・阿波手杜尾張国・八一一・家隆）、「我が袖に時雨も露ももる山は下葉の外も色変はりけり」「忍び侘び時雨も露ももる山の色なる袖を何にまがへん」（恋・守山近江国、上野国・兵衛内侍・八五八、八六二・範宗）。これらを宗尊は見知っていたであろう。○侘び人―失意傷心の人、不本意に寂しく暮らす人。宗尊自身を言う。○袖に残して―「過ぎにけり信太の杜の郭公絶えぬ滴を袖に残して」（新古今集・夏・二一三・保季。千五百番歌合・夏二・七四二、初句「過ぎぬなり」）が勅撰集に初出の句。

九月尽

別れとて誰惜しむらむいつも我が身にのみ添へる秋の心を

〔通釈〕九月尽

秋との別れだといって、いったい誰が惜しんでいるのだろうか。常にこの我が身にだけは寄り添っている秋の心、愁いであるものを。

〔参考〕物色自堪傷客意（もののいろはおのづからかくのこころをいたましむるにたへたり）宜将愁字作秋心（うべなりうれへのじをもてあきのこころにつくれること）（和漢朗詠集・秋興・二二五・篁）

ことごとに悲しかりけりむべしこそ秋の心を愁へと言ひけれ（千載集・秋下・三五一・季通）

里分かず同じ夕べに行く春を我ぞ別れと誰惜しむらん（宝治百首・春・暮春・七六四・基家。続拾遺集・春下・一四四）

〔類歌〕いつまでかよそに別ると慕ひけん今は身に添ふ秋の心を（竹風抄・巻二・文永五年十月三百首歌・暮秋・三九四）

〔語釈〕○秋の心―形声の「愁」の字の「秋」と「心」を切り離して言う。従って逆に「秋の心」で「愁」を表す。

〔補説〕歌頭に合点あり。

冬

初冬

131 いつしかと今朝（けさ）も涙（なみだ）の時雨（しぐれ）して袖（そで）にまづ知（し）る神無月（な）かな

〔通釈〕初冬

早くも、（冬になった）今朝も涙の時雨が降って、袖で先ず最初に知る神無月、冬十月であることだな。

〔本歌〕世の中の憂きもつらきも告げなくにまづ知るものは涙なりけり（古今集・雑下・九四一・読人不知）

〔参考〕いつしかと袖に時雨のそそくかな思ひは冬の初めならねど（千載集・恋一・六九二・賀茂重延）
いつしかと今日や葉守の神無月まばらになりぬ柏木の杜（正治後度百首・紅葉・六三九・長明）
人知れぬ涙は今日ぞ初時雨いつしか袖の色に出でにける（和歌所影供歌合建仁元年八月・初恋・一七九・秀能）
いつしかと時雨にしるし神無月今朝こそ冬の初めなりけれ（秋夢集・一四）
侘び人や神無月とはなりにけむ涙のごとく降る時雨かな（新勅撰集・冬・三六四・元方）
月のうちの桂の枝を思ふとや涙の時雨降る心地する（新勅撰集・恋五・九五二・光孝天皇）

〔類歌〕冬来ぬと言はぬを知るも我が袖の涙にまがふ時雨なりけり（続古今集・冬・五四六・宗尊）

〔語釈〕○いつしかと―（いつの間にか）早くも、の意。○今朝―「神無月」になった日の朝。

時雨

132　神無月時雨（しくれ）も時（とき）にあふものをいたづらにのみふる涙（なみた）かな

〔通釈〕時雨

神無月冬十月に、時雨も降る絶好の時節になっているのだけれど、ただ虚しいばかりに時を過ごして降り落ちる涙であることだな。

〔参考〕我が身世にふるとも見えぬ春雨のいたづらにのみ濡るる袖かな（万代集・雑六・三六六四・明教）

〔類歌〕いたづらに涙時雨れて神無月我が身ふりぬる杜の柏木（続古今集・雑上・一六一九・教定）
神無月時雨るる空をながめてもいたづらにふる身を嘆くかな（続拾遺集・雑秋・六三九・円勇）

〔語釈〕○ふる―「時雨」の縁語「降る」（涙が流れることの比喩）に、「時」の縁で「経る」が掛かる。

〔補説〕類歌「いたづらに」の歌の作者藤原教定は、宗尊幕下の関東祇候の廷臣で、同歌壇の主要歌人。この歌は弘長元年（一二六一）九月の「中務卿親王家百首歌」の一首。また、類歌「神無月」の歌の作者円勇は、園城寺僧で鶴岡八幡宮乗蓮坊に止住した法体歌人。同じく宗尊幕下の関東歌壇に活躍した。

（時雨）

133 神無月空行く雲の晴るる間はあれども袖のなほ時雨れつつ、

〔通釈〕（時雨）
神無月は、空を流れ行く（時雨を降らせる）雲が晴れる間はあるけれども、私の袖は依然として涙の時雨が降り続いていて。

〔参考〕ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる袖ぞ乾くよもなき（新勅撰集・冬・三八一・紫式部）
秋もなほ野原の露の置かぬ夜はあれども袖の濡れぬ日はなし（道助法親王家五十首・恋・寄露恋・八六五・家隆。壬二集・一七八〇）

〔語釈〕○あれども―「駿河なる田子の浦浪立たぬひはあれども君を恋ひぬ日はなし」（古今集・恋一・四八九・読人）が原拠。参考の家隆詠もこれを本歌にする。○時雨れつつ―涙が断続的に流れ落ちることを時雨れることに喩

えて言う。

（時雨）

134　神無月時雨の空に行く雲のうきてやつひに我が身ふりなむ

〔通釈〕（時雨）

神無月に時雨が降る空に流れ行く雲が浮いて、とうとうこの憂き我が身が古びてしまうのだろう。

〔本歌〕水無瀬川ありて行く水なくはこそつひに我が身を絶えぬと思はめ（古今集・恋五・七九三・読人不知）

〔参考〕今はとてわが身時雨にふりぬれば事のはさへにうつろひにけり（古今集・恋五・七八二・小町）

晴れ曇り時雨は定めなきものをふりはてぬるは我が身なりけり（新古今集・冬・五八六・道因）

風吹けば空にただよふ雲よりもうきて乱るる我が心かな（新勅撰集・恋四・八九一・二条太皇太后宮大弐）

〔語釈〕○うきてやつひに―珍しい句形。「うきて」は、「浮きて」に「我が身」「ふり（古り）」の縁で「憂きて」が掛かる。○ふり―「古り」に「時雨」の縁で「降り」が掛かる。

〔補説〕歌頭に合点あり。

135　前相国の事はかなく聞こえし頃、時雨したる日、人のもとへ言ひつかはし侍りし

さらでだに定めなき世の悲しきを空に知らする村時雨かな

〔通釈〕前の相国（前太政大臣西園寺公相）の（死の）ことが空しく耳に入った頃、時雨が降った日、人の許へ言い送りました（歌）

そうでなくてさえ定めのないこの世が悲しいのに、さらにそれを、空で（定めなく降り）暗に知らせる、村時雨であることだな。

〔参考〕神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける（後撰集・冬・四五五・読人不知）

晴れ曇る時雨の空をながめても定めなき世ぞ思ひ知らるる（久安百首・冬・一〇五五・待賢門院堀川）

晴れ曇る秋の山辺の村時雨定めなき世に濡るる袖かな（秋風抄・雑上・一一二九・良印）

ながめても定めなき世の悲しきは時雨に曇る有明の空（拾遺愚草・初学百首・無常・八八）

偽りのなき世の人の言の葉を空に知らする有明の月（続後撰集・釈教・六一一・蓮生〔頼綱〕）

〔語釈〕○前相国の事はかなく聞こえし頃―前太政大臣の西園寺公相の死の無常を言うか。弘長元年（一二六一）十二月十五日に太政大臣従一位、翌同二年（一二六一）七月二日辞任。文永四年（一二六七）十月十二日に四十五歳で没。○定めなき世―公相が父親実氏に先立ち四十五歳で亡くなったことを念頭に置くか。『増鏡』（北野の雪）によると、後嵯峨院に心底の憂いを問われて公相は「いかにも入道相国〔実氏〕に先立ちぬべき心地なんし侍る。恨みの至りて恨めしきは、盛りにて親に先立つ恨み、悲しみの切に悲しきは、老いて子に遅るる悲しみには過ぎず、などこそ、〔大江朝綱が子の〕澄明に遅れたる願文にも書きて侍りしか」と言ったといい、公相は「その後幾程なく悩み給ふよし聞こゆれど、さしもやはと覚えしに、いとあやなく失せ給ひぬ」（講談社学術文庫本により表記は改める）という。○空に―暗に・何となくの意に、天空での意が掛かる。○村時雨―急激に一頻り降っては止みまた降りしながら通り過ぎる雨。

〔補説〕右記のように公相の追悼歌だとすると、文永四年（一二六一）十二月に為家の加点・評詞を得た本集の中で、最も詠作時期が遅い歌の一つ。従って、『中書王御詠』の成立は、同年十一月前後ということになろうか。歌頭に合点あり。

136　橋辺時雨

真野の浦の小菅のを笠とりもあへず時雨れて渡る淀の継橋

〔通釈〕橋の辺りの時雨

真野の浦の、小菅で編んだ菅笠を被ることもできず、時雨がさっと降り過ぎて行く淀の継橋を、時雨に降られながら渡るよ。

〔本歌〕真野の浦の淀の継橋心ゆも思ふや妹が夢にし見ゆる（万葉集・巻四・相聞・四九〇・吹芡〔吹黄〕刀自。五代集歌枕・一〇〇六、三句「心にも」）

吾妹子が袖を頼みて真野の浦の小菅の笠を着ずて来にけり（万葉集・巻十一・寄物陳思・二七七一・作者未詳。続後撰集・羈旅・一三一九・人麿、結句「すぎて来にけり」）

神無月深くなりゆく梢より時雨れて渡る深山辺の里（後拾遺集・冬・三八一・永胤）

〔参考〕知るらめや淀の継橋よとともにつれなき人を恋ひ渡るとは（金葉集・恋上・三七四・長実母）

取りあへぬ三笠の森の神無月頼む陰なく洩る時雨かな（百首歌合建長八年・冬・一〇二六・良教）

〔類歌〕真野の浦の入江も遠く霧晴れて秋風渡る淀の継橋（竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・秋橋・

五六一）

〔影響〕木の下や風にきほひて時雨るらんみ笠とりあへぬ宮城野の原（宗良親王千首・冬・野時雨・五〇九）
柴人の笠もとりあへず山風の時雨降り来る峰のかけ橋（雪玉集・雑・永正十二四御月次・橋雨・二一九一）

〔他出〕夫木抄・雑十四・笠・こすげのをがさ・同（六帖題）・一五一八二。

〔語釈〕○橋辺時雨―珍しい歌題。○真野の浦―近江国の歌枕。滋賀郡真野郷（現滋賀県大津市真野）の湖岸を言う。○小菅のを笠―「小」も「を」も接頭語。「真野の浦」から続いて、真野の浦に生える菅で編んだ笠の意となる。○とりもあへず―前句の「小菅のを笠」までが有意の序として働き、「（笠を）取りも敢へず」（取って被ることもできずに）を起こし、「取りも敢へず」（副詞「取り敢へず」に強意の「も」が挟まった形。あっという間にの意）が掛かる。○時雨れて渡る―本歌の『後拾遺集』歌の詞を取る。時雨が降り過ぎて行く意に、人が時雨の降る中で渡る意が掛かり、「淀の継橋」に続く。○淀の継橋―水の淀みに架けられた継ぎ継ぎの橋を言うが、ここは「真野の浦」とあるので、近江国のそれと認識したか。『八雲御抄』（巻五・名所部）は山城国とする。『夫木抄』（雑三・橋）に「よどのつぎはし、山城或近江」とするのは、『八雲御抄』等を踏襲しつつ、右記の「真野の浦の淀の継橋」の歌を引くので、それにも基づいていよう。

〔補説〕三首の古歌を本歌に取ると解した。なお、『後拾遺集』初出歌人永胤の歌を本歌と見ることについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。
序詞・縁語・掛詞が絡み合った仕立て方も、宗尊の方法の一つであろう。
影響歌とした両首の内、前者は、宗尊からの影響関係が認められる宗良の詠作であるので、その一連と見ておく。後者は、三条西実隆の詠作全体の中で、改めて検証する必要があろう。

歌頭に合点あり。

山家時雨

137 山高み籬ばかりの時雨にて峰の庵にかかる浮雲

〔通釈〕 山家の時雨

山が高いので、（そこにあるこの庵の）ちょうど籬の高さぐらいから降る時雨であって、峰の庵にはその時雨を降らせる雲が覆い掛かる、このような浮雲よ。

〔参考〕 かけつくる峰の庵の高ければ籬を出づる山の端の月（百首歌合建長八年・秋・三八六・経家）

時雨れ来んほども近しや向かひなる片岡山にかかる浮雲（同・冬・一〇五四・忠定）

〔語釈〕 ○山高み籬ばかりの時雨にて―山がすごく高いので、その峰に構えた庵に雲が掛かり、まさにその庵の籬の高さぐらいから時雨が下に降っているように見えて、ということか。○かかる―「掛かる」と「斯かる」の掛詞に解した。

〔補説〕 きわどい趣向の細かい叙景の一首で、これは宗尊の歌の中でも特にこの『中書王御詠』に目に付く詠みぶりであろうか。

夜時雨

138 真木の屋に音せざりせは村時雨降るとも夜半の夢は見てまし

〔通釈〕夜の時雨

真木で屋根を葺いた家にその音がしなかったならば、村時雨が降るとしても、夜中の夢はきっと見ただろうに。

〔参考〕冬来ぬといかで知らまし山里は夜半の時雨の音せざりせば（久安百首・冬・一二五一・待賢門院安芸）

音にさへ袂を濡らす時雨かな真木の板屋の夜半の寝覚めに（千載集・冬・四〇三・源定信。金葉集正保版二十一代集・冬・六八三、初句「音にだに」）

厭ひ出でて都かたしく真木の屋に夢だに見せぬ村時雨かな（拾玉集・厭離欣求百首・三一七九）

〔語釈〕○真木の屋―檜や杉の板で屋根を葺いた家屋。○村時雨―→135。

〔補説〕歌頭に合点あり。

139　落葉如雨といふことを

木の葉散る真木の板屋の寝覚めには晴れても晴れぬ時雨をぞ聞く

〔通釈〕落葉雨の如しということを

木の葉が散る真木の板屋で寝て夜中の目覚めには、時雨が晴れても晴れない（木の葉が板屋に散る）時雨の音を聞くことだ。

〔本歌〕木の葉散る宿は聞き分くかたぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も（後拾遺集・冬・落葉如レ雨といふ心をよめる・三八二・頼実）

〔参考〕名残なく時雨の空は晴れぬれどまだ降るものは木の葉なりけり（詞花集・秋・一三五・俊頼）

音にさへ袂を濡らす時雨かな真木の板屋の夜半の寝覚めに（千載集・冬・四〇三・源定信。金葉集正保版二十一代集・冬・六八三、初句「音にだに」）

村雨の晴れても晴れぬ峰の雲にすめばすみぬと蝉のもろ声（影供歌合建仁三年六月・雨後聞蝉・一〇六・鴨長明）

〔語釈〕○落葉如雨―「葉声落如レ雨、月色白似レ霜」（白氏文集・巻十・秋夕）を踏まえるか。○真木の板屋―「真木の屋」に同じ。→138。

〔補説〕『後拾遺集』初出歌人源頼実の歌を本歌と見ることについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

歌頭の合点を白滅。

朝落葉

140　真木の屋に積もる木の葉を今朝見ずは時雨とのみや思ひ果てまし

〔通釈〕朝の落葉

真木の屋に積もる木の葉を今朝見ないなら、（昨夜降ったのは木の葉ではなく）時雨とばかり思ってすんだであろうか。

〔本歌〕水の面に月の沈むを見ざりせば我ひとりとや思ひ果てまし（拾遺集・雑上・四四二・文時）

〔参考〕真木の屋に積もる木の葉を吹き払ふ山風つらく洩る時雨かな（百首歌合建長八年・冬・七九八・忠基）

今朝見ずはまがひなましを夕顔に垣根に白く咲ける卯の花（江帥集・雑・三八九。和歌一字抄・似・九四七、三句「夕顔の」）

神無月時雨とのみや思ふらむ天つ空にて侘ぶる涙を（秋風集・恋上・七四二・高明。新千載集・恋四・一五三五。西宮左大臣集・四一）

〔類歌〕時雨とや思ひ果てまし松風を梢の月の洩り来ざりせば（雅兼集・月照松・四五）

〔語釈〕○真木の屋――→138。○思ひ果て―最後まで思い通す意。

〔他出〕新後撰集・冬・朝落葉といへる心を・四五一、四句「時雨とのみぞ」。題林愚抄・冬上・朝落葉　新後撰・五一一五。

百五十首の歌に、冬夜

141　夜も長し嵐も寒く時雨るなり寝覚めせよとはなれる頃かな

如レ此事雖二有レ興候一、決而不二庶幾一候

〔本文〕○為家評詞―「如此事」と「雖」の間に「可然候歟」を墨滅。

〔通釈〕冬の夜

夜も長い。激しく吹く風も寒く、時雨が降る音が聞こえる。まさに、夜に寝て目覚めよ、とばかりになっているこの頃であることだな。

かくの如き事、興有りて候ふと雖も、決して庶幾せず候ふ。（このような事は、興有るようでありますけ

れども、決して庶幾わなくございます。）

〔参考〕寝覚めする袖さへ寒く秋の夜の嵐吹くなり松虫の声（新古今集・秋下・五一一・大江嘉言）
時しもあれ秋は嵐の寒ければ長き夜あかず衣打つなり（宝治百首・秋・聞擣衣・一八三一・高倉）
音さゆる風のまにまに霰降り夢路絶えねとなれる頃かな（正治初度百首・冬・一二六四・隆信。隆信集・冬・正治二年百首歌たてまつりしに・二七七、初句「音さやぐ」）
神無月時雨るるたびに寝覚めして長き夜しもぞ夢は短き（東撰六帖抜粋本・冬・時雨・三六九・公朝）

〔出典〕文永元年八月百五十首歌。→7。

〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・冬夜・五三一。

〔語釈〕○百五十首の歌→101。○寝覚めせよとは―「…せよとは」の形は珍しい。「五月山越えこそやらね時鳥旅寝せよとはかたらはねども」（治承三十六人歌合・山路郭公・二三一・祐盛）が早い例。先行歌に拠らなければ詠出し得ない訳ではなかったろうが、「いにしへは誰か教へし郭公花橘に名のりせよとは」（洞院摂政家百首・夏・郭公・四〇〇・但馬）や「入がたの月やは人に教へけむあかで有明の別れせよとは」（宗尊親王百五十番歌合・恋・二八二・時遠）等は、宗尊にとって身近な先行例ではあったろう。

池水

142　氷るらん冴ゆる嵐の山陰に春見しままの庭の池水

〔通釈〕池の水

氷っているだろう。寒く冴える激しい風が吹く山陰で、春に見たきりの（冬の）庭の池の水は。

〔参考〕かはらじな春見しままの峰の松音に嵐の秋はありとも（日吉社大宮歌合承久元年・社頭松風・二一・順徳院。紫禁集・一一六一）

〔類歌〕山陰の田面の池の冬寒み氷りにけりな洩る水もなし（宝治百首・冬・池水・二二〇七・為家）

わきてなほ氷りやすらん大井川さゆる嵐の山陰にして（風雅集・冬・七九五・基嗣）

〔語釈〕○春見しままの―春に見たのと同じままであるの意。参考の順徳院歌に学ぶか。同院には別に「難波江や蘆の刈り根は霜枯れて秋見しままの月ぞ残れる」（紫禁集・冬・三九七）という作もある。

〔補説〕大きな枠組みでは、「袖ひちて結びし水の氷れるを春立つ今日の風やとくらむ」（古今集・春上・二・貫之）の、季節を逆転させたような趣が感じられなくもない。

百首の歌の中に

143　鳴き渡る鶴の一声空冴えて氷る霜夜の月ぞ更け行く

〔通釈〕百首の歌の中で

鳴いて飛び渡る鶴の一声に空が冷たく冴えわたって、氷る霜の降る夜の月が更けて行くことよ。

〔参考〕瑶台霜満（えうたいにしもみてり）　五夜之哀猿叫月（ごやのあいゑんつきにさけぶ）（和漢朗詠集・猿・四五四・謝観）

浜松の梢の風に年古りて月にさびたる鶴の一声（玉吟集〈高松宮旧蔵本〉・百首和歌後度・雑・鶴・一八五。

家隆卿百番自歌合・雑・私百首・一六八）

〔語釈〕○百首の歌―→94。○鳴き渡る―鶴を言う歌語「たづ」について言うのは常套だが、「つる」について言うのは珍しい。○鶴の一声―歌語としては必ずしも常套ではない。早く『元真集』に「冬の夜の長きをおくる程にしも暁方の鶴の一声」（一八九）が見えるが、これは詞書「人の子うみたる七夜」で、子を思う「夜鶴」の故事を踏まえたものであろう。参考の詩句等が宗尊の念頭にはあったかもしれないし、家隆の歌に学んだ可能性も否定されない。○空冴えて―この句形は新しい。先行例は「冬の夜はあまぎる雪に空冴えて雲の波路に氷る月影」（新勅撰集・冬・四〇二・宜秋門院丹後。千五百番歌合・冬三・一九五五）。○氷る霜夜―鎌倉時代前期頃から見え始める詞。「都鳥声も寒けく舟きほふ堀江の河の氷る霜夜に」（新撰六帖・第二・みやこどり・七五六・家良）は、宗尊の視野に入っていたであろう。○月ぞ更け行く―これも鎌倉時代前期頃から見え始める句。「逢ふことは寝るを頼みの夢路にて緒絶の橋に月ぞ深け行く」（建保名所百首・緒断橋同国〔陸奥国〕・九〇七・家隆。家隆卿百番自歌合・恋・内裏百首名所・一五四。壬二集・七七六）が有力な先行例。

〔補説〕第三句以下は、鎌倉時代前期から見える新しい措辞で構成されている。

冬月

144　更け行けば月影寒し鵲の夜渡る橋に霜や置くらん

本歌似過候歟

〔通釈〕冬の月

夜が更けて行くので、月の光が冴えて寒い。月光が夜に（空を西へ）渡って行く、鵲が（天の川を）渡るように架けた橋に、霜が置いて（その上に月光が白く照らして）いるのだろうか。

本歌似過ぎて候ふか。（本歌に似過ぎておりましょうか。）

**〔本歌〕** 鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける（新古今集・冬・六二〇・家持）

**〔参考〕** 天の河夜渡る月も氷るらん霜に霜置く鵲の橋（拾遺愚草員外・四季題百首・四季月・五一四）

月影の白きを見れば鵲の渡せる橋に霜ぞ置きにける（金槐集定家所伝本・秋・月影霜に似たりといふことをよめる・二九〇）

鵲の峰飛びこえて鳴き行けば夏の夜渡る月ぞ隠るる（後撰集・夏・二〇七・読人不知）

鵲の門渡る橋も白妙の初霜急ぐ秋の月影（弘長百首・秋・月・二九五・家良。続拾遺集・秋下・三二一）

月影の重ねて白く見ゆるかな更け行くままに霜や置くらん（玄玉集・天地下・三〇〇・公重）

**〔語釈〕** ○鵲の夜渡る橋―「鵲の」は「渡る」と「橋」にかかる。「鵲の渡せる橋」の類の言い換えであろうが、やや詞足らずの感が残る。「鵲の（渡せる）橋」は、七月七日の夜に牽牛と織女の二星が逢う時に、鵲がその翼を連ねて天の川の上に渡すという橋。「烏鵲塡レ河成レ橋度二織女一」（白孔六帖。原拠は淮南子）など中国の伝説が典故。「夜渡る」は、「月影」の縁で、月が夜に空を西へ渡る意に橋を渡る意が重なって掛かる。○霜や置くらん―実際に霜が置いていることに、白い月光が照らしていることを比喩するか。

**〔他出〕** 新後拾遺集・秋下・題しらず・四二二、結句「霜や冴ゆらむ」。

**〔補説〕** より直接には、参考の定家詠に倣ったのではない。

千鳥

145　白波の騒ぐ入江の友千鳥よにすみ難き音をやなくらん

〔通釈〕千鳥

白波が騒ぐ入江にいる友千鳥は、その水が実に澄みにくいので声を上げて鳴いているのだろうか。そのように、誠にこの世に住み難い我が身故に、声を上げて泣くのだろうか。

〔本歌〕蘆鴨の騒ぐ入江の水の江のよにすみ難き我が身なりけり（新古今集・雑下・一七〇七・人麿）

〔参考〕白波に声うちそふる友千鳥群れてぞ渡る浦づたひすと（久安百首・冬・一五八・公能）

〔語釈〕○白波の―「騒ぐ」の枕詞だが、ここは有意か。○千鳥―ちどり科の小型の鳥。水辺に群れなす。○友千鳥―群れて連れ立つ千鳥を言う。ここまでが序詞とも言える。○よに―実にの意の副詞「よに」に「世に」が掛かる。○すみ難き―「白波」「騒ぐ」の縁語の「澄み難き」に「住み難き」が掛かる。○なくらん―「鳴くらん」に「泣くらん」が掛かる。

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・冬・七六〇。

〔補説〕失脚する前年の歌だが、四季歌に述懐を詠じるのは、宗尊の常套。→89。

（千鳥）

146　更け行けば山おろし冴えてさざなみの比良の湊に千鳥鳴くなり

〔通釈〕（千鳥）

夜が更けて行くと、山から吹きおろす風が冷たく冴えて、比良の湊に千鳥が鳴く声が聞こえる。

〔参考〕我が舟は比良の湊に漕ぎ果てむ沖へな行きそさ夜更けにけり（万葉集・巻三・雑歌・二七四・黒人）

月影に与謝の浦浪更け行けば松の風さえ千鳥鳴くなり（拾玉集・宇治山百首・冬・千鳥・一〇六四）

雪消えぬ比良山おろしなほ冴えて霞に氷る志賀の浦浪（老若五十首歌合・春・一八・雅経）

この里は比良山おろしなほ冴えて春とも分かず雪ぞ降りしく（宝治百首・春・春雪・一〇九・成茂）

さざなみや比良の湊の山おろしにふな入りわぶる志賀の大わだ（新撰六帖・第三・みなと・一二一一・家良）

〔語釈〕○山おろし冴えて―珍しい句形。宗尊は「冬されば山おろし冴えてたかまつの野の上の草葉霜枯れにけり」（柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・冬・七五六）とも詠む。○さざなみの―「比良」の枕詞。○比良の湊―近江国の歌枕。「比良」は、近江国志賀郡比良（現滋賀県大津市南比良・北比良）の地で、琵琶湖西岸に沿う。西が比良山地、東が湖岸に当たる。「湊」は、その北にある現在近江舞子（大津市南小松）と呼ばれる辺りか。

〔他出〕夫木抄・冬二・千鳥・六帖題御歌・六八四五。新拾遺集・冬・同じ（千鳥）心を・六一二。

〔補説〕歌頭に合点あり。

147　水鳥

沈む身は理なりや水の上にうきたる鳥も音をばなく世に

〔本文〕 ○なく世に―底本は「なくなり」の「なり」の上に「世に」を上書きか。書陵部本は「なくよに」

〔通釈〕 水鳥

世に沈むこの憂き身は、当然であるのか。沈むどころか水の上に浮いている鳥でも、声を上げて鳴くこの世の中で、私は声を上げて泣いて。

〔本歌〕 水の上に浮きたる鳥の跡もなくおぼつかなさを思ふ頃かな（新古今集・恋一・一〇二一・伊尹）

〔参考〕 浮き沈み何かは分きて嘆くべき世の理に身をば任せて（弘長百首・雑・述懐・六五六・家良）

心からうきたる鳥の浮き沈み蘆分け舟のさはるのみかは（仙洞句題五十首・恋・寄舟恋・二八五・俊成女）

〔語釈〕 ○沈む身―沈淪する身。「沈む」は「水」「浮き」と縁語。○うき―「浮き」に「沈む身」「なく（泣く）」の縁で「憂き」が掛かる。○なく―「鳴く」に「沈む身」「うき（憂き）」の縁で「泣く」が掛かる。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の将軍更迭、京都送還後の作か。

参考の俊成女詠は、「心からうきたる舟に乗りそめてひと日も浪に濡れぬ日ぞなき」（後撰集・恋三・七七九・小町）と「湊入りの葦分けを舟さはりおほみ我が思ふ人にあはぬ頃かな」（拾遺集・恋四・八五三・人麿。万葉集・巻十一・寄物陳思・二七四五・作者未詳、下句「我が思ふ君にあはぬ頃かも）の両首を本歌にする。

霰

148 冬されば初瀬をとめの袖冴えて手にまく玉と散る霰かな

〔通釈〕 霰

冬になると、初瀬乙女の袖は冷たく冴えて、まるで手に巻き付ける玉とばかり、散る霰であることよ。

**〔本歌〕** こもりくの泊瀬をとめが手に纏ける玉は乱れてありと言はじやも（万葉集・巻三・挽歌・四二四・山前王）

**〔参考〕** 冬来ては初瀬をとめの衣手に玉と乱れて降る霰かな（弘長百首・冬・霰・三九〇・為氏）
やすくやは夢も結ばん袖さえて寝られぬ閨に霰降る夜は（百首歌合建長八年・冬・一一七二・鷹司院帥）

**〔出典〕** 文永三年十月五百首歌。→1。

**〔他出〕** 竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・霰・六六。夫木抄・未通女・雑十七・御集、霰・一六五八八。

**〔語釈〕** ○霰―『古今六帖』（第一・天）の「あられ」。○初瀬をとめ―石田王の死を哀傷する歌の反歌である本歌では、藤原宮に居したと思しい石田王の、初瀬に住んでいたらしい愛人を言う。しかし、万葉左注には、「右二首者或云、紀皇女薨後山前王代二石田王一作之也」とあり、これに従えば、妻紀皇女を亡くした夫石田王の思いを、山前王が代作したということになる。いずれにせよ、「初瀬をとめ」は、古代の女性の印象があり、該歌もそれを踏まえていよう。○散る霰かな―宗尊は先に「さえ暮らす峰の浮き雲と絶えして夕日かすかに散る霰かな」（瓊玉集・冬・三百六十首中に・三〇三）と詠んでいて、これがこの句形の早い例となる。

**〔補説〕** 本歌は、愛する人の死を玉の緒が切れて乱れることに譬えて悲傷する歌。該歌は、その趣を残しつつ、霰を玉に見立てる趣向。
参考歌一首目に倣うか。また、二首目の作者鷹司院帥は真観の女であり、これにも宗尊が意を向けていた可能性は見てよいであろう。
歌頭に合点あり。

初雪

149 里はなほ今日も時雨れて信楽の外山ばかりに降れる初雪

〔通釈〕初雪

里は依然として今日も時雨れていて、信楽の里近くの山だけに降っている初雪よ。

〔本歌〕昨日かも霰降りしは信楽の外山の霞春めきにけり（詞花集・春・二・惟成。新撰朗詠集・春・霞・七一）

〔参考〕群雲の外山の峰にかかるかと見れば時雨るる信楽の里（新勅撰集・冬・三八七・平経正）

初時雨昨日も今日も信楽の外山の里に冬は来にけり（新和歌集・冬・二七四・西入法師）

信楽の外山ばかりに見し雪の里まで積もる時は来にけり（弘長百首・冬・雪・三九九・家良。続後拾遺集・冬・四八四）

〔語釈〕○信楽―近江国の歌枕。近江国甲賀郡信楽（現滋賀県信楽町）。天平年間に聖武天皇の離宮紫香楽宮が置かれていた。○外山―連山の一番外側の山。「深山」の対で、人里に近い山。ここは後者。

〔補説〕参考歌の内、『弘長百首』の家良詠は、用詞や歌境の点で宗尊の歌に近似する。正確には両者の先後は不明。歌頭に合点あり。

文永三年の冬、雪降りたる朝、人のもとへ

150 埋もれぬ我が身なりせばこの雪に訪ひ来る人の跡や待たまし

此雪、不二甘心一候

〔通釈〕文永三年の冬、雪が降った朝、人の許へ

（雪ならぬ世に）隠れ埋もれていない我が身であったならば、この雪に尋ねて来る人の足跡を待とうものを。

この雪、甘心せず候ふ。（「この雪」は、感心しないことです。）

〔参考〕埋もるるあはれ我が身のためしとてなげきの杜は雪や降りぬる（百首歌合建長八年・冬・九二八・実伊）

初雪のひとへ降るにも跡絶えて訪ひ来る人もなき住みかかな（出観集・冬・五七九）

雪降れば訪ひ来る人も跡絶えぬ花にかはらぬ梢なれども（正治初度百首・冬・九六六・季経）

誰を訪ひ誰を待たましとばかりに跡絶え果つる雪の山里（正治初度百首・冬・四七〇・良経。秋篠月清集・七六六）

〔類歌〕山深きすみかならずは庭の雪に訪はれぬまでも跡や待たれん（新後拾遺集・冬・五五四・浄弁）

〔語釈〕○文永三年の冬―宗尊が失脚し帰洛した同年（一二六六）秋の直後の冬。○埋もれぬ―「埋もる」は、世間から離れる、世に隠れているとの意。「雪」の縁語。○この雪―為家が批判するのは、必ずしも伝統的な和歌の詞ではないからであろう。ただし、原拠は『万葉集』の「この雪のけ残る時にいざかへな山橘の実の照るも見む」（巻十九・四二二六・家持）である。『金槐集』（貞享四年刊本）には「この雪を分けて心の君にあれば主知る駒のためしをぞひく」（三八六・行光）が見える。

〔補説〕微かに「子猷尋戴」（蒙求）の故事を意識するか。

（文永三年の冬、雪降りたる朝、人のもとへ）

寂しくて我が身世にふる宿なれは都の雪も見るかひぞなき

初句、不二庶幾一候

〔通釈〕（文永三年の冬、雪が降った朝、人の許へ）

我が身がこの世で寂しくて過ごす家であるので、降る都の雪も見るかいがないことだ。

初句、庶幾せず候ふ。（初句は、庶幾わなくございます。）

〔本歌〕奥山の松葉に氷る雪よりも我が身世にふるほどぞ悲しき（続後撰集・冬・五一三・紫式部。万代集・雑一・二九五四。万代集・雑一・二九五四。伊勢大輔集時雨亭文庫本・一四）

〔参考〕寂しくてふりぬるものはみの山の一木の松と我となりけり（現存六帖・まつ・五一一・雅成。雅成親王集・寄松述懐・四八）

〔語釈〕○寂しくて―「ふる」にかかる。本集18番歌にも第三句に用いられているが、そこに為家は発言していない。為家の批判はこの詞を初句に置くことを咎めたものか。○ふる―「経る」に「雪」の縁で「降る」が掛かる。原拠は「花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」（古今集・春下・一一三・小町）で、本歌として挙げた紫式部詠も、この歌を踏まえていよう。○見るかひぞなき―慈円や良経および隆信等新古今歌人が詠み始めた句。

庭雪

152　さこそはあれ出で入る人の跡もなし身の理の庭の白雪

初句不幽玄候―同前―歌八卅十字物候（墨滅）

〔通釈〕庭の雪

そうであろうけれども。やはり出入りする人の足跡もないよ。（沈淪する）我が身故に当然の、庭の白雪よ。

初句は、幽玄ならず候ふ。前に同じ。歌は三十一字の物に候ふ。（初句は幽玄でなくございましょうか。前に同じです。歌は三十一字（しかない）ものでございます。）（墨滅）

〔本歌〕おのづからさこそはあれと思ふ間にまことに人の問はずなりぬる（新古今集・恋五・一三九九・経信母。続詞花集・恋中・五九二。経信母集・九）

〔参考〕忘らるる身は理と知りながら思ひあへぬは涙なりけり（詞花集・恋下・二六五・清少納言。清少納言集・一、二句「身の理と」）

昨日だに昔と言はば言はれなん身の理の秋の夕暮（弘長百首・恋・遇不逢恋・四九九・実氏）

〔類歌〕問はれぬる身の理と言ひながらさも跡も無き庭の雪かな（竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・冬閑居・五七六）

我が身世にこと繁かりし跡もなし昔にかはる庭の白雪（竹風抄・巻四・〔文永六年四月廿八日柿本影前百首歌〕・冬・六五三）

〔語釈〕○さこそはあれ―「さ」は、「跡もなし」を指すか。○出で入る人―自分の所に出入りする人。珍しい措辞。「出で入る」は「月」について言うのが常套。○身の理―文永三年（一二六六）秋に将軍を更迭され京都に送還された宗尊自身の沈淪した境遇故の道理、ということであろう。○為家評詞（墨滅）―「初句、不二幽玄候一歟。同レ前、歌ハ卅一字物候」。初句の「さこそはあれ」は、幽玄ではなく、前歌の初句と同じく「不二庶幾一候」であり、さらにはその初句が字余りであるが、歌は原則として三十一字に詠み収めるものだという批判か。

〔補説〕 為家が一旦は初句を批判しながらもそれを取り消したのは、本歌の存在に気付いたからか。

雪

153 埋もれぬ名もいかばかりふりぬらん長柄の橋の跡の白雪

〔本文〕 ○名も―底本「名の（見消ち字中）」（「の」を見消ちして右傍に「も」）。

〔通釈〕 雪

埋もれることのない名も、どれほど古びたことだろうか。長柄の橋の跡に降り埋む白雪よ。

〔本歌〕 世の中に古りぬるものは津の国の長柄の橋と我となりけり（古今集・雑上・八九〇・読人不知）

〔参考〕 跡もなき長柄の橋の真砂路に埋もれぬ名を聞き渡るかな（為家五社百首・恋・橋・住吉社・六二九）

いかばかりふり重ぬらん名に立てて津守の浦の冬の白雪（為家五社百首・冬・雪・住吉社・四一九）

〔類歌〕 聞きおきし長柄の橋はこれかさは雪ふりにけり跡だにもなく（太皇太后宮小侍従集・名所・長柄橋・一七七）

〔出典〕 文永三年八月百五十首歌。ただし歌題が異なる。→7。

〔他出〕 竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・冬橋・五六〇。

〔語釈〕 ○埋もれ―「白雪」の縁で、雪が降って埋もれる意が掛かる。○ふり―「古り」に「白雪」の縁で「降り」が掛かる。○長柄の橋―摂津国の歌枕。現大阪市北区長柄、東淀川区柴島の付近にあったという。弘仁三年（八一二）に使者を遣わし造橋も（日本後紀）、仁寿三年（八五三）十月十一日時点で既に「長柄三国両河。頃年橋

梁断絶。人馬不レ通」（文徳実録）という。院政期以降には、「聞き渡る長柄の橋は跡絶えて朽ちせぬ名のみとまるなりけり」（続詞花集・雑上・七五八・公重。風情集・長柄の橋・八〇。治承三十六人歌合・三〇七）や「今日見れば長柄の橋は跡もなし昔ありきと聞きわたれども」（千載集・雑上・一〇三一・道因）、あるいは「朽ちはつる長柄の橋の跡に来て昔を遠く恋ひ渡るかな」「ひとりのみ我や古りなん津の国の長柄の橋は跡もなき世に」（続後撰集・雑上・一〇二七、一〇二八・実氏、有教）等と、橋は朽ちて跡形もないものとの通念が認められる。

**〔補説〕** 153～155の「雪」題の三首は、『竹風抄』所収の「文永三年八月百五十首歌」の作だが、その歌題（冬橋・冬山家・冬述懐）とは異なっている。同百五十首の詠作の中から「雪」を詠み込んだ三首を、改めて「雪」題の下にまとめたのであろう。

歌頭に合点あり。

（雪）

154　おとづれて寂しきものは山里の寝覚めにかかる松の雪折れ

**〔通釈〕**（雪）

人が訪れるでもなく、音が聞こえて来て寂しいものは、山里で夜に目を覚ました時にその音が降りかかってくる、このような松の雪折れだよ。

**〔参考〕** 草の原かれにし人は音もせであらぬ外山の松の雪折れ（続後撰集・冬・五一〇・家隆。内裏百番歌合健保四年・冬・一五九。家隆卿百番自歌合・九七。壬二集・冬・二五八三）

夕暮の寂しきものは槿の花を頼める宿にぞありける（後撰集・雑四・一二八八・読人不知）

〔出典〕文永三年八月百五十首歌。ただし歌題が異なる。→7。

〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・冬山家・五七三。

〔語釈〕○おとづれて―音を立てて来ての意に、「山里」の縁で人が訪れないでの意の「訪れで」が掛かる。○寂しきものは―意外に先行例は少なく、参考の『後撰集』歌の他には、『万代集』の「世の中に寂しきものは霜枯れの冬の薄と我となりけり」（雑一・兼経）が目に入る程度。○寝覚めにかかる松の雪折れ―「かかる」を掛詞に「寝覚めに掛かる」（夜の目覚めに音が降りかかる意）から「斯かる松の雪折れ」（このような松の雪折れよの意）へ鎖る。先行する類例は「忍び住む心も堪へず山陰や軒端にかかる松の雪折れ」（民部卿家歌合建久六年・深雪・一六〇・定家）。「雪折れ」は、木や竹などの枝や幹が降り積もった雪の重みで折れること。類例に宇都宮景綱の「吹きまよふ嵐の風にたぐひ来て寝覚めにかかる秋の村雨」（新和歌集・秋・秋夜雨・二三一）があり、南朝の尊良親王の「きぬぎぬの嘆きならでは来し方の寝覚めにかかる物や思ひし」（一宮百首・雑・暁・八二）もある。関東縁故歌人と南朝歌人との共通の一例となる。

（雪）

155　いつまでか潮瀬の波に降る雪の跡留め難き世にも迷はむ

〔通釈〕（雪）

いったいいつまで、潮が早い波の上に降る雪が跡を留めがたいように、私も生き長らえて跡を留め難いこの世に

迷うのだろうか。

〔本歌〕 蘆そよぐ潮瀬の波のいつまでか憂き世の中に浮かび渡らむ（新古今・釈教・一九一九・行基）

〔参考〕 降る雪の晴れ行くあとの波の上に消え残れるや海人の釣り船（続古今集・冬・六五二・北条泰時。雲葉集・冬・八六四。宗尊親王百五十番歌合弘長元年・百九番判詞、四句「残れる雪や」。六華集・冬・一二六一、四句「消え残りたる」）

風をいたみ磯越す波のしばしばも跡とめ難く立つ千鳥かな（閑月集・冬・石清水社卅首歌に、礒千鳥・三一五・知家。新続古今集・冬・六六五）

〔出典〕 文永三年八月百五十首歌。ただし歌題が異なる。→7。

〔他出〕 竹風抄・文永三年八月百五十首歌・冬述懐・五八三、二句「潮干の浪に」。

〔語釈〕 ○潮瀬の波に―潮が早く流れる波の上にの意。『竹風抄』の「潮干の浪に」の句形は、例を見ない。意味もつかみ難いが、一応干潮の引き波の意に解しておく。『中書王御詠』の形が原態か。○降る雪の―「潮瀬の」からここまで序詞。○跡留め難き―（波に降る雪がその痕跡を）留め残すことが難しいの意に、生き長らえることが困難な（この世）の意が掛かる。

〔補説〕 下句に、失脚して帰洛した後の憂愁が表出されている。

百首の歌の中に

吉野山暁方の空晴れて雪の梢にかかる月影

〔通釈〕百首の歌の中で

吉野山は、まだ暗い暁方の空が晴れて、雪が積もった梢に月がかかっている。

〔参考〕吉野山照りもせぬ夜の月影に梢の花は雪と散りつつ（千五百番歌合・春四・五一〇・後鳥羽院）

別れせし暁方の空見ればまた面影の立ち返りつつ（新撰六帖・第五・おもひいづ・一五一八・知家）

空晴れて雲をさまれる暁は星の宿りも曇らざりけり（紫禁集・建保三年正月十五日・秋暁・五二六）

〔語釈〕○百首の歌→94。○吉野山―大和国の歌枕。吉野郡（現奈良県吉野郡吉野町）辺りの山々を言う。○雪の梢―『六百番歌合』の「朝戸開けて都のたつみながむれば雪の梢や深草の里」（冬・冬朝・五五〇・家房）などが早いか。「吉野」のそれについて言うのは、作者を藤原基俊と伝える「立つ日より花と見よとて吉野山雪の梢に春や来ぬらん」（新拾遺集・春上・六。夫木抄・春一・立春・五〇、二句「花を見よとて」）と慈円の「白菊の残りも花の名なれども雪の梢やみ吉野の山」（拾玉集・〔二十五首題百首〕・花・二二五三）がある

〔補説〕歌頭に合点あり。

157　東に侍りし時、歌合し侍りしに、雪を

越えやらで年のみ積もる足柄の山路の雪のさてやふりなん

〔通釈〕関東におりました時、歌合をしました折に、雪を

越えることもできないで年だけが積もる、道が悪い足柄の山路の雪もそうして降り積もり、そのまま私も古びてしまうのだろうか。

〔本歌〕 人はいさ犯しやすらん冬来れば年のみ積もる雪とこそ見れ（拾遺集・冬・二六〇・兼盛）

〔参考〕 越えやらで恋路に迷ふ逢坂や世を出で果てぬ関となるらん（千載集・恋二・七五二・家基）
足柄の関の山路を行く人は知るも知らぬも疎からぬかな（後撰集・羈旅・一三六一・真静）

〔類歌〕 越えやらで今日は暮らしつ足柄の山陰遠き岩のかけ道（続拾遺集・羈旅・七〇七・光成）

〔語釈〕 ○東―ここは関東、即ち鎌倉を言う。○歌合―未詳。○積もる―「雪」「ふり（降り）」の縁で雪が積もる意が掛かる。○足柄の山路―相模国の歌枕。相模国と駿河国の境（現神奈川・静岡両県境）の足柄峠を中心とする山地。「越えやらで」の縁から「悪し柄」が掛かる。宗尊幕下の関東祗候の廷臣藤原顕氏に「駒なめていくたび峰を越えぬらん作れる道も足柄の山」（顕氏集・同〔将軍家〕当座続歌・羈旅・三五）という作があり、これと同様。○さて―「積もる」を承けた接続詞「さて」に副詞の「さて」が重なる。○ふり―「降り」に「年」「積もる」の縁で「古り」が掛かる。

〔補説〕 宗尊は後に、参考の『後撰集』歌を本歌に「皆人の疎くなりつつ足柄の関の山路を別れ来しかな」（竹風抄・文永三年十月五百首歌・関・一一六）や「降り積もる雪の八重山道閉ぢて行く人疎き足柄の山」（同・巻二・文永五年十月三百首歌・雪・四一〇）と詠む。
歌頭の合点を白滅。

歳暮

春の暮秋の別れと惜しみ来て年の終はりになりにけるかな

〔通釈〕 歳暮

春の暮や秋の別れと惜しんで来て、ついに一年の終わりになってしまったのであったな。

〔参考〕 春の過ぎ秋の暮れ行く別れにも年経るままに堪へずもあるかな（俊成五社百首・伊勢大神宮・雑・別・九二）

春の暮秋の過ぎしに習ひにき惜しむによらで越ゆる年とは（弘長百首・冬・歳暮・四一九・行家）

根に帰る花の名残を惜しみ来て春さへ今日の暮になりぬる（御室五十首・春・六二・実房）

いたづらに今日も暮れぬと言ひ言ひて年の終はりになりにけるかな（宝治百首・冬・歳暮・二三七四・師継）

〔語釈〕 ○年の終はりに―「あらたまの年の終はりになるごとに雪も我が身もふりまさりつつ」（古今集・冬・三三九・元方）が原拠。

〔補説〕 参考歌の内、『弘長百首』の行家詠は、同じく参考歌とした俊成詠に負っているように思われるが、用詞や歌境の点で宗尊の歌に近似する。149と同様に、正確には両者の先後は不明だが、家良詠が先行するとすれば、該歌はその後の詠作となり、かつ宗尊がいち早くこの定数歌を見習っていたことになろう。

（歳暮）

159 世の中をさてもいかにと嘆く間にあはれ早くぞ年は暮れぬる

〔通釈〕（歳暮）

世の中をそれにしてもどうして、と嘆く間に、ああ早くも年は暮れてしまった。

〔参考〕この世をばさてもいかにと故郷の忍ぶに堪へぬ軒の白露（紫禁集・三〇一）

変はるらん月日も知らず嘆く間にあはれはつかに過ぎにけるかな（続詞花集・哀傷・四二五・匡房。江帥集・哀傷・一七七、初句「返るらん」四句「あはれはつかの」）

明け暮らす世の営みを嘆く間に今年も早く暮ぞ近づく（為家集・冬・建長五十二・九三二）

おしなべて同じ月日の過ぎ行けば都もかくや年は暮れぬる（山家集・冬・五七五。西行法師家集・冬・三一二）

〔類歌〕世の中の憂きを嘆くとせし程にはかなく年のまた暮れにける（柳葉集・巻三・弘長三年六月廿四日当座百首歌・冬・四〇三）

〔語釈〕○さても―感動詞。あるいは副詞とすれば、「さ」は「早く」を承けるか。

五十首の歌合に

160 人とむる憂き世の関を出でかねてまた暮れにける年のつれなさ

〔通釈〕五十首の歌合で

人を留めるこの憂く辛い世の中から出ていく関所を（自分も）出かねて、また（俗人のまま）暮れてしまった年の薄情さよ。

〔参考〕たらちねの親の別れも別れにし憂き世の関も出でがての身や（壬二集・光明峰寺入道摂政家百首・述懐・

関・六八五）

捨てやらぬ心からにや出でざらむ憂き世の関は守る人もなし（三十六人大歌合弘長二年・一七八・北条政村。続拾遺集・雑中・一二三四）

いつまでかつらきまどひをほだしにて憂き世の関を出でがてにせん（夫木抄・雑三・うきよのせき・正嘉三年毎日一首中・九五一九・為家）

月はなほ有明の山の影も見きつれなく過ぐる年の暮かな（道助法親王家五十首・冬・惜歳暮・八一七・実氏）

〔類歌〕世の中の憂きを嘆くとせし程にはかなく年のまた暮れにける（柳葉集・巻三・弘長三年六月廿四日当座百首歌・冬・四〇三）

〔語釈〕○五十首の歌合―未詳。→13。○憂き世の関―辛い世の中から出家遁世することを留める障害を言う。○年のつれなさ―珍しい句形。「年」を擬人化して言う。

〔補説〕「憂き世の関」は、参考の三首などに学んだのであろう。二首目の作者北条政村は、宗尊将軍幕下で連署と執権を務めたが、北条氏の中でも和歌に励み秀でた人物。

恋

未見恋

161　葛城（かつらき）や峰（みね）の白雲（しらくも）とばかりもまだ見ぬ人をかけて恋（こ）ふらん

〔通釈〕恋

未だ見ざる恋

「葛城や峰の白雲」の歌の、恋しい人を無縁なものとして見るだけで終わるのだろうか、という程度にでも、まだ見てもいない（遙かに遠い）人を、葛城の峰に白雲をかけてならず、気にかけて恋い慕うのだろう（その後に見ても無縁な人として終わるのであろう）。

〔本歌〕よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の峰の白雲（新古今集・恋一・九九〇・読人不知。和漢朗詠集・雲・四〇九・作者不記）

〔参考〕よそながらかけてぞ思ふ玉蔓葛城山の峰の白雲（続後撰集・恋二・七七二・良経。千五百番歌合・恋一・二三七二。秋風集・恋上・六八五）

夢にだにまだ見ぬ人の恋しきは空にしめゆふ心地こそすれ（新勅撰集・恋一・六二八・読人不知）

いにしへはありもやしけむ今ぞ知るまだ見ぬ人を恋ふるものとは（新勅撰集・恋一・六二九・読人不知）

奥山のひかげの露の玉蔓人こそ知らねかけて恋ふれど（新勅撰集・恋一・六八三・為家）

〔語釈〕○葛城―大和国の歌枕。葛城山のこと。大和と河内の国境に位置する、金剛山を主峰とする山並みの総称。○峰の白雲―本歌を承けて、遠く手の届かないような存在の恋人を暗喩する。歌題の「未見恋」と歌語の「まだ見ぬ」の縁で、「峰」に「見ね（見ず）」、「白」に「知ら（ず）」が響くか。○とばかりも―「今はただ思ひ絶えなんとばかりを人づてならでいふよしもがな」（後拾遺集・恋三・七五〇・道雅）の影響下にあると思しい「さきの世の契りありけむとばかりも身をかへてこそ人に知られめ」（新勅撰集・恋二・七五一・崇徳院。久安百首・恋・六四）のように、だけでもの意ではなく、程度にもの意に解する。○かけて―心にいつも思って。「峰」「白雲」の縁で峰

に白雲をかけての意が掛かる。

〔補説〕「よそにのみ」歌を本歌にするが、直接には、同じ歌を本歌にした良経詠に倣うか。参考の他の三首にも用詞を学んでいようか。

百首の歌の中に

162　我が恋は雪間に萌ゆる若草のはつかに見しや初めなるらん

〔通釈〕百首の歌の中で

私の恋は、雪間に萌え出る若草がほのかに見えるように、あの人をほんの少し見たのが初めなのだろうか。

〔本歌〕春日野の雪間を分けて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも（古今集・恋一・四七八・忠岑）

〔参考〕片岡の雪間にきざす若草のはつかに見えし人ぞ恋しき（好忠集・正月中・二二。後葉集・恋一・二九九・好忠、二句「雪間をねざす」）

萌え出づる草のはつかに見つるかなこれや思ひの初めなるらん（重家集・内裏百首・初恋・一四七）

野辺見れば雪間に萌ゆる若草のつままち出でて鶯ぞ鳴く（百首歌合建長八年・春・一三一・実伊）

〔語釈〕○百首の歌―→94。○雪間に萌ゆる若草の―「はつかに見」の序詞。「若草」は、恋しい人を暗喩か。○はつかに見し―雪間の若草がほのかに見えるの意から、その比喩で、人をわずかに見たの意が起きる。

〔補説〕本歌を踏まえる参考の好忠歌に倣っている感もある。また、重家詠にも非常に似通う。

不逢恋

163　雪の中に紅葉ぢぬ松の何なれやつひにつれなき人の心は

〔通釈〕逢はざる恋

雪の中でも紅葉しない松、それのいったい何だというのか。同じように最後までつれなく変わらないあの人の心は。

〔本歌〕雪降りて年の暮れぬる時にこそつひに紅葉ぢぬ松も見えけれ（古今集・冬・三四〇・読人不知）

〔参考〕雪の中につひに紅葉ぢぬ松の葉のつれなき山も暮るる年かな（続後撰集・冬・五二五・家隆。千五百番歌合・冬三・二〇四七）

世の中につひに紅葉ぢぬ松よりもつれなきものは我が身なりけり（続後撰集・雑中・一一七五・真観）

衣打つ響きは月の何なれやさえゆくままに澄みのぼるらん（新勅撰集・秋下・三二四・俊成。久安百首・秋・八四八）

岩に生ふるためしを何に頼みけんつひにつれなき松の色かな（続後撰集・恋二・七八二・伊平。続歌仙落書・内裏撰歌合に恋を・五七。万代集・恋二・建保内裏撰歌合に・二〇一四）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・恋・七七二。

〔語釈〕○松の何なれや―松といったいどのような関係にあるというのか、といった趣意。

〔補説〕『古今集』歌を本歌にするが、参考の歌うたにも措辞や趣向を学んでいようか。

（不逢恋）

164　はかなしなあらば逢ふよやとばかりに命をかけて過ぐる月日は

〔通釈〕（逢はざる恋）

はかないことだよ。もし生きていれば逢う夜の折があるかとばかりに、命を懸けて過ぎる月日は。

〔本歌〕いかにしてしばし忘れん命だにあらば逢ふよのありもこそすれ（拾遺集・恋一・六四六・読人不知）

〔参考〕明日知らぬ命をぞ思ふおのづからあらば逢ふよを待つにつけても（新古今集・恋二・一一四五・殷富門院大輔）

宿りこし袂は夢かとばかりにあらば逢ふよのよその月影（拾遺愚草・承元四年九月粟田宮歌合、寄月恋・二五五七）

はかなしな問はれぬ月日いくかとかたまきはる世に人を待つべき（露色随詠集・六三四・定家）

〔類歌〕はかなしな契らぬ中に長らへてあらば逢ふよの頼みばかりは（南朝五百番歌合・恋三・六四一・藤原経高）

〔語釈〕○逢ふよ―本歌の詞を取るが、その本歌自体、「逢ふ世」と「逢ふ夜」の両方に解し得る。該歌の場合も同様である。掛詞に解しておく。

〔補説〕『拾遺集』歌を本歌に取るが、参考歌にも学ぶところがあったかもしれない。類歌に挙げた南朝歌人経高の歌は、あるいは宗尊詠の影響下にあるかとも疑われるが、『中書王御詠』の流布の様相は不明で、経高が該歌を知り得た可能性も測り難い。

五十首の歌合に

165 恨むなよその人目をつつむとて心の外に問はぬ月日は

〔通釈〕五十首の歌合に

恨んでくれるな。無関係の他人の目を憚るといって、心ならずもあなたを問わない月日は。

〔参考〕恨むなよあるを憂き世の命だに長らへてやはまたも逢ひ見ん（続後撰集・雑中・一一七七・読人不知）

今はただよその人目をつつみこし心も身にはそはばこそあらめ（隆信集・恋四・世の中いみじうつつみし人の許へ遣はし侍りし・六一〇）

忘れじの言の葉なくはなかなかに問はぬ月日は恨みざらまし（新時代不同歌合・一五五・後嵯峨院。新拾遺集・恋五・一三八〇）

〔他出〕新続古今集・恋一・恋歌の中・一〇四六。

〔語釈〕○五十首の歌合―未詳。→13。○恨むなよ―村尾誠一和歌文学大系『新続古今和歌集』（平一三・一二、明治書院）は、「自分自身に言い聞かす」と注するが、採らない。○心の外に―心外に、不本意に。宗尊に身近な先例は「知るやとて枕だにせぬ宵宵の心の外に漏る涙かな」（続後撰集・恋一・六五〇・知家）。

〔補説〕歌頭に合点あり。

六帖の題の歌に、人づて

166 知らせばや吉野の山の桜花まだ越えぬ間の心づくしを

〔通釈〕六帖の題の歌に、人づて

（人伝にでも）知らせたいものだよ。吉野の山の桜の花を、まだ（大和へと）越えて行かない間は、人づてにばかり聞いていて、心尽くしの物思いをするように、まだ逢いに越えて行かない間の、さまざに心を尽くす恋の物思いを。

〔本歌〕越えぬ間は吉野の山の桜花人づてにのみ聞き渡るかな（古今集・恋二・大和に侍りける人につかはしける・五八八・貫之）

踏めば惜し踏までは行かむ方もなし心づくしの山桜かな（千載集・春下・落花満山路といへる心をよめる・八三・赤染衛門）

〔参考〕頼めてもまだ越えぬ間は逢坂の関もなこその心地こそすれ（六百番歌合・恋下・寄関恋・一〇〇四・家隆。壬二集・三八四）

夕づく夜花にいざよふ春はまた心づくしのみ吉野の山（如願法師集・春・建仁二年二月十三日当座御歌合に、暮山見花・三七七）

〔影響〕いかにして行きあふ坂の道なればまだ越えぬ間の苦しかるらん（李花集・恋・五三〇）

越えぬ間の心づくしよ花にだにかかりしものかみ吉野の山（春夢草・恋上・不逢恋・一四七八）

〔他出〕竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・人伝・一五四。

〔語釈〕○六帖の題の歌→98。○人づて―『古今六帖』第五の「人づて」（新撰六帖にも）。○吉野の山―大和国の歌枕。吉野山。○越えぬ間―本歌の『古今集』歌の詞を取る。大和へと越えて行かない間の意に、逢うことの一線を越えない間の意を重ねる。

〔補説〕影響に挙げた『春夢草』の一首については、外にめぼしい先行例がなく宗尊が用いている「たえだえ迷ふ」（竹風抄・五二）の語も、後出例として『春夢草』の中にこれを用いた一首（七〇七）を見出し得るので、肖柏の宗尊詠享受の問題を考える必要性を検討する材料として掲出しておく。

167　とほみちへだてたる
　君が住む方やそなたとながむれば山も幾重の遠の白雲

〔通釈〕遠道隔てたる
　あなたが住む方はそちらかと眺めると、山も幾重に連なり、遠くまで幾重もの白雲がかかっているよ。

〔参考〕思ひかねそなたの空をながむればただ山の端にかかる白雲（詞花集・雑下・三八一・忠通）
　越えわぶる山も幾重になりぬらむ分け行くあとを埋む白雲（新勅撰集・羈旅・五三三・藤原頼実）
　高島のかち野の原に宿問へば今日やは行かん遠の白雲（続後撰集・羈旅・一三一四・家隆）

〔類歌〕君が住むそなたの空を詠むれば雲も幾重のみ吉野の山（風葉集・雑三・院吉野山にこもらせ給ひて後、いづかたにかとおぼされて・一三七七・風につれなきさがの入道姫宮）

〔語釈〕○とほみちへだてたる―「遠道隔てたる」。『古今六帖』第五の「とほみちへだてたる」（新撰六帖にも）。○山も幾重の遠の白雲―「山も幾重」から「幾重の（遠の）白雲」へ鎖る。「遠の白雲」の句は、参考の家隆詠の他、定家や慈円や良経等の新古今歌人が詠み始める。

〔補説〕参考の忠通詠は実質的には本歌と見てよいであろうが、『金葉集』初出歌人の作であるので参考歌としてお

く。参考の他の両首は共に「建暦二年内裏詩歌合」の「羈中眺望」題の歌。

〔補説〕参考の頼実詠は、世上に俊成の秀歌とされた「面影に花の姿を先立てて幾重越え来ぬ峰の白雲」（長秋詠藻・二〇七。続詞花集・春下・五〇。新勅撰集・春上・五七）の影響下にあろうか。当該歌にもその面影が微かに感じられるか。

名を惜しむ

168　憂し辛しさて恋ひ死なむあとまでも埋もれぬ名の人に知られば

〔通釈〕名を惜しむ

憂鬱だ、苦痛だ。そのまま恋い焦がれて死んでしまうであろう後までも、そうした恋の埋もれることのない評判が、人に知られるならば。

〔参考〕憂し辛し安積の沼の花の名よかりにも深きえには結ばで（六百番歌合・恋上・見恋・六四五・定家。続古今集・恋一・一〇三〇）

恋ひ死なば世のはかなきに言ひおきてなきあとまでも人に知らせじ（千載集・恋一・六六六・頼輔）

身にかへて思ひけりとは知らるともさて恋ひ死なばかひやなからん（続後撰集・恋二・七八〇・慈円）

〔語釈〕○名を惜しむ―『古今六帖』第五の「なををしむ」（新撰六帖にも）。○さて―「恋ひ死なむ」と「埋もれぬ」の両方にかかるか。○埋もれぬ名―和泉式部の「もろともに苔の下にも朽ちもせで埋まれぬ名を見るぞ悲しき」（金葉集・雑下・六二〇。和泉式部集・五三六、三句「朽ちずして」）の「埋まれぬ名」が、「埋もれぬ名」（後

六々撰・九、古来風体抄・五二六、定家八代抄・六六三、詠歌大概・六八、時代不同歌合・二九七他）の形で伝わっているのが早い。

〔補説〕歌頭に合点あり。

よひのま

169 まだ宵の人言しげき真木の戸に立ちやすらひて月を見るかな

〔通釈〕宵の間

まだ宵の内の、人の口がやかましい真木の戸に、ぐずぐずとたたずんで月を見ることだな。

〔参考〕道の辺の人言しげき思ひ草霜のふり葉と朽ちぞはてぬる（拾遺愚草・関白左大臣家百首貞永元年四月・怨恋・一四七五）

木の間よりうつろふ月の影惜しみ立ちやすらふにさ夜更けにけり（万葉集・巻十一・問答・二八二一・作者未詳。続拾遺集・秋下・三五七・人麿）

宵の間にあはれまぎれのひまもがな立ちやすらはば人もこそ知れ（新撰六帖・第五・よひのま・一四五五・真観）

〔語釈〕○よひのま―宵の間。『古今六帖』第五の「よひのま」（新撰六帖にも）。○人言―「ひとごと」。他人の言葉、世間の噂・評判。「人事」（人の営み）にも解される。『万葉』（「人言をしげみ言痛み」「人言はしげくありとも」）以来、恋の逢瀬の妨げとして用いられる。

〔補説〕 参考に挙げた同じ六帖題の真観詠に触発されていようか。それにしても男女いずれの立場にせよ、恋歌としての気分が希薄な感がある。あるいは、「やすらはで寝なましものをさ夜更けて傾くまでの月を見しかな」（後拾遺集・恋二・六八〇・赤染衛門）を意識し、そこに至るまでの気分を詠じたようとしたのかもしれない。

うたたね

170 待ちわびてしばしまどろむうたた寝にあやしや人の夢に見えつる

〔通釈〕 うたた寝

恋しい人を待ちあぐねて暫しまどろむうたた寝に、妙だな、あの人が夢に現れたとは。

〔本歌〕 忘られてしばしまどろむ程もがないつかは君を夢ならで見ん（拾遺集・哀傷・むすめにおくれ侍りて・一三一二・中務）

〔参考〕 結びてし我が下紐のとけゆくはあやしや君が來べき宵かな（新撰六帖・第五・ひも・一七八〇・真観）

〔類歌〕 待ちわびてしばしまどろむうたた寝の夢にも見せよ人の面影（新後拾遺・恋二・一〇一二・善算）

〔語釈〕 ○うたたね―『古今六帖』第四の「うたたね」（新撰六帖にも）。○あやしや―「や」は詠嘆の間投助詞。○見えつる―「つる」は助動詞「つ」の連体形だが、上の「や」は疑問の係助詞ではないので、係り結びではなく余情の体言止めに解される。

〔補説〕 大きな枠組みでは、「うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」（古今集・恋二・五五三・小町）の類型の範疇に入る一首である。

同じく中務歌を本歌にする類歌が、該歌の影響下にあるか否かは不明。

契恋

171　いさや我待ち見む事も頼まれず明日知らぬ世のあだし契りは

〔通釈〕契る恋

さあどうか、私は待って見届けることも頼みにできない。明日をも知らない私の人生の中の、はかなくむなしい、あの人との契りは。

〔参考〕おのづからつらき心も変はるやと待ち見む程の命ともがな（千載集・恋二・七七〇・静縁）

頼むともいさや契りはしらとりの鳥羽山まつの同じ緑に（為家一夜百首・恋・寄山恋・六六）

明日知らぬ身には頼まずおのづから契りしままの日数なりとも（万代集・恋二・二〇七六・鷹司院按察。続古今集・恋三・一一三五）

頼まじよ身は明日知らぬはかなさの末の月日はむなし契りを（新撰六帖・第五・ちぎる・一五三八・知家）

さてもげに明日知らぬ世の契りこそ頼むにつけて悲しかりけれ（続後拾遺集・恋二・七九八・覚助）

〔類歌〕類聚歌苑・巻十三・恋三・八、四句「明日知らぬ身の」。

〔他出〕〔語釈〕○契恋―『六百番歌合』で設けられた題。○いさや我―宗尊の師の両者、即ち真観と為家に作例が見える歌句。「いさや我馴るるを人は厭ふとも暁露のおきはわかれじ」（洞院摂政家百首・恋・後朝恋・一二六四・真観）、「いさや我恋てふ事も習はぬに落つる涙のしるべがほなる」（為家五社百首・初恋・四九四・春日社）。○待ち見む

―待って見届ける意に解したが、下の「世」を男女の意に解すると、待ち受けて恋しい人と逢い見る意にも解される。○世―人生の意に解したが、男女の仲の意にも解される。両意が重なるか。○あだし契り―明確な先行例を見ない詞

〔補説〕 歌頭に合点あり。

恋の歌の中に

172 頼めとや待てとやいかにあぢきなくまだ偽りも知らぬ契りを

〔通釈〕 恋の歌の中に

（恋しい人が私に）あてにせよというのか（否というのか、それともさらに）待てというのか、ということが、どれほど張り合いがなくて。まだ嘘偽りとも知らないあの人との契りであるのに。

〔本歌〕 頼めとやいなとやいかに稲舟のしばしと待ちし程も経にけり（千載集・恋一・六八二・惟規）

〔類歌〕 さきの世にいかに契りてあぢきなく我がためつらき人を恋ふらむ（柳葉集・巻一・弘長元年五月百首歌・恋・五五）

〔語釈〕 ○あぢきなく―いわゆる連用中止法。

〔補説〕 上句は詞足らずの感が否めない。

後崇光院の「さきの世にいかに契りてあぢきなくつらき人しもしひて恋しき」（沙玉集・片思・五一三）は、類歌に挙げた宗尊詠の影響下にあるかもしれない。

（恋の歌の中に）

173　来ぬまでも慰さむものを偽りの無き世なれとは誰か言ひけん

〔通釈〕（恋の歌の中に）

（恋しい人が来ると言って）来ないまでも、（その言葉が本当ならば）心慰むのだけれど。嘘偽りの無い二人の仲であれ（もしそうならば恋人の言葉がどれほど嬉しいのに）とは、いったい誰が言ったのだろうか（そのとおり嘘偽りなので、嬉しくもなく心慰むこともないのだ）。

〔本歌〕偽りの無き世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし（古今集・恋四・七一二・読人不知）

来ぬまでも待たましものをなかなかに頼む方なきこの夕占かな（後拾遺集・恋二・六九九・読人不知）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・恋・七七八、書陵部本を底本とする新編国歌大観本四句「なき世なりとは」（時雨亭文庫本は本集に同じ）。新拾遺集・恋三・題しらず・一一三二。

待恋

174　侘びつつも曇れと言ひし月影の時雨るるしもぞ人は待たるる

〔本文〕○曇れと―底本「く。れと」（「く」と「れ」の間に補入符を打ち右傍に「も」とあり）。

〔通釈〕待つ恋

（あの古歌のように）気落ちしながらも、（月夜には来ぬ人が待たれるので）曇れ（そして雨も降ってほしい）と言った月が、（かき曇って）時雨れるのは実に、かえって人がつい待たれることだ。

〔本歌〕月夜には来ぬ人待たるかき曇り雨もふら降らなむ侘びつつも寝む（古今集・恋五・七七五・読人不知）

〔参考〕侘びつつも寝られざりけりかき曇る雨にも人のなほ待たれつつ（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・恋・二八四・藤原清時）

〔出典〕文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・待人・一五一。

〔語釈〕○待恋―『六百番歌合』で設けられた題。

暁恋

175　またやさは身はならはしのつれなさにこの暁（あか月）も起（お）き別（わか）れなん

〔通釈〕暁の恋

またもさあ、所詮身は慣れ次第であるので、（暁の侘びしい別れでも）そしらぬ様子でこの暁も起きて別れてしまおう。

〔本歌〕暁のなからましかば白露の起きてわびしき別れせましや（後撰集・恋四・八六二・貫之。拾遺集・恋二・七一五。和漢朗詠集・暁・四二〇・作者不記）

手枕の隙間の風も寒かりき身はならはしのものにぞありける（拾遺集・恋四・九〇一・読人不知）

〔参考〕起き別れつれなく見えし暁の憂かりし空ぞ形見なりける（如願法師集・恋・暁恋・六四六）

〔語釈〕○暁恋―『金葉集』から見える題だが、『六百番歌合』にも出題。○起き別れなん―「起きて別れてしまうのであろう」とも解釈される。

百首の歌の中に

176　とどまらぬ我が通ひ路の悲しきに暁ばかり関守もがな

〔通釈〕百首の歌の中で

留まらない（で帰らなければならない）私の（恋人への）通い路が悲しいので、暁だけ（私を留める）関守が欲しいな。

〔本歌〕人知れぬ我が通ひ路の関守は宵宵ごとにうちも寝ななむ（古今集・恋三・六三二・業平。伊勢物語・五段・六・男）

〔参考〕越えかねし逢坂山をあはれ今朝帰るをとむる関守もがな（長明集・恋・後朝・六六。三百六十番歌合・雑・六二九・長明、二句「逢坂山に」）

〔類歌〕関守は暁ばかりうちも寝よ我が通ひ路を忍ぶ別れに（続千載集・恋三・一三六七・後二条院。藤葉集・恋下・五二六・贈従三位為子）

待つ宵も問ふべき夜はも悲しきは我が通ひ路の同じ関守（後二条院歌合乾元二年七月・互有障恋・一五・為藤）

〔影響〕この頃の寝覚めは物の悲しきに暁ばかり時雨れずもがな（新葉集・冬・四一六・北畠顕能）

〔語釈〕○百首の歌→94。

〔他出〕新千載集・恋三・題しらず・一四一五。

〔補説〕類歌の一首目は作者に違いがある。『続千載集』の詞書は「正安四年六月五首歌合に、忍別恋といへる心をよませ給うける」、『藤葉集』の詞書は「忍別恋といふことをよみ侍りける」。どちらが正しいかは不明だが、いずれにせよ該歌との用詞の類似は無視し得ないであろう。

影響に挙げた一首は、『新千載集』所収歌としての宗尊詠に倣った可能性があろうか。

歌頭に合点あり。

177　恋歌

山の井や結ぶ契りの浅みこそ飽かで別るる袖は漬つらめ

〔通釈〕恋の歌

山の井よ、その水を掬い結ぶ所が浅いように、恋しい人と結ぶ契りが浅いので、満足することなく別れる袖は、水に漬かって濡れるように、涙でぐっしょり濡れるのであろう。

〔本歌〕結ぶ手の滴に濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな（古今集・離別・四〇四・貫之）

浅みこそ袖は漬つらめ涙川身さへ流ると聞かば頼まむ（古今集・恋三・六一八・業平）

〔語釈〕○浅み―「浅」は形容詞の語幹。「み」は接尾語で、後句の原因・理由を表す。かつ、「山の井」の縁で、その状態の場所を表す。

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・恋・七八七、初句「山の井の」四句「逢はで別るる」。

〔補説〕二首本歌取りの典型のような詠作と言える。『柳葉集』の第四句「逢はで別るる」（時雨亭文庫本）は不審。歌頭に合点あり。

（恋歌）

178　きぬぎぬに別れて後の恋しくは見ても偲ばむ有明の月

〔通釈〕（恋の歌）

後朝に恋人と別れて後が恋しいのなら、見て偲ぼう、（その別れの時の）有明の月を。

〔本歌〕恋しくは見ても偲ばむ紅葉葉を吹きな散らしそ山おろしの風（古今集・秋下・二八五・読人不知）

〔参考〕いつのまに恋しきことの積もるらん別れて後は程も経なくに（古今六帖・第四・わかれ・二三七四・作者不記）

夢のよに別れて後の恋しさをいかにせよとか君に馴れけん（万代集・雑五・三五六八・後堀河院民部卿典侍。後堀河院民部卿典侍集・三〇。続拾遺集・雑下・一三二七）

思ひ出でよ誰がきぬぎぬの暁も我がまた偲ぶ月ぞ見ゆらん（千五百番歌合・恋二・二五二一・定家）

きぬぎぬの別れしなくは憂き物と言はでぞ見まし有明の月（続後撰集・恋三・八三〇・為氏）

〔語釈〕○きぬぎぬ―衣衣・後朝。男が女の所から別れて帰ること。その朝。

〔出典〕 文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕 柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・恋・七八九。

〔補説〕 『古今集』歌を本歌にするが、参考の各歌にも学ぶところがあったか。

五十首の歌合に、恋歌

179 逢ふまでと恨みて過ぎしつれなさを月になしつる有明の空

第四句老耄之心まどひて不覚候（墨滅）

〔通釈〕 五十首の歌合で、恋の歌

（すぐ行くと言った人に）逢うまではと、恨みながら時が過ぎたその冷淡なつれなさを、（一夜だけでなく）月頃待つまでに、月が有明月の空の頃になるまでに引き延ばしてしまったことだ。

第四句、老耄の心惑ひて覚えず候ふ。（第四句は、老いぼれの心がと惑って、訳が分からなくございます。）（墨滅）

〔本歌〕 今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな（古今集・恋四・六九一・素性）

〔参考〕 逢ふまでとせめて命の惜しければ恋こそ人の祈りなりけれ（後拾遺集・恋一・六四二・頼宗）

三年まで恨みて過ぎしむくいとて明日よりつらき心あるなよ（月詣集・恋下・会後述懐といふ心をよめる・五六三・皇太后宮大進。皇太后宮大進集・逢ひて後思ひを言ふ・一六）

つれなさを命にかけて逢ふまでも待つ夜を渡る佐野の舟橋（宝治百首・恋・寄橋恋・二七四九・安嘉門院高

倉）

七夕の年の契りのあはれさを月になしても尽きせぬやなぞ（拾玉集・詠三首和歌建久元年九月廿四日参殿下有会・毎月逢恋、負・四一三七）

〔類歌〕逢ふまでと思ひしかひもなきものはまたつれなさのある世なりけり（続拾遺集・恋四・九二七・国助）

幾歳の秋をかへけむつれなさを月にかこちて長らふる身は（亀山院御集・詠十首和歌・月増久恋・二八二）

つれなさを月にぞかこつ時鳥待つにむなしき有明の空（続千載集・夏・二三六・伏見院）

つれなさを月にまがへし恨みさへ人にぞかへる有明の空（春夢草・恋下・寄月恨恋・一六〇五）

〔語釈〕○五十首の歌合―未詳。→13。○つれなさを月になしつる有明の空―新奇な措辞で難解。参考に挙げた慈円の「七夕の」歌は、七夕の一年一度の契りをたとえ一月一度になしたとしてもその「あはれさ」は尽きることがない、という主旨か。これを援用し、本歌「今来むと」歌に、「一夜」と「月頃」の両説あることを踏まえて、「つれなさ」を一夜ばかりでなく、「有明の空」の「月」の頃にまで引き延ばしてしまった、と嘆じていると解しておく。別に例えば、「憂き人を夜すがらむかふ月になして思ふ限りを泣き愁へばや」（永仁元年内裏御会・月前恨恋・一五・藤大納言典侍）のように、恋の相手の「つれなさ」を「月」に見立てたと解されなくもないが、それには詞が足りないか。為家が墨滅したとはいえ、一旦は「第四句、老耄之心まどひて覚えず候ふ」と批判したのは、その分かりにくさ故であろう。→補説。

〔語釈〕本歌の「今来むと」歌の、古来ある「一夜」説と「月頃」説とを踏まえた歌だと解した。即ち『顕注密勘』に、顕昭の「長月の有明の月とは、長月の夜の長きに有明の月の出づるまで人を待つとよめり」に対して、定家が「今来むと言ひし人を月頃待つ程に、秋も暮れ月さへ有明になりぬ、とぞよみ侍りけん。今宵ばかりは、なほ心尽

くしならずや」（日本歌学大系本。表記は改める）と応じた一連の言説である。そうだとしてもやや詞足らずの感は否めないが、古歌とそれにまつわる知識に基づいて趣向を立てた一首だと見ておく。

（五十首の歌合に、恋歌）

180　鐘の音ぞ傾く月に聞こゆなるまた有明の別れせよとて

〔通釈〕（五十首の歌合に、恋の歌）

（晨朝の）鐘の音が、傾く月につれて聞こえて来ることだ。また、有明の恋人との辛い別れをしろといって。

〔参考〕有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂き物はなし（古今集・恋三・六二五・忠岑）

惜しみかねげに言ひ知らぬ別れかな月も今はの有明の空（千載集・恋五・九四六・兼実）

初瀬山傾く月もほのぼのと霞にもるる鐘の音かな（拾遺愚草・正治二年三月左大臣家歌合、暁霞・二一五五。風雅集・春上・三〇・定家）

大方の月もつれなき鐘の音になほ恨めしき有明の空（千五百番歌合・雑一・二七二〇・定家。定家卿百番自歌合・一六一）

〔類歌〕入り方の月やは人に教へけむあかで有明の別れせよとは（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・恋・二八二・時遠）

〔補説〕類歌とは相互の影響関係ありそうだが、先後は不明。

歌頭の合点を白滅。

別恋

181　つれなしと月や見るらんきぬぎぬの別れに堪へて生ける命を

〔通釈〕別るる恋

つれなく冷淡だと月は私を見ているのだろうか。後朝の恋人との辛い別れにも堪えて生きている私の命であるのだけれど。

〔参考〕別れ路の有明の月の憂き身こそ堪へて命はつれなかりけれ（弘長百首・恋・暁別恋・四八七・為家。為家集・恋・暁別恋弘長元年院百首・一〇一五、三句「憂きにこそ」。続拾遺集・恋三・九二九、三句同上）

暁の別れに堪へて今朝の間もいかに命の暮を待つらん（続拾遺集・恋三・後朝恋・四九三・家良）

さりともと思ふ心に慰みて今日まで世にも生ける命か（続後撰集・恋三・八五七・敦忠）

〔類歌〕きぬぎぬの別れも知らぬ寝覚めにもなほつれなきは有明の月（柳葉集・巻一・弘長元年九月、人人によませ侍りし百首歌・雑・一三八）

〔語釈〕○きぬぎぬ→178。○別れに堪へて―参考の家良の『弘長百首』詠と同時期の『宗尊親王百五十番歌合弘長元年』にも「散る花の別れに堪へて命だにあらばと後の春を待つかな」（春・五二・重教）が見える。該歌との先後は不明だが、相互の影響関係は想定してもよいであろう。

〔補説〕参考の『弘長百首』の両首と該歌との先後は正確には不明であるが、一応両首を踏まえたと見ておく。為家詠は、言うまでもなく「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂き物はなし」（古今集・恋三・六二五・忠岑）を本歌にする。該歌も「有明の」歌を意識するか。同じく「有明の」歌を踏まえているであろう類歌に挙げた宗尊

詠とは、対照的な趣向と言える。

後朝

182　いかにせむかかるためしもまだ知らで行く方まよふ明け暮れの道

〔通釈〕後朝

どうしようか。このような（契る前から拒まれる）慣らいもまだ知らなくて、（恋しい人と別れて）帰って行く方角も迷い、気持のやり場にも迷っている、この逢瀬の翌明け方のまだ暗い空よ。

〔本歌・本説〕（薫は）心やましく、こわづくり給ふも、げにあやしきわざなり。しるべせし我やかへりてまどふべき心も行かぬ明け暮れの道（薫）

「かかるためし、世にありけんや」、とのたまへば、〔（大君は）心からに、憂くぞ聞き給ふ。〕（補入本文）

かたがたに暮らす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば（大君）

とほのかにのたまふを、いと飽かぬ心地すれば、（薫）「いかに、こよなう隔たりて侍るめれば、いとわりなうこそ」、など、（大君を）よろづに恨みつつ、ほのぼのと明け行く程に、よべのかたより出で給ふなり。（源氏物語・総角・六六一。日本古典文学大系本により、表記は改める。物語二百番歌合・三八九）

〔参考〕明け暗れの空にぞ我は迷ひぬる思ふ心の行かぬまにまに（拾遺集・恋二・女のもとより暗きに帰りて、遣はしける・七三六・順。能宣集〔西本願寺本三十六人集〕・人のもとよりまかり帰りて遣はす・七、二・三句「道にぞ今朝はまどひつる」。同〔書陵部本〕・人のもとにまかりて、まだ暗きにまかり帰りて・

一三九、二・三句「道にぞ今朝はまどひぬる」）

〔出典〕 文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕 竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・後朝・一四五、四句「行く方まどふ」。

〔語釈〕 ○後朝―『古今六帖』（第五・雑思）の「あした」に当たる。これは、『新撰六帖』では、「のちのあした」とあるもの。「後朝」の表記は早く、『堀河百首』（恋）に「後朝恋」と見える。○いかにせむかかるためしは―先行の類例に「いかにせむかかるためしは片し貝並びふせれど会はでやみぬる」（今撰集・恋・一五四・内新宰相）があるが、これに倣った訳でもないであろう。○まだ知らで―「慣らひ来し誰がいつはりもまだ知らでまつとせしまの庭の蓬生」（新古今集・恋四・一二八五・俊成女。千五百番歌合・二六五七）に学ぶか。○行く方―帰って行く方角の意に、比喩で、別れの悲しみに沈む心をもって行くところの意を重ねる。○明け暮れ―夜明け方のまだ暗い時分。

〔補説〕 本歌を含む本説は次のような場面。薫は大君に求愛するが、大君は中君と薫を結婚させようとする思惑があるので、それをそらす、為に薫は彼岸の果て八月二十八日に、匂宮を宇治に案内して中君の部屋に導き、二人は結ばれる。その後、薫はそれを大君に伝えつつ、またも厳しく求愛を拒まれてむなしく夜を過ごして退出する場面。歌頭に合点あり。

183　恋歌

我なれや塩焼きめ刈る海人の干さぬ袂もからき思ひも

〔本文〕○め刈る―底本「めくる」（書陵部本も同じ）。他出本文を参照し内容を勘案して、傍記の「か」に従い改める。

〔通釈〕恋の歌

私なのだ。塩を焼き、海藻を刈る、海に働く者の、濡れて干すひまもない袂も、ひどい思いも（そのような憂き目を見ているのは）。

〔参考〕しかの海人のめ刈り塩焼き暇なみ櫛げのを櫛取りも見なくに（新勅撰集・雑四・一三三七・読人不知。原歌万葉集・巻三・雑歌・二七八・石川君子、初句「しかの海人は」四句「つげのをぐしを」）

潮たるる伊勢をの海人や我ならむさらばみるめを刈るよしもがな（千載集・雑下・七一九・実国）

塩釜のうらみに馴れて立つ煙からき思ひは我ひとりなり（拾遺愚草・皇后宮大輔百首文治三年春詠送之・寄名所恋十首・二七六）

〔類歌〕つれなさの辛き思ひやまさるらんめ刈り塩焼く海人のしわざに（長綱集・こひ・三三四）

〔出典〕文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・海人・一二七、二句「塩焼きめ刈り」。

〔語釈〕○塩焼きめ刈る―「め」（海藻・海布・和布）は、食用にする海藻の総称。原拠は、参考の「しかの海人の」歌の「め刈り塩焼き」である。「塩焼きめ刈り」の形では、その参考歌を本歌にした後鳥羽院の「海人をとめ塩焼きめ刈りしがの浦に黄楊のを櫛も取る間なき頃」（後鳥羽院御集・建保四年二月御百首・雑・五九二、万代集・雑三・三二九二）がある。また、『新撰六帖』には、家良の「海人人の身を浦なみに袖濡れてめ刈り塩焼き世を渡るらん」と為家の「海松布刈り塩焼く海人の足たゆく暮るれば帰る暇なの身や」（第三・あま・一〇九一、一〇九二）

という、やはり参考の「しかの海人の」歌を本歌にした歌がある。これらに倣った可能性を見る必要もあろう。○からき―辛く過酷である意。「塩」の縁で、塩辛い意が響くか。

（恋歌）

184　逢はぬ夜も逢ふ夜も濡るる袂かな恋てふものや涙なるらん

〔通釈〕（恋の歌）

恋人に逢わない夜も逢う夜も、涙に濡れる袂であることだな。恋というものは、涙そのものなのだろうか。

〔参考〕飽かでのみ経ればなりけり逢はぬ夜も逢ふ夜も人をあはれとぞ思ふ（新勅撰集・恋三・八一二一・醍醐天皇。大和物語・百三十四段・二二一、二句に「見ればなるべし」「経ればなるべし」の異文あり）

うれしきもつらきも同じ涙にて逢ふ夜も袖はなほぞかわかぬ（新勅撰集・恋三・七八七・皇嘉門院別当）

逢はぬ夜も逢ふ夜もあかず君がため大方安きいやは寝らるる（江帥集・恋・ある人に・二一七）

忘れなむと思ふに濡るる袂かな心長きは涙なりけり（後拾遺集・恋三・七六〇・高橋良成）

思ふよりいつしか濡るる袂かな涙ぞ恋のしるべなりける（千載集・恋一・六四四・後二条関白家筑前）

恋しとも言はぬに濡るる袂かな心を知るは涙なりけり（千載集・恋一・六六二・雅通）

いさや我恋てふこともならはぬに落つる涙のしるべがほなる（為家五社百首・恋・初恋・五九四・春日）

〔補説〕用詞や趣向の点で、参考に挙げた諸詠に負っていようが、特に「濡るる袂かな」を含む三首は直接念頭に置いていようか。『後拾遺集』の一首は、本歌と見てもよいか。

歌頭に合点あり。

（恋歌）

185　恨み来し心も今はなきものをただ恋しさの音のみ泣かれて

〔通釈〕（恋の歌）

恨んできた心も今はないのだけれでも、やはりただ恋しさ故に、自然と声を上げて泣いてばかりいて。

〔参考〕恨むべき心ばかりはあるものをなきになしても問はぬ君かな（千載集・恋五・九五八・和泉式部。続詞花集・恋下・六四二。古来風体抄・六〇六。和泉式部集・久しう音もせぬ人に・四二八）

恨むべき方だに今はなきものをいかで涙の身に残りけん（万代集・恋四・二四二一・和泉式部。和泉式部集・五七二）

憂きにおひて人も手ふれぬあやめ草ただ徒らに音のみ泣かれて（和泉式部集・同じ人〔丹後〕に・五七六）

鐘の音をなにとて昔恨みけむ今は心もあけがたの空（新勅撰集・雑二・一一七二・隆衡）

悲しきは憂き世の咎と背けどもただ恋しさの慰めぞなき（続後撰集・雑下・藻璧門院御事の後、頭おろし侍りけるを、人のとぶらひて侍りける返事に・一二六三・後堀河院民部卿典侍。世を背きぬと聞きて、人のとぶらひて侍りける返事・後堀河院民部卿典侍集・二九）

〔影響〕恋しさの慰むことはなけれどもかこつかたとて音をのみぞ泣く（隣女集・巻四自文永九年至建治三年・恋・人のもとへ遣はし侍りし・二三九〇。都路の別れ・一〇・雅有、二句「慰むとしは」）

〔出典〕文永三年八月百五十首歌。→7。
〔他出〕竹風抄・巻三・文永三年八月百五十首歌・雑恋・五八〇、五句「音のなかれて」。新後撰集・恋五・一一六〇。
〔補説〕参考歌の内、特に和泉式部の両首（あるいは三首）に負った詠作かとも疑われる。

怨恋

186　いかにせむ思ひ知らぬになしかねてつらさあらはす心弱さを

〔通釈〕怨むる恋
どうしようか。恋しく思う情けを知らないことにしかねて、恨めしさを表に出す心の弱さを。
〔本歌〕世の中の憂きもつらきも忍ぶれば思ひ知らずと人や見るらん（拾遺集・恋五・九三三・読人不知）
数ならぬ身は心だになからなん思ひ知らずは恨みざるべく（拾遺集・恋五・九八四・読人不知）
〔参考〕いかにせんいへば憂き世の秋をだに思ひも捨てぬ心弱さを（寂身法師集・百首中　題四季　貞応二年・秋述懐・一五〇）
身の程は恨みてとだに頼まねば思ひ知らぬになして過ぎつつ（新撰六帖・第四・うらみず・一二五七・為家）
今ははや道踏み絶えて来ぬ人のつらさあらはす宿の夏草（宝治百首・夏・夏草・一〇二八・行家。現存六帖・なつのくさ・一一）
〔語釈〕○心弱さ―「浦風になびきにけりな里のあまの焚く藻のけぶり心弱さは」（後拾遺集・恋二・七〇六・実方）

や「問へかしな誰もさぞとは知りぬらん今朝しもしぬる心弱さは」（堀河百首・恋・後朝恋・一一九二・俊頼）が先規となる。

変恋

187　思へただ縹の帯の仮にだに結ばぬ仲のうつりやすさは

〔通釈〕変はる恋

ただ思ってみよ。変わりやすい縹色の帯を仮にさえ結ばないように、かりそめにさえも結ぶことのない男女の仲、その変わりやすさは。

〔参考〕うつりやすき縹の帯の色ぞ憂き絶えける仲をなに結びけん（明日香井集・院百首建保四年・恋・八〇八）

月草の縹の帯の色も憂しこなたかなたのうつりやすさに（新撰六帖・第六・つきくさ・二〇五九・信実）

石河やあはに契りや結び置きし縹の帯のうつりやすさは（万代集・恋四・寄帯恋・二四九八・後鳥羽院下野。続後拾遺集・恋三・光明峰寺入道前摂政家恋十首歌合に、寄帯恋を・八七九。光明峰寺摂政家歌合・寄帯恋・一二八、結句「かへりやすさは」）

麻機の賤がかり帯のあだにのみまたも結ばぬ契りなれとや（光明峰寺摂政家歌合・寄帯恋・一一五・為家）

秋の田の早稲穂のかづらゆふかけて結ぶ契りはかりにだになし（内裏百番歌合建保四年・恋・一七六・雅経。明日香井集・一二五五、三句「露かけて」。万代集・恋二・二〇六三、三句同上。新後撰集・恋一・八五六、三句同上）

〔語釈〕○変恋―『壬二集』（家百首）や『四十番歌合建保五年十月』あるいは『紫禁集』（建保五年十月十九日当座歌合）等に見えるのが比較的早い例。宗尊が撰ばせたと思しい『東撰六帖』にも見え、宗尊自身も『瓊玉集』（三九七）で詠んでいる。○縹の帯の―「帯の」から「結ばぬ」を起こす序だが、「縹の」から「うつりやすさ」も起こす。「縹の帯」は、薄い藍色に染めた帯。赤染衛門の「結ぶとも解くともなくて仲絶ゆる縹の帯の恋はいかがする」（赤染衛門集・一一〇。匡衡集・七五）や和泉式部の「泣き流す涙に堪へで絶えぬれば縹の帯の心地こそすれ」（後拾遺集・恋三・七五七。和泉式部集・二〇八）が早い例。原拠は「石川の　高麗人に　帯を取られて　からき悔する　いかなる　いかなる帯ぞ　縹の帯の　中はたいれるか　かやるか　あやるか　中はいれたるか」（催馬楽・呂・石川）に求められる（参考の三首目もこれを本にする）。○うつり―色が褪せる・色が他に付く意に、男女の仲が変わる・恋仲が変化する意が掛かる。

〔補説〕直接は参考の諸詠のいずれに負ったかは分からないが、鎌倉前期の比較的新しい措辞や趣向に従っていようか。

歌頭に合点あり。

被忘恋

188　出でがての木の間の月をかごとにて待ちしもいつの夕べなりけむ

〔通釈〕忘らるる恋

（山の端から出ても）なかなか出かねて木の間にある月を言い訳にして、（訪れない恋人を）待ったのは、いった

い何時の夕方であったろうか（今ではそれすらも虚しい程にすっかり忘れられて）。

〔参考〕山の端を出でがてにする月待つと寝ぬ夜のいたく更けにけるかな（新古今集・雑上・一五〇一・為時）

山の端を出でても松の木の間より心づくしの有明の月（新古今集・雑上・一五二二・業清）

もろともに見し夜の月をかごとにて空に心の行方待つとも（拾遺愚草員外・一字百首・恋・八三）

〔類歌〕この頃と頼めかおきし言の葉のうれしもいつの夕べなりけむ（碧玉集・稀問恋　前内大臣勧め侍るに・八八八）

〔語釈〕○出でがての木の間の月をかごとにて―既に山の端を出ている月が木の間に隠れて出かねているので、それを恋人が訪れるのはこれからだと思いなす口実にして、といった趣旨。ちなみに、書陵部本の第二句「このよの月を」は、誤写か。

〔補説〕類歌に挙げた下冷泉政為の一首は、該歌の影響下にある可能性もあろうが、政為詠全体の検証の中で改めて考えるべきであろう。

歌頭に合点あり。

遇不逢恋

189　曙（あけほの）も夕（ゆふ）べも絶（た）えぬ形（かた）見にて人を忘（わす）るる時の間（ま）ぞなき

〔通釈〕遇ひて逢はざる恋

曙も夕方も、恋の絶えることのない形見として、あの人を忘れる時は少しの間もないよ。

〔参考〕契りきや飽かぬ別れに露置きし暁ばかり形見なれとは（新古今集・恋四・建仁元年三月歌合に、逢不遇恋の心を・一三〇一・通具。新宮撰歌合建仁元年三月・遇不会恋・七一）

憂きものと誰か言ひけん暁の別れのみこそ形見なりけれ（千五百番歌合・恋三・二六二九・俊成女。万代集・恋四・二四八八。続古今集・恋三・一一七八）

故郷も秋は夕べを形見にて風のみ送る小野の篠原（新古今集新日本古典文学大系本・羇旅・九五七・俊成女、新編国歌大観本三句「形見とて」。卿相侍臣歌合建永元年七月・羇中暮・五九）

うたた寝の夢の契りの形見とて夕べの空に過ぐる村雨（宝治百首・恋・寄雨恋・二四八七・実雄）

恋ひ侘ぶと聞きにだに聞け鐘の音にうち忘らるる時の間ぞなき（新古今・哀傷・八一六・和泉式部）

ものごとに忘れがたみを留めおきて涙のたゆむ時の間ぞなき（新勅撰集・雑三・一二五五・基良）

〔類歌〕その日より落つる涙を形見にて思ひ忘るる時の間もなし（山家集・雑・かくて後、人のまゐりけるにつけてまゐらせける・一二三四）

我のみや絶えぬ記念と偲ぶらむつらきが中の有明の月（瓊玉集・恋下・逢不会恋・三九一）

〔出典〕文永三年十月五百首歌。→1。

〔他出〕竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・不忘・一五六。

〔語釈〕○曙―恋人との別れの時としては、「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂き物はなし」（古今集・恋三・六二五・忠岑）を初めとして、「曙」よりも少し前の「暁」を言うのが一般的。それを「形見」とするのも、この忠岑詠を本歌にする参考の前両首のような詠み方が目立つ。○夕べ―本来は恋人が訪れて来る時間帯だが、ここは、「来ぬ人によそへて待ちし夕べより月てふものは恨みそめてき」（続後撰集・恋五・九六八・後嵯峨院）のよ

うに、待っても恋しい人がもはや訪れて来ない時として言う。

六帖の題の歌に、ひごろへだてたる

190　花薄（はなすすき）初穂（はつほ）の枕（まくら）そのままにうら枯（か）るるまで問（と）はぬ君（きみ）かな

〔通釈〕六帖の題の歌に、日頃隔てたる

花薄の初穂、そのように初めて共寝した新枕はそのままで、花薄の穂が枯れるように、（私の）心が萎えるまで、ずっと訪れて来ないあなたであることだな。

〔本歌〕さ牡鹿の爪だに漬ちぬ山河のあさましきまで問はぬ君かな（拾遺集・恋四・八八〇・読人不知）

〔参考〕さ牡鹿の入野の薄初尾花いつしか妹が手枕にせん（新古今集・秋上・三四六・人麿。万葉集・巻十・秋相聞・二二七七・作者未詳）

そのままにまたも結ばぬ草枕いくらか塵の積もりはつらん（艶詞・過ぎにし方の事思ひ続けられて・三九）

そのままにまたこそ我はうち臥さね君は誰とか新枕する（登蓮恋百首・二八）

〔類歌〕さざれ石の岩ほをかけし新枕苔のむすまで問はぬ君かな（逍遊集・恋・寄枕恋・二三〇九）

〔語釈〕○六帖の題の歌→98。○ひごろへだてたる―『古今六帖』第五の「ひごろへだてたる」（新撰六帖にも）。○花薄―「初穂」を起こし、「うら枯るる」とも縁語。女性を暗喩か。○初穂の枕―「新枕」（男女が初めて共寝すること）の比喩か。新奇な詞。後出に「いつか今日結び置きけん花薄初穂の枕露かかれとは」（題林愚抄・恋二・逢恋・永徳御百首・六七三九・為重）の例がある。○うら枯るる―「うら」は「末」で、草木の葉先や枝先が枯れ

ること。「花薄」の「初穂」が枯れることを言う。「花薄」が女性の暗喩であるとすれば、「うら」は心の内の意で、男を待つ女の気持ちが萎え衰える意が掛かる。あるいはまた、「うら」が男の心の内だと見れば、「うら離るる」で、男の女への気持ちが遠く離れる意となろうか。前者に解しておく。

〔他出〕 夫木抄・雑十四・枕・はつほのまくら・六帖題御歌・一五三八一。続後拾遺集・恋三・題しらず・八七三。

〔補説〕 歌頭に合点あり。

191 百首の歌の中に
そのままのただ有明を限りにてまだ見ぬ月に残る面影

〔通釈〕 百首の歌の中で
ただ有明月が残っていた（逢瀬の別れ）それを限りとして、以来まだ（恋人と一緒には）見ていない月に残る、その時のままの恋しい人の面影よ。

〔参考〕 そのままの鏡の影も頼まれず変はる心の程を見せねば（為家集・〔寛元四年日吉社三首歌合〕・寄鏡忘恋・一〇八四）
郭公鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる（千載集・夏・一六一・実定）
玉津島和歌の松原夢にだにまだ見ぬ月に千鳥鳴くなり（金槐集定家所伝本・雑・月前千鳥・五六七）
露払ふ寝覚めは秋の昔にて見果てぬ夢に残る面影（新古今集・恋四・一三二六・俊成女）

〔語釈〕 ○百首の歌→94。○そのままの―「面影」にかかると解する。この句形自体は参考の為家詠が早いが、

「ただそのままの」の形で、定家の「昔をば夢にのみこそあひ見しかただそのままの袖の月影」（拾遺愚草員外・四〇一）と家隆の「いかにせむただそのままの朝ぼらけ暮るるものともなに頼みけむ」（洞院摂政家百首東北大学本拾遺・恋・怨恋・二五九）が先行する。宗尊は別に「そのままの峰の横雲消えかへりありし別れの空を恋ひつつ」（竹風抄・巻二・文永五年十月三百首歌・遇不逢恋・四四四）とも詠む。勅撰集では『風雅集』の「そのままの夢の名残の覚めぬ間にまた同じくは逢ひ見てしかな」（恋二・後朝恋を・一一三〇・永福門院）が初出。南朝の尊良親王に「そのままの途絶えを今は嘆くかな渡り初めにし夢の浮橋」（一宮百首・恋・逢不逢恋・七六）、宗良親王に「そのままの都なりせば庭の雪に厭ふばかりの跡は見てまし」（李花集・冬・四四五）がある。その意味では、宗尊と京極派と南朝が結ばれるが、特に南朝の両親王には宗尊詠からの影響を見てもよいか。○まだ見ぬ月に残る面影―やや詞足らずか。（有明の別れの時に見て以来）いまだ一度も恋人との逢瀬で共には見ていない、独りで見る月に恋しい人の面影が残っている、といった趣旨か。「また見ぬ月に」としても、（有明の別れの時に見て以来）二度と恋人との逢瀬で共には見ていない、と解されるので、大意に差異はない。参考の実朝詠の他に、御家人宇都宮泰綱にも「思ひやるみ山の奥の秋の空まだ見ぬ月に澄む心かな」（新和歌集・雑上・七九五）の作例がある。それぞれ意味合いは違っても、言わば、関東縁故歌人に共有された句。

**〔補説〕** 189の「遇不逢恋」や190の「日頃隔てたる」と同様に、一度逢ってから逢っていない、あるいは久しく絶えている恋を詠じる。次歌も同じ。

参考の実定詠は、実質的には本歌と言えるが、『千載集』初出歌人の歌であるので本歌とは見なさない。

（百首の歌の中に）

192　忘(わす)ればや逢(あ)はぬ現(うつ)になし果(は)てて、ありし一夜(ひと)の夢(ゆめ)の通(かよ)ひ路(ぢ)

〔通釈〕（百首の歌の中に）

むしろ忘れたいよ。いっそあの人とは逢っていないというのを現実にしてしまって。あの時の一夜の夢のような通い路の逢瀬を。

〔参考〕忘ればや風は昔の秋の露ありしにも似ぬ人の心に（内裏歌合建保二年・秋恋・一二一・順徳院。紫禁集・三九〇）

近くても逢はぬ現に今宵より遠き夢見む我ぞわびしき（貫之集・近隣なる人の、時時とかう言ふを、ほかにうつろふと聞きて・六三四）

住の江の岸に寄る波夜さへや夢の通ひ路人目よくらむ（古今集・恋二・五五九・敏行）

辛きをも憂きをも夢になし果てて逢ふ夜ばかりを現ともがな（新勅撰集・恋五・九七七・顕昭）

〔類歌〕あひ見ての後にまた見ぬ仲なればありし一夜ぞ今はくやしき（他阿上人集・同じき年〔正和五年〕、暁月房合点の歌・恋・六四〇）

面影の残る形見もかひぞなきありし一夜も現ならねば（慶運法印集・恋・絶恋・二二二）

〔語釈〕○忘ればや―「ありし一夜の夢の通ひ路」にかかる。一度逢ってから逢えない辛さに、一夜の逢瀬も忘れたいと言う。○夢の通ひ路―一般には、夢の中で恋人に逢いに行き来する道の意だが、ここは、「ありし一夜」とあるので、恋人に逢いに通った夢のような道、その逢瀬を言ったと解する。

〔補説〕 参考の「つらきをも憂きをも夢になし果てて」の歌のように「現」を「夢」に「なし果て」るのが常套であり、それを逆さまにして「現になし果てて」としたのが趣向。宗尊自身の「忘れずよとばかりだにも知らせばや昔語りの夢の一夜を」（竹風抄・文永三年十月五百首歌・昔逢人・一六〇）とは、同工異曲だと言えるか。

歌頭に合点あり。

六帖の題の歌に、おどろかす

193 夢ぞはや忘れ果てねと言ひもせばいかにせんとかおどろかすらん

〔通釈〕 六帖の題の歌に、おどろかす

（恋しい人に、この二人の仲は）夢なのだよ、早く忘れきってしまえと言ったならば、（今頃）あの人はさあどうしたものだろうと、思いがけず訪れて、その夢から覚めさせるように私をはっとさせてくれるのだろうか。（そうは言わなかったので訪れもしない）。

〔参考〕 逢ふことは心にもあらで程経ともさやは契りし忘れ果てねと（拾遺集・恋五・九九二・平忠依）

忘れねよ夢ぞと言ひしかねごとをなどそのままに頼まざりけん（洞院摂政家百首・恋・遇不逢恋・一三一八・為家）

夢とのみ思ひなしつつあるものを何なかなかにおどろかすらん（続後撰集・恋四・久しく絶えたる男の訪れたる女にかはりて・八七九・匡房。江帥集・四五三）

〔類歌〕 面影の憂きにかはらで見えもせばいかにせんとか夢を待つらむ（新後撰集・恋二・八七三・長舜）

〔語釈〕○六帖の題の歌→98。○おどろかす―『古今六帖』第五の「おどろかす」（新撰六帖にも）。○おどろかすらん―思いがけずに訪れているだろう（あるいは便りをしているだろう）の意に、「夢」の縁、目を覚まさせる意が重なる。訪れる意に解すれば女歌だが、便りをする意に解すれば男女どちらの立場の歌にも見なし得る。

〔補説〕参考の匡房詠は「中納言平惟仲久しくありて消息して侍りける返事にかかせ侍りける／高階成忠女／夢とのみ思ひなりにし世の中を何今更におどろかすらん」（拾遺集・雑賀・一二〇六）を踏まえる。

歌頭の合点を白滅。

むかしあへる人

194　現（うつ）、こそさも絶（た）え果（は）てめ逢（あ）ふと見し夢（ゆめ）も昔（むかし）になりにけるかな

〔通釈〕昔逢へる人

あの人と逢ったという現実は、いかにも消え果てるのだろう。逢うと見た夢でさえも、昔になってしまったのだったから。

〔参考〕現にはさもこそあらめ夢にさへ人目を守ると見るがわびしさ（古今集・恋三・六五六・小町。新日本古典文学大系本。新編国歌大観本、四句「人目をよくと」）

現にも別れし鐘の声なれば逢ふと見し夜の夢も覚めけり（続古今集・恋三・一一八一・兼実）

逢ふと見し夢にならひて夏の日の暮れがたきをも嘆きつるかな（後撰集・夏・一七三・藤原安国）

年を経て見しも昔になりにけり里は水無瀬の秋の夜の月（影供歌合建長三年九月・名所月・二一五・隆親。秋

風集・秋下・三八二、二句「見れば昔に」。続拾遺集・雑秋・五九八）

〔影響〕逢ふと見し夢は現に絶え果てて寝られぬ夜半に音をのみぞ泣く（為家集・恋・逢不逢恋・同〔文永〕八年四月四日続五十首、寂恵始入来・一〇二七）

〔語釈〕○むかしあへる人―『古今六帖』第五の「むかしあへる人」（新編国歌大観本は「むかしある人」。他本による）。『新撰六帖』にも。

〔補説〕題から判断すると、文永二年（一二六五）～三年（一二六六）の「九月十三夜六帖題歌会」（↓98）の歌と見られるので、宗尊が参考の兼実詠を『続古今集』の一首として披見し刺激されたのだとするならば、『続古今集』は文永二年（一二六五）十二月二十六日撰定完了、同三年（一二六六）三月十二日意宴催行であるので、「九月十三夜六帖題歌会」は文永三年（一二六六）であった可能性がより高いということになろう。

影響に挙げた為家詠は後出で、為家が本抄に加点・加評していることから、該歌に触発された可能性を見た。

歌頭に合点あり。

寄月恋

195 恨みじな後は忘れぬ形見ぞと言ひしにかなふ有明の月

〔通釈〕月に寄する恋

恨むまいな。後々にはこれが忘れないための形見だと（あの人が）言った、その望みどおりとなる（ただ独り眺める）有明の月よ。

〔本歌〕忘れねと言ひしにかなふ君なれど問はぬはつらきものにぞありける（後撰集・恋五・九二八・本院蔵）

〔参考〕今さらになにか恨みむ忘れねと言ひしにかなふ人の心を（続拾遺集・恋五・中務卿宗尊親王家の歌合に・一〇八四・真観）

つれなしと言ひても今は有明の月こそ人の形見なりけれ（続後撰集・恋五・九七二・公親）

つらしとは思ふものから有明の憂かりし月ぞ形見なりける（続後撰集・恋五・九七七・修明門院大弐）

〔類歌〕はかなしや言ひしばかりの形見だに面影つらき有明の月（続拾遺集・恋三・九五六・性助）

めぐり逢はん有明の月を形見ぞと言ひしばかりを思ひ出にして（玉葉集・恋五・一八〇五・良実）

〔語釈〕○寄月恋―院政期から見える題で、『六百番歌合』にも出題された。その後、定家や家隆や雅経等が詠じた。『金槐集』（貞享四年刊本）に見え、『宝治百首』に出題されている。『続後撰集』以降、『続後拾遺集』を除く各勅撰集に見える。○言ひし―主語を相手と見たが、自分にも解し得るか。

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌・恋

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・恋・七九〇。

〔補説〕参考の真観詠と該歌との先後は厳密には不明。参考の後二首は、「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」（古今集・恋三・六二五・忠岑）を本歌にする。類歌の一首目は、「今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」（同上・恋四・六九一・素性）を本歌にする。該歌も微かにこの歌が想起されるか。

寄雲恋

196　立たば立て通ふ心の隔てずは妹背の山の峰の白雲

〔通釈〕雲に寄する恋

白雲が立つなら立て。恋しい人を慕って通ふ心がそれを隔てとしないなら、妹背の山の峰の白雲よ。

〔本歌〕むつまじき妹背の山の中にさへ隔つる雲の晴れずもあるかな（後撰集・雑三・一二一四・読人不知）

雲ゐにも通ふ心の後れねば別ると人に見ゆばかりなり（古今集・離別・三七八・深養父）

〔参考〕白雲の立ち隠せども疎からぬ妹背の山は隔てざりけり（高遠集・一〇七）

もろともに通ふ心や隔つらん妹背の山の中の浮雲（道助法親王家五十首・恋・寄雲恋・八五五・光経。光経集・三四四）

東路はまた逢坂を隔つとも通ふ心に関守はゐじ（続後撰集・恋三・八四六・時朝）

白雲は幾重なりも隔つとも思ふ心の通ふべければ（明日香井集・雑・一四八六・明恵。明恵上人集・七四、四句「おほふ心の」）

〔語釈〕○寄雲恋―『六百番歌合』に設けられた題。その後、新古今歌人達や順徳院や為家等が詠じた。『宝治百首』と『白河殿七百首』に出題されている。『新古今集』以降、『玉葉集』を除く各勅撰集に見える。○立たば立て―「五月雨に恋すといふ名は立たば立て君にあふちの花し咲きなば」（古今六帖・第六・あふち・四二九二・作者不記）以来の措辞。宗尊により身近な例としては、『影供歌合建長三年九月』の「富士の嶺のけたぬ煙も立たば立て身の思ひだに人し知らずは」「藻塩火のよその煙は立たば立て我が下燃えを人に知らすな」（恋・寄煙忍恋・三四二・

資季、三七四・成茂）がある。○妹背の山―紀伊国の歌枕。「妹山」と「瀬山」の併称とも言う。「背山」は、紀ノ川北岸の伊都郡・那賀郡の境に位置し、「妹山」は紀ノ川を挟んでこれと対峙する山。大和国大和国吉野郡の吉野川の両岸にも同様のものがあり、時代が降るにつれ混同されてゆく。

〔補説〕歌頭に合点あり。

寄風恋

197 いかにせん我が身をうらの沖つ風思ふ方には寄る舟もなし

〔通釈〕風に寄する恋

どうしようか。我が身を憂く辛いと思う私は、浦の沖を風が吹いて思う方向に漕ぎ寄る舟がないように、恋しく思う方に近寄ることもできないよ。

〔本歌〕みるめなき我が身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくくる（古今集・恋三・六二三・小町。伊勢物語・二十五段・五七・色好みなる女）

〔参考〕楫を絶え由良の湊に寄る舟のたよりも知らぬ沖つ潮風（新古今集・恋一・一〇七三・良経。正治初度百首・恋・四七七）

いかにせん涙の袖に海はあれど同じ渚に寄る舟もなし（続後撰集・恋二・七六〇・家良。新三十六人撰正元二年・一五九。後鳥羽院定家知家入道撰歌・定家京極入道中納言撰・五二）

〔類歌〕波越ゆる袖の浦風立つ名にも思ふ方には寄る舟ぞなき（雪玉集・名所百首和歌・恋・袖浦・五一八〇）

〔語釈〕○寄風恋―『忠盛集』に見えるのが早いか。『六百番歌合』に出題された。○我が身をうらの沖つ風―「我が身を憂」から「う」を重ねて「浦の沖つ風」へ鎖る。○思ふ方には寄る舟もなし―「沖つ風」で、思う方向に漕ぎ寄せられる舟が無いことを言い、自分が恋しく思う人に近寄ることができないことの比喩とする。

〔補説〕歌頭に合点あり。

寄関恋

198 陸奥(みちのく)にありてふ関(せき)のいはで思(おも)ふ心(こころ)の奥(おく)は誰(たれ)か知(し)るべき

〔通釈〕関に寄する恋

陸奥にあるという関、その「磐手」の関ならず、「言わで」言わずに恋しく思う私の心は、いったい誰が知ることができるか。

〔本歌〕逢坂の関に流るる岩清水言はで心に思ひこそすれ（古今集・恋一・五三七・読人不知）

〔参考〕陸奥にありてふ川の埋もれ木のいつあらはれてうき名取りけん（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・恋・二九〇・源時清。続古今集・恋四・一二九二）

陸奥の岩手の関の言はでのみ過ぐる月日を知る人ぞなき（宝治百首・恋・寄関恋・二六〇六・公相）

思へどもいはでの関に年経ぬる我が恋ふらくは知る人もなし（宝治百首・恋・寄関恋・二六一八・顕氏）

いはでのみ思ふを下に忍ぶとて心の奥よ誰に知らせん（為家五社百首・忍恋・四九九・石清水）

〔類歌〕陸奥のしのぶばかりに道絶えて通ふ心の奥も知られず（実兼百首・恋・六八）

〔語釈〕○寄関恋―『金葉集』（正保版二十一代集本）に見える題。『六百番歌合』に出題された。○陸奥―道の奥が原義で、今の東北地方の主に東部を言う。○ありてふ関の―「ありといふ関の」の縮約。ここまで「いはで」を起こす序。参考の時清詠に学んだかと思しいが、その時清詠は「陸奥にありといふなる名取川無き名取りては苦しかりけり」（古今集・恋三・六二八・忠岑）を本歌としていて、これを宗尊も認識していたであろう。○いはで―「磐手」に「言はで」が掛かる。「関」の「磐手」即ち「磐手の関」は、陸奥国磐手郡にあった関。現岩手県盛岡市（旧玉山村）渋民付近にあったという。○心の奥―ここは「陸奥」と対照させる。より直接には参考の為家詠に負ったか。その為家詠は、父定家の「いはつつじいはでや染むる忍ぶ山心の奥の色を尋ねて」（建保名所百首・春・忍山陸奥国・一八三）に倣っていよう。

〔他出〕夫木抄・雑三・関・いはでのせき、陸奥・六帖題御歌・九五二六。

〔補説〕『古今集』の「逢坂の」歌の、「逢坂の関」「岩（清水）」「言はで」を「関」「磐手」「言はで」にずらした本歌取りと見たが、より直接には参考歌に拠ったと見ることもできる。本歌取りであってもなくても、参考に挙げた四首は宗尊が知っていたとしても不思議はない歌であり、比較的近い時代の歌の詠み方をも敏感に取り込む宗尊の姿勢が窺われる。

歌頭に合点あり。

寄野恋

199　見えぬらん浅葉（あさは）の野らに摘（つ）む花（はな）のその色（いろ）にのみ濡（ぬ）るる袂（たもと）は

〔本文〕 ○色に―底本「いろに」（「ろ」は「か」に上書き）。

〔通釈〕 野に寄する恋

分かってしまうであろう。浅葉の野原で摘む花の、その紅の色にばかり（恋の）涙で濡れる袂は。

〔本歌〕 紅の浅葉の野らに刈るかやの束の間も我忘れすな（万葉集・巻十一・寄物陳思・二七六三・作者未詳）

人知れず思へば苦し紅の末摘花の色に出でなむ（古今集・恋一・四九六・読人不知）

紅の振り出でつつなく涙には袂のみこそ色まさりけれ（古今集・恋二・五九八・貫之）

〔参考〕 見えぬらん色に出で行く秋草のまほならずとも思ふ心は（夫木抄・秋四・秋雑・弘長三年内裏百首、恋二十五首、寄草恋・五五五五・行家）

紅の浅葉の野らの露の上に我が敷く袖ぞ人な咎めそ（続後撰集・恋四・九三〇・家隆）

かさねても今ひとしほの色ぞ濃き心がはりに濡るる袂は（拾玉集・短冊・逢不逢恋・四三七八）

〔語釈〕 ○寄野恋―公重の『風情集』に見えるのが早いか。順徳院の『紫禁集』に見える他、『白河殿七百首』に出題されている。○浅葉の野ら―所在未詳。武蔵国（現埼玉県坂戸市浅羽）、駿河国（現静岡県袋井市浅羽）等の諸説がある。「野ら」の「ら」は接尾語。○その色―本歌と見た三首いずれからも、「紅」の色を言う。ただし、『万葉集』歌の「紅の」は一般に「浅葉」の枕詞とされる。

〔補説〕 歌頭に合点あり。

寄原恋

形見（かたみ）とてなに面影（おもかけ）の残（のこ）るらんかれにしものを真野（まの）の、萱原（かやはら）

〔通釈〕原に寄する恋

形見だといって、どうして恋しい人の面影が残っているのだろうか。真野の萱原がすっかり枯れてしまったように、あの人はすっかり私から離れてしまっているのに。

〔本歌〕陸奥の真野の草原遠けれど面影にして見ゆといふものを（万葉集・巻三・譬喩歌・三九六・笠郎女）

〔参考〕恨みわび思ひ絶えてもやみなましなに面影の忘れがたみぞ（新勅撰集・恋四・九二一・寂蓮）

増鏡なに面影の残るらんつらき心はうつりはてにき（宝治百首・恋・寄鏡恋・三〇六〇・為氏）

言の葉はかれにしものを露の身の何にかかりて年の経ぬらん（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・恋・二八九・藤原行俊）

吹く風や寒くなるらし白菅の真野の萱原うらがれにけり（現存六帖・かや・一三九・公基）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・恋・七九八。

〔語釈〕○寄原恋―比較的新しい題。『宝治百首』に設けられ、『白河殿七百首』にも出された。○かれにし―「離れにし」と「枯れにし」の掛詞。○真野の萱原―陸奥国の歌枕。行方郡真野郷（現福島県相馬郡鹿島町）辺り。「萱原」は、萱が一面に生える野。「萱」は、薄・茅・菅などの細長く強い葉を持つイネ科の草の総称。

〔補説〕歌頭に合点あり。

寄篠恋

201 恨みばや猪名の篠原とにかくにいでそよつらき節の繁さを

〔通釈〕 篠に寄する恋

恨みたいよ。猪名の篠原は（風が吹くと）そよと音を立てるその篠に節が多く、（あの人を忘れないけれど）あれやこれやと、そうそのように辛い折節の多さを。

〔本歌〕 有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする（後拾遺集・恋二・七〇九・大弐三位）

〔参考〕 忘られぬ昔のことも笛竹のつらき節にも音ぞ泣かれける（源氏物語・手習・七七五・中将）

逢ふことは一夜だになき笹竹のつらき節をもなほしのぶかな（白河殿七百首・恋・寄竹恋・四五六・為氏）

世の中は憂き節繁し篠原や旅にしあれば妹夢に見ゆ（新古今集・羇旅・九七六・俊成）

〔語釈〕 ○寄篠恋―新奇な題。『白河殿七百首』に設けられた題。○いでそよ―「いで」は感動詞で、さあ、ということ。「そよ」はそうだよの意に、笹が風に吹かれてそよぐ擬音が響いて掛かる。○節の繁さ―「節」は機会・折の意に、「篠原」の縁で篠（笹）竹の節の意が掛かる。他には、宗尊親王幕下に有力御家人歌人として在った後藤基隆の「知らせばや竹の籬に這ふ葛の下に恨むるふしの繁さを」（新拾遺集・恋五・中務卿宗尊親王家百首歌に、恋・一三六八）がある。影響関係が想定される。

〔補説〕 歌頭に合点あり。

寄葦恋

202 憂かりける蘆の一夜のかりねかなさて津の国の名には立ちつつ

あしかりねの一夜ゆへ　見るべし（墨滅）

〔通釈〕 葦に寄する恋

憂く辛かった、蘆の一節やその刈り根ならぬ、恋しい人との一夜限りの仮寝であることだ。そして、津の国の難波ならず名には立ち、それが評判とはなりながら。

「蘆のかりねの一よゆゑ」（の歌を）、見なければならない。（墨滅）

〔本歌〕 世の中を知らずながらも津の国のなには立ちぬるものにぞありける（後撰集・雑三・一二〇一・読人不知）

〔参考〕 難波江の蘆のかりねの一よゆゑみをつくしてや恋ひ渡るべき（千載集・恋三・八〇七・皇嘉門院別当）

〔語釈〕 ○寄葦恋―「寄蘆恋」とも。建保四年（一二一六）十一月一日の順徳天皇内裏御会に設けられた題（紫禁集、明日香井集、拾遺愚草、壬二集）。『白河殿七百首』にも出題された。○蘆の一夜のかりね―「蘆の一節の刈り根」に「一夜の仮寝」が掛かる。○津の国の名には立ちつつ―「津の国の難波」から「なには」を掛詞に「名には立ちつつ」へ鎖る。「難波」は摂津国の歌枕。今の大阪湾の淀川河口付近一帯。

〔補説〕 参考の皇嘉門院別当詠も、『後撰集』歌と並んで実質的な本歌だが、『千載集』初出歌人の一首なので本歌とは見ないでおく。為家の評語は、その皇嘉門院別当詠を見習えと言いつつ、何故かそれを撤回したもの。

寄薄恋

203 真葛這ふ山の陰野の篠薄ほにこそ出でね恨みてぞ経る

〔通釈〕 薄に寄する恋

真葛が這ふ山、その陰になる野の篠薄、その穂が出ないように、思いは表立って顕わにならないけれども、恨ん

で月日を過ごしていることだ。

〔参考〕 里遠き山の陰野の篠薄ほにこそ出でね身を嘆きつつ（新撰六帖・第六・しのすすき・一九七六・家良）

〔語釈〕 ○寄薄恋―類例としては『有房中将集』に「すすき、こひによす」（一四一）と見えるのが早いか。貞永元年（一二三二）七月四日の後堀河天皇の内裏当座歌会に設けられた題。『金槐集』（貞享四年刊本）にも見える。○ほにこそ出でね―前句の「篠薄」までが序詞で、「穂にこそ出でね」に「秀にこそ出でね」（感情が表立って顕わにならないの意）が掛かる。

〔補説〕 歌頭に合点あり。

寄花恋

204 色見えぬ花とはなにか思ひけんあらはにうつる人の心を

〔通釈〕 花に寄する恋

（あの古歌のように）色に見えないでうつろう花だとは、どうして思ったのだろうか。こんなにも目に見えてあからさまに、他へと移る人の心を。

〔本歌〕 色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（古今集・恋五・七九七・小町）

〔参考〕 いかがせん奥も隠れぬ笹垣のあらはに薄き人の心を（順徳院百首・恋・七二）

〔出典〕 文永三年十月五百首歌。↓1。

〔他出〕 竹風抄・巻一・文永三年十月五百首歌・思他人・一四六。

〔語釈〕○寄花恋―『金葉集』と『千載集』に見える題。西行を初め、定家や家隆や為家等が詠じている。○人の心を―「を」を格助詞に解した。逆接の接続助詞に解すれば、「人の心であるのに」の意、感動の間投助詞に解すれば、「人の心であるのになあ」の意となろう。

〔補説〕歌頭に合点あり。

寄鳥恋

205　山越えて別るる雁の音をぞなくいや遠ざかる人に恋ふとて

〔通釈〕鳥に寄する恋

山を越えて別れて行く雁が声を上げて鳴く、そのように、いよいよ遠ざかるあの人を恋い慕うといって私も声を上げて泣くことだ。

〔本歌〕秋風に山飛び越ゆる雁がねはいや遠ざかる雲隠れつつ（万葉集・巻十・秋雑歌・二一二八・作者未詳。古今六帖・第六・かり・四三七六・人麿、三・四句「雁がねのいや遠ざかり」）

〔参考〕葦辺より雲ゐをさして行く雁のいや遠ざかる我が身悲しも（古今集・恋五・八一九・読人不知）

住吉の有明の月をながむれば遠ざかりにし人ぞ恋しき（和泉式部続集・暁の恋・一四九）

夢と見し春は昔の秋風に別るる雁も恋ひつつぞなく（壬二集・雑・建永元年仙洞御歌合に、寄風懐旧・三〇三三）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。↓2。

〔他出〕 柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌恋・七九六。

〔語釈〕 ○寄鳥恋―『散木奇歌集』に見えるのが早いか。鎌倉時代では、『六百番歌合』に設題され、『宝治百首』にも出題されている。『新勅撰集』から『玉葉集』までの各勅撰集に見え、以後の勅撰集にも散見する。○山越えて別るる雁の―ここまで序。「音をぞ鳴く」との掛詞で「音をぞ泣く」を起こす。また、「山越えて別るる」が比喩として「いや遠ざかる」を起こす。

〔補説〕 参考の一首目の『古今集』歌を本歌と見ることもできようが、「山越えて別るる雁」は「山飛び越ゆる雁がね」に負ったと思しいので、『万葉集』歌を本歌とした。

歌頭に合点あり。

寄舟恋

206 逢ひ見しもしばしばかりぞ稲舟のいなとて人は遠ざかりにき

〔通釈〕 舟に寄する恋

逢い交わったのも暫くの間だけだ。稲舟の「稲」ならず「否」といって、あの人は私から遠ざかってしまった。

〔本歌〕 最上川上れば降る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり（古今集・東歌・みちのく歌・一〇九二）

いかがせむ我が身下れる稲舟のしばしばかりの命絶えずは（拾遺集・雑下・五七五・兼家）

〔参考〕 最上川　上れば下る　や　稲舟の　否にはあらず　や　暫しばかりぞや　あの（風俗歌拾遺・出羽風俗・三五。日本古典文学大系に拠る）

いざしらず鳴海の浦に引く潮の早くぞ人は遠ざかりにし（新撰六帖・第三・しほ・一一〇二・為家。秋風抄・恋・二四九。続古今集・恋五・一三八七）

〔語釈〕○寄舟恋―『仙洞句題五十首』に設けられた題。鎌倉殿御家人笠間時朝の家集『時朝集』にも見える。『白河殿七百首』に出題された。「寄船恋」は、覚性の『出観集』に見えるのが早く、鎌倉時代では、『光明峰寺摂政家百首』に出題された。○稲舟のいな―本歌を承けて、「稲舟の」が序詞のように働き、「稲（いな）」の同音の掛詞で「否（いな）」を起こす。

〔補説〕「人は遠ざかり（る）」の類の措辞は、参考の為家詠が早いが、他にも「いかにせん道行く駒の早くのみ我が思ふ人は遠ざかるなり」（宝治百首・恋・寄獣恋・二九九一・鷹司院帥）や「恨みわび寝ぬ夜重なる唐衣夢にも人は遠ざかりつつ」（続後撰集・恋五・九八七・惟宗盛長）や「憂きたびに袖こそ濡るれ唐衣きなれし人は遠ざかりつつ」（実材母集・寄衣恋・七八八）があって、鎌倉中期頃の小さな流行を窺わせる。該歌もその流れの中にある。歌頭に合点あり。

207　寄糸恋

夏引（なつひ）きの手引（てひ）きの糸（いと）のわくらばにくると見えしも昔（むかし）なりけり

〔通釈〕糸に寄する恋

（夏引きの）手引きの糸の「繰る」ならず、たまさかに恋しい人が「来る」と見えたのも、既に昔なのであった。

〔本歌〕夏引きの手引きの糸をくり返しこと繁くとも絶えむと思ふな（古今集・恋四・七〇三・読人不知）

濡れつつもくると見えしは夏引きの手引きに絶えぬ糸にやありけん（続後撰集・恋五・九七六・読人不知）

〔参考〕わくらばにあふ坂山の真葛くるを絶えずと誰か頼まむ（新勅撰集・恋三・八五七・道家）

筆の跡言の葉残るもろ人よ聞きしも見しも昔なりけり（定家名号七十首・無常・六二）

〔類歌〕夏引きの手引きの糸のわくらばに問はれし仲ぞ今は絶えぬる（続千載集・恋四・一四九二・藤原宗行）

〔出典〕文永二年潤四月三百六十首歌。→2。

〔他出〕柳葉集・巻五・文永二年潤四月三百六十首歌・恋・七九五。

〔語釈〕○寄糸恋―院政期の『為忠家後度百首』に設けられた題。鎌倉時代では、『光明峰寺摂政家百首』や『白河殿七百首』に出題された。○夏引きの―「夏引き」は夏に繭から糸を引き紡ぐこと。「糸」の枕詞。○手引きの糸の―ここまで「くる」の序詞。「繰る」の掛詞で「来る」を起こす。○わくらばに―たまたま、偶然に。○くる―「繰る」と「来る」の掛詞。

〔補説〕類歌は同じ『古今集』歌の本歌取りだが、定家の「わくらばに問はれし人も昔にてそれより庭の跡は絶えにき」（新古今集・雑中・一六八八）にも詞を負っていよう。

歌頭に合点あり。

寄帯恋

208 末にだにめぐり逢はなむ山城の井手の下帯契り絶えずは

〔通釈〕帯に寄する恋

（今は別れ別れとしても）将来だけでも巡り逢いたいものだ。あの山城の井手の下帯の故事のように、二人の契りが絶えないのなら。

**〔参考〕** 結び置きし契り絶えずは山城の井手の下帯めぐり逢ひなむ（光明峰寺摂政家歌合・寄帯恋・一二六・中宮但馬）

山城の井手の下帯幾よ経て結ぶ契りのあはれ知るらん（万代集・恋三・二一八〇・行能）

夫木抄・雑十五・帯・ゐでのしたおび・同〔六帖〕題御歌、帯・一五六三一。

**〔他出〕**

**〔語釈〕** ○寄帯恋―『光明峰寺摂政家百首』に設けられた題。『白河殿七百首』にも出題されている。○井手の下帯―「井手」は山城国の歌枕。綴喜郡（現京都府綴喜郡井手町）。奈良街道の途次、泉川（現木津川）の渡りの北方の地で、橘諸兄が別業を構えたという。「山吹」「蛙」が景物。その「井手の下帯」は、男女が別れて後に再び巡り逢って契りを結ぶことを寓意する。『大和物語』（百六十九段）の次の話に基づく。内舎人が御幣使いで大和国に下る途次に、井手の辺りでかわいらしい六、七歳ぐらいの女児に目をとめて、自分と結婚せよ大きくなったら来ようと言って、その形見に自分の帯を解いて与え、女児の帯を解いて受け取ったが、その後女児はこれを忘れずにいたが、内舎人は忘れてしまっていたのを、七、八年して内舎人が同じ使いで大和へ行く折に、井手の辺りに宿を取って見ると、井戸で水汲む女達がいた、という。『大和物語』本文は、「水汲む女どもが言ふやう」で、切断されているが、ここで内舎人と約束した女が出逢ったという想像が容易に働く。

**〔補説〕** 該歌に酷似する参考歌の前者に倣ったとすれば、『光明峰寺摂政家歌合』を宗尊がどのように披見し得たかが問題となろう。

歌頭に合点あり。

寄夢恋

209 今はただ我のみ通ふ夢路かないかに寝し夜か人の見えけん

〔通釈〕夢に寄する恋

今はただ、私ばかりが（あの人へと）通う夢路であることだな。いったいどのように寝た夜に、あの恋しい人が現れたのだろうか。

〔本歌〕宵宵に枕定めむ方もなしいかに寝し夜か夢に見えけむ（古今集・恋一・五一六・読人不知）

〔参考〕今はただ寝られぬ寝をや嘆くらん夢路ばかりに君をたどりて（長秋草・一八三・〔式子内親王〕）

思ひ寝の我のみ通ふ夢路にも逢ひ見て帰る暁ぞなき（新勅撰集・恋五・九七三・公衡。時代不同歌合・二五八）

〔類歌〕はかなしや我のみ通ふ思ひ寝の夢路ばかりの絶えぬ契りは（亀山殿五首歌合文永二年九月・絶恋・七五・実経）

〔語釈〕○寄夢恋―『金葉集』に見える題。鎌倉時代では、順徳天皇内裏の『歌合建保四年八月廿四日』に出題された。『万代集』や『秋風集』の他、宇都宮歌壇の『新和歌集』にも見える。『続古今集』に「五首歌講ぜられける時、寄夢恋」の詞書で「思ひつつ寝る夜も人のつらきかな夢も現の見ゆるなりけり」（恋三・一一九〇）という、宗尊の弟亀山天皇の一首が収められている。宗尊は別に、「文永元年六月十七日庚申百番自歌合」でこの題を「思ひつつ寝ればや人のとばかりに夜な夜な頼む夢もはかなし」（柳葉集・巻四・五三二）と詠じている。相互の影響関係が想定される。